
僕と幼なじみと連合艦隊

金子カズミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幼なじみと連合艦隊

【Nコード】

N7283T

【作者名】

金子カズミ

【あらすじ】

俺、工藤夏樹は平凡な高校生だ。

だが、そんな俺にも一つの問題がある、それは幼馴染の本城美樹だ。顔よし、頭よし、運動神経よしと三拍子そろっているが一つだけ致命的な抜け落ちがあった。

「夏樹、何をぶつぶつ言ってる。さっさとそれを始末しろ」

「ふざけるな！なんで俺がこんな正体不明のスライムを片付けなきゃならないんだ！」

後ろにはかわいい顔立ちに似合わないシニカルな笑みを浮かべる本

城が、そして目の前には鉄パイプを余裕で溶かす謎のスライム状物体。

「失敗作の始末はお前の仕事だろ？」

「くそおお——！なんで俺がこんな目に！」

こんな感じのマッドな少女と普通の少年が1930年の日本にタイムスリップ！

果たして歴史は、そして二人はどうなる！？

1941 開戦（前書き）

はじめまして金子です

今回唐突に書きたくなって投稿しました

書きため無し、今後の展望無しの超見切り発車ですがどうかお願いします。

1941～開戦

1941年12月7日。呉鎮守府地下60メートル。

そこに巨大な地下壕があった。

幅と奥行きは50メートル近く。天井の高さも10メートル近い巨大な代物である。

階段状に設けられた席には外部との通信を行う女性オペレーターが様々な情報を遣り取りし、重要と思われる情報は階段の最上段に設けられている司令席へと転送される。

階段の正面には巨大な電光掲示板が設置されており、現在はここ呉を中心とする中国・四国地方の地図が表示されている。地図には味方を示す青い光点が多数表示されている。

その時、その南の端に突如として赤い光点が現れた。

「レーダー網より緊急通報、高知沖に敵味方不明機多数を捕捉！」

司令席に座っていた呉防空司令部は突然の報告にも慌てることなく冷静にその報告を受け止めていた。その表情には来るべき時が来たという印象が強い。

そのままゆっくりと立ち上がり、威厳に満ちた態度で命じる。

「全軍に非常事態宣言。同時に状況を『義一号』と判断、全航空部隊は防空戦闘態勢にシフト。鎮守府在泊艦艇は緊急出港を急がせるように！」

その声に、オペレーター達が一斉に担当する部署へと情報を伝達する。

指示の直後から、オペレーターを通して各航空基地から出撃開始の報告が届く。すでに数日前から哨戒任務に当たる潜水艦部隊の報告により即応体制が整えられている。抜かりはない。

レーダーの報告が正しければ敵編隊は一時間以内にここに姿を見せるはずだ。

もつとも、そこまで生き延びればの話だが。

「我らの力、奴らに見せつけてくれる……！」

呉鎮守府沖、柱島泊地。

今そこを一群の艦艇が出港しようとしていた。

艦隊の先陣を切るのは新旧多数の駆逐艦。

見るからに俊敏そうな艦を巧みに操り衝突を避けながら、回避運動の容易な広島湾へと脱出を果たす。

それに続くのは排水量が一万トンを超える大型重巡洋艦『伊吹』高雄型にそっくりの巨大な艦橋を持っているが、主砲は三連装を三基装備。どちらかと言えば最新鋭戦艦『大和』型に類似した印象を受ける。

ソナーを装備した巨大なバルバス・バウで波を引き裂きながら先行した駆逐艦と同じく広島湾への脱出を目指す。

近くに停泊していた『大井』『北上』なども、脱出を目指しながら巧みな操舵で臨時の隊列を組んでいく。

それらの駆逐艦や巡洋艦に一拍遅れて動き始めたのは二隻の大型空母『大鳳』『海鳳』

日本海軍初の装甲空母にして、『翔鶴』型に続きアングルドデッキと蒸気カタパルトを装備した最新鋭正規空母である。

就役は三か月前で、すでに最低限の慣熟訓練を終えているが航空

隊の搭載はまだだ。

甲板の縁ではレーダーと連動した最新の射撃管制装置を備える長十センチ高角砲が鎌首をもたげるように仰角をかけ、周囲では弾薬などを抱えた兵員が忙しく走り回っている。

従来 of 空母と違い黒光りするその甲板は見るからに頑丈そうである。

そして、それらの最後に出港を開始した一隻の戦艦。

その艦影は重厚無比。いかなるものも並び立つこと of かなわない圧倒的な存在感を持ってそこに存在していた。

その名は『大和』軍縮条約の頸木から解き放たれた究極 of 戦艦。

艦首に二基、艦尾に一基 of 三基九門 of 四十六センチ砲。前後 of 中心線上と艦橋 of 両脇に装備された三連装百五十五ミリ砲。上部構造物を囲むように据え付けられた十二基二十四門 of 長十センチ高角砲に四十ミリと二十ミリ of 多数 of 機銃座。

艦橋 of トップでは複数 of レーダーがせわしなく回転し周囲を警戒している。

甲板は中央付近には木材が、艦首と艦尾は灰色 of リノリウムが張られコントラストを成している。

その全てが『大和』に圧倒的な存在感と機能美を与えていた。遅れて出港する駆逐艦を従えて進む姿はまさに海 of 王者。

その主砲には僅かに仰角がかけられ、間もなく来るであろう決戦 of 時に備えていた。

高知上空高度四千メートル。

そこには多数 of 戦闘機が編隊を組んで、進軍 of 時を今か今かと待っていた。

編隊 of 中心は三年前に採用された海軍 of 『九八式艦上戦闘機』と

その翌年に陸軍で採用された『隼』である。どちらも単葉全金属製で細身の似通った外見をしているが、九八式は強力な二十ミリ機銃を装備し、隼は操縦席の背中に装甲板を仕込み燃料タンクもゴムを利用した漏洩防止装置が装備されている。

それらに混じって旋回を繰り返しているのは海軍の最新鋭戦闘機『烈風』

強力な二千馬力級エンジンと異様なほどに広い翼面積によって、機動性と高速性を高いレベルでバランスした高性能機。最高速度は時速六百キロを超える。

それらより千メートルほど上空に存在するのは統合航空軍所属の空中管制機『天空』

最大上昇高度一万二千メートルを誇り、日本で初めて与圧キャビンを装備した六発エンジンの巨人機。

原型は海軍の大型陸上攻撃機『連山』これにさらにエンジンを二基追加。爆弾倉を廃し、代わりに多数のレーダーや無線などの電子機器を搭載している。

これらの高性能の代償として最高速度が時速四百キロ程度まで低下してしまったが、二十時間以上の連続飛行が可能な事から哨戒任務等で極めて重宝されている。

今回はその優れた電子装備を生かして、敵への妨害電波の発信と味方戦闘機隊の誘導、場合によっては空戦指揮まで行う予定だ。

また、ここにいる編隊とは別に呉の上空には陸軍の一部航空隊が展開し、もし誘導に失敗した場合最後の盾になる予定だった。

もともと、ここにいる誰ひとりとしてそのような事態は考えていない。

彼らはこの時のために血の滲むような訓練を積み重ねてきたのだ。今この時に失敗する気はさらさら無かった。

1941〜開戦〜（後書き）

次回はタイムスリップ前後です

最恐の幼馴染1（前書き）

今回から何話かかけて、タイムスリップ前後をかきますです！

最恐の幼馴染1

俺の名前は工藤夏樹。年は十五、能力も性格も平凡だと自負している。

そして唐突だが、今俺が置かれている状況を簡単に説明したい。

まず全力疾走している俺。

後方から銃を撃ちながら接近してくる騎馬隊。

そして巧妙に俺を盾にして、俺の数メートル先を走る幼馴染の本城……あつ！今こっちを見て笑いやがった！

「どうしてこうなるんだ——！」

俺の悲痛な叫びは嫌味なほどにきれいな空に消えていった。

少し時間をさかのぼり、こんなことになってしまった当日の朝。季節は春。世間ではよく変な人が増える時期などと言われているが、俺の直近には世間の標準をはるかに上回るレベルの変人が日常的にうろついているから気にはしない。

基本的に平日の俺は朝六時前に起き、一人で朝食と学校の弁当を二人前作るのが日課……というより義務だ。

義務と化している理由は後述するとして、三十分ほどで冷凍食品に頼らない、世間一般の主婦の皆さんも真っ青の出来の手作り弁当

と和風朝食が一通り出来上がる。フツ、なぜに高校一年生の男子がこんな所帯じみた技術を身につけなくてはいけないのか。ちよつと涙。

そんなことをしているうちに時刻は六時半。俺の義務の中でも最大の難関が近づいてきた。

台所を出てリビングダイニングを通過。そのまま廊下へつながらドアに立てかけてある鉄パイプを手に取る。その到る所に刻まれた傷跡が猛烈に不吉な印象を与える。

そのまま玄関に向かい、そこに吊るしてあるアメリカ陸軍謹製のデジタル迷彩の施された防弾チョッキを身につける。ご丁寧にセラミックプレートまで入った完全実戦仕様。メットと合わせ、総重量は十五キロ。

姿見を見れば、完全防御の日系アメリカ兵士の完成である。

…我ながら、朝っぱらからこんな恰好している高校生は異常だと思う。だが、俺がこれから赴く場所はこれだけの装備でもまだ生ぬるいと感じられる人外魔境なのだ。

ようやく装備を終えてこれだけで十分。現在時刻は六時四十分、残り時間は後二十分だ。

そのまま、覚悟を決めて扉をあける。

家の周囲には廃工場と空き地が広がっている。自治体が工業団地にするか住宅地にするかで紛糾した揚句、玉虫色の結果になって両方とも失敗したという悲惨な計画のなれの果てだ。

さつと玄関周りの草地を目で確認する。もしここにクレイモアもどきが仕掛けられているのを見落としたら、それ一発で今日が最悪の一日になる事が確約される。

一応赤外線カメラで確認して目的地に向かって歩き始める。幸い、すぐそこはアスファルト舗装の公道だ。いくらあいつでもそこに地

雷を仕掛けるような行動はしない…といいな…。

そのまま慎重に、僅か十メートルほど先の斜向かいの一軒家へと進んでいく。

もしこの光景を街の人に見られたら俺は確実に頭がおかしい人だと思われるだろう。だが、俺は正気だし、そもそもこの周辺に来るのは新聞屋と郵便配達を除けば俺とあいつの二人だけである。

そして、目的地の家の扉の前に立つ。

その瞬間、条件反射的に全身から冷や汗が吹き出す。ここから先は三途の川で八艘跳びをするぐらいの覚悟が必要である。失敗したら命は無い。少なくとも社会的に抹殺される事はこれまでの経験から確約されている。

覚悟を決め一気に扉を開く！

一見すると普通の日本家屋。だが、一歩進めば大昔の忍者屋敷顔負けの凄まじいからくりを満たされた地獄。背後で金属のこすれるような音がしたので振り返る。見れば扉をあげると同時に、地面に埋め込まれていた有刺鉄線が家の敷地の境界に飛び出し退路をふさいでいる。

我に退路無し。

その事実を確認して、手に握った鉄パイプの感触を確かめる。

「行くぞッ！」

叫んで、俺は突入した。

直後、扉は勝手に閉ざされ、同時に中からは俺の悲鳴と正体不明の轟音が鳴り響いた。

六時五十九分。

俺はようやく目的の扉の前にたどり着いた。

ここまでの苦労は到る所が裂けた防弾チョッキと新たな傷をその身の刻んだ鉄パイプの姿で分かるだろう。魔王城に侵入した勇者顔負けの死闘を繰り広げたのだ。

半端ない達成感とともに、目の前の扉をあける。

すると、扉のセンサーが反応して部屋の明かりが自動的につく。

LEDに照らされるそこには、これまでの和風の内装とまったく異なる印象の空間が広がっていた。

まず目につくのは各種分析装置の数々。細菌の培養装置からエックス線回折を利用した最新の分析装置まで、ありとあらゆる機器が二十畳ほどの無駄に広い部屋に据え付けられている。

それらの間の所々にかわいらしい人形やぬいぐるみが飾ってあって、それが部屋の無機質な印象を和らげている。

それらのど真ん中にある、部屋の印象から浮いている一脚の学習机。

俺がこんな早朝サバイバルを繰り広げる羽目になった元凶が、そこに突っ伏して寝ていた。

こいつの名前は本城美樹。年は俺と同じ十五。なんか違う気もするが、気遣いと天才は紙一重というのを具現化した存在だ。

すでにこの年でいくつもの重要な特許を持ち、全世界レベルでの引き抜き合戦が行われている天才児。

これで顔が不細工だったら世の女性の嫉妬も和らいだだろうが、こいつは何の手入れをしている形跡もないのに素で美少女である。体型はまだ子供で身長も低いが、そのかわいい小動物系の顔にはむしろ合っている。

運動神経も抜群で、以前道を歩いていて性質の悪い男に絡まれた時、その男が余裕で二メートル以上浮き上がり、顔面から地面に叩きつけられるのを目撃したことがある。合掌。

おっと。うつかりここまで来た俺の仕事を忘れるところだった。

「おい本城、朝だぞ、起きろ」

「んっ…」

俺の呼びかけに伏せていた頭をゆつくりと起こす。

寝起きで髪はボサボサ、口の端からはよだれが垂れているという悲惨な状況だが、寝ぼけて無垢な表情を浮かべる本城は普通にかわかった。

もつとも、それもこいつの意識が覚醒するまでの話だった。

いままでぼんやりしていた目の焦点がゆつくりと俺にあつていき、完全にそれが像を結んだところでその顔にまったく似合わないシニカルな笑みを浮かべる。

「おはよう夏樹。どうした、夜這いでもかけに来たか？」

「寝言は寝て言え」

本城のからかいを一言で切って捨てる。

「なんだ、こっちは楽しみに待ってたのに」

「いいからさっさと家まで来い。学校に間に合わないぞ」

残念そうな演技をする本城に簡潔に事実だけを伝える。

「おお、それはまずいな。今日はやってみたい事が色々あるからな」
「おれに関わらなければいくらでもやってくれ」

時刻は七時五分。

そのまま俺と本城は、トラップの解除された家を抜けて朝食と弁

当の用意してある俺の家へと移動する。

この時俺は、我が家で食べる朝食が今日で最後になるなんて考え
もしなかった。

最恐の幼馴染2

俺に起こされた本城は、そのまま枕元のボタンで屋敷のトラップを全て解除すると（この光景を見るたびに泣きたくなる。俺の苦労は一体：！）二人で朝食の用意してある俺の家へ向かう。我が家にたどり着くまでの時間、僅か二分。そこに二十分かけなくてはいけなかった俺の苦労がどれだけのものだったか！

家に着くと俺が温めなおした朝食を本城と一緒に食べる。今日の献立はアジの開きとワカメの味噌汁、白米にナスの浅漬けというオーソドックスなものだ。このときだけは本城も普通に俺の事を称賛する。こいつは万能タイプの天才だが、料理だけはからっきしなのだ。

「うむ、さすがは夏樹。今日の朝食もうまいぞ」

いつもこのくらい素直なら、俺もこんなかわいい幼馴染を持てて幸せだったかもしれない。だが、もしそんなことを言えば、後でどんなしっぺ返しが来るかわかったものではないので自重する。

「そんなに偉そうじゃなく、もう少しありがたそうに言ってくれ」

そんなこんなで朝食を終えると、本城の奴はなぜか家の風呂でシャワーを浴びる。あいつはなぜか洗面所の扉を開けっぱなしでシャワーを浴びるので、食器の片付けをしている俺にも水音がはっきり聞こえる。まるでどこかのエロゲーに出てきそうな状況だが、あんな気違い女に欲情するほど俺は追いつめられていない。

その間に、俺は食器を片づけ制服に着替える。学校指定のセンスがいいのか悪いのか微妙な紺色のブレザーだ。

シャワーを終えてこちらも下がスカートなだけで同じ制服に着替

えた本城が出て来たところで学校へ向かう。

うちの学校は家から徒歩で十五分程度のところにあるまだ新しい新設校なのだが、このあたりでは場違いな七階建ての高層建築なので家から普通に見える。しかも一階から。このあたりにどれだけ建物が少ないか理解できると思う。

校門までは二人で一緒に歩く。俺としては猛烈に嫌なのだが、本城が『奴隷は主人についていくものだろ?』と言って強制してくる。見た目美少女の本城と歩いているから周囲の視線が痛い。お前らもこいつの性格を知ったら、周囲十キロ圏から逃げだすだろうに。

高校の授業は新設校らしく単位制だったが、さすがに一年生はほとんども必修で選択の余地はない。本城ともクラスが違うのでここでお別れである。

「他の女の子に色目使ったら駄目だからね?」

別れ際にとんでもないことをのたまっていきやがった!

今のこいつの言葉は明らかに俺ではなく周囲の人間に対して言っていた。直後に俺にだけ見えるようにニヤリと笑っていたから間違いない! どれだけ俺の学生生活を邪魔するつもりだ!

聞いた瞬間、周囲の視線(特に男の)が痛いから激痛に代わった。というか物理的に刺されるんじゃないかね? というレベルの濃密な殺気が立ち込めている。

責任を取らせるべく本城を呼ぼうとするが、すでに奴の姿は無く、代わりに周囲から隠すように一部の男子が俺の周りにスクリーンを作り始めている。

「…なんでこう次から次へと…」

腕まくりをして血の涙を流しながら迫ってくる学友たちを前にして、天を仰ぐ夏樹。

俺はただ、平和な学園生活を送りたいだけなのに！

「畜生！やってやるさ！」

朝に続いて決死の戦い。勝利条件は授業が始まる八時半まで生き残る事。

二度目の戦いが、今幕を開けた。

昼休み。

休み時間の度にフォックスハントを決行する同級生達（もちろんキツネは俺だ）から死に物狂いで逃げ回り、今は連中を振り切って部室棟の屋上に避難して昼食をとっている。

「しかし夏樹、ホントにその弁当自分で作ってるのか？」

そんな俺と一緒にいる二人。いや、だからなんでここがわかるんだよ。

問いかけてきた男の名前は山田太郎。書類の見本にのってそうな名前からあだ名は『モブ』なかなかかわいそうな奴である。ちよつと同情。

イケメンとは言い難いが愛嬌のあるその顔に驚きの表情を浮かべている。

「ターくん、食べながらしゃべるのは行儀が悪いよ？」

そう言いながら山田の口元をナプキンで拭いているのは風間祥子。

本城とは違い、本物の癒し系キャラである。入学早々行われた恋人にしたい子ランキングで二位を獲得している。ついでに一位は本城である。お前らの目は腐っている。

この行動を見れば分かるが、風間は山田の事が好きらしい。はつきり言って東京に富士山を超える巨大火山が発生するよりあり得ない事態だが、なぜか起こってしまったので仕方がない。畜生！

「おい、夏樹！何しやる！」

世界のあまりの理不尽さに山田の奴にサソリ固めをかけていると、風間さんが俺に本城はどうしたのかと尋ねてきた。

そう、普段はここにいる三人と本城を合わせた四人で食事を取るのだが、今日は山田の奴があいつが来る前に食いだしたのでなし崩しに俺たちも食べだしていたのだ。

「さあ、またわけのわからない発明でもしてるんじゃないかな？」

どうでもよさそうに俺が答える。はつきり言って自分に火の粉が降りかからない限り、あいつの行動には干渉したくない。

そこに山田の奴が爆弾発言を放り込んだ。

「そういえば本城さんは今日早退するって言ってたぞ。なんでも新しい実験が最終段階だとか何とか言ってたけど」

「！！！」

はたから聞けば、これはなんでもない発言だろう。

しかし、俺の脳内では急速にあるパズルが組み上がっている。

そう、思い出してみれば今日のあいつは妙にハイテンションだったではないか！朝シャワーを浴びてる時は下手くそな鼻歌を歌っていたし、校門のところでの行動も普段ならあそこまではしない。そ

していつもなら必ず一緒に取る昼食もパスしている。

これはマズイ。あいつが普段と違う行動をするときは決まって何かが起こる。去年の大晦日はあいつが人工温泉を作るとか言って巨大なマイクロ波発生装置を庭に設置。あと一歩でゆで上がるところだった。その前は謎の密林で、火炎放射機片手に俺が必死で焼き払った。人食い人参はともかく、人食いドングリはヤバイ。いくらなんでも多すぎる。隊列を組んで街に進軍するのを必死になって食い止めたものだ（遠い目）。

違う。そんなことは今はどうでもいい。問題は今のあいつの行動だ。野放しにしたら確実に俺にシワ寄せがやってくる。それだけは阻止したい。

「すまん！俺も早退すると先生に言つといてくれ！」

「お、おい夏樹！いきなりどうした！？」

突然立ち上がって帰ると言いだした俺に山田が驚いた声を上げる。

「悪い！説明は今度する！」

この時、俺はまだ間に合うと思っていたのだ。本城の暴走を食い止めて、被害を最小に出来ると。

現実是非情だ。

まさか俺のこの行為が最悪の事態を引き起こしてしまうとは、想像もしていなかったのだ。

最恐の幼馴染3（前書き）

今回はすこし短めです。

最恐の幼馴染3

急遽自主休校を選択し、我が家へと急行する俺。

息を切らして本来十五分の道程を六分で駆け抜けた俺の目の前に存在したもの、それは…。

「なんだなんだよ、これは…」

巨大な魔方陣ばい幾何学文様の刻まれた我が家だった。

白い樹脂のようなもので細かな文字の刻まれた魔方陣が、幾重にも重ね書きしてある。その範囲は本城の家を中心に半径五十メートル近くに広がっている。どうやら我が家もその範囲に巻き込まれたようだ。

それを踏みつけながら、その中心である本城の家を目指す。

家の中に入ると、朝とは違いトラップではなく用途不明の謎の機械群が出迎えてくれた。一度くらいはかわいいメイドさんとかが迎えてくれてもいいのではと思うが、妄想の域に入りそうなので自重する。

機械から伸びる配線は、朝俺が必死の思いでたどり着いた奴の寝室兼研究室に繋がっている。

そのままその部屋へと突撃する。

「おい本城！学校さぼったあげく俺の家があんなことになっているのは一体どういうことだ！」

「なっ！なんで夏樹がここにいるの！？」

珍しく本気で慌てて反応する本城。こういうときは普通にかわいい女の子なのだが…、いかんいかん。まずは状況の確認が最優先だ。

「何を慌てている？さつさと状況を説明しろ」

「あつ…えつと…！」

まだ立ち直れない本城。

その時、本城の指が傍らのスイッチを押した。

この瞬間の『やつちまった！』という表情を、俺は生涯忘れないだろう。もちろん、恨みの対象として。

次の瞬間、スイッチから伸びる無数のコードに青白い光が走った。同時に家中に張り巡らされた配線と機械類にも同様の光が走り、そのまま外の魔方陣へと伝播していく。

一つ光ると次の一つという風に、連鎖的に光る魔方陣は増殖していく。

そして、その光がほとんどの魔方陣へと伝わった時、異変は起きた。

夏樹が踏みつけた魔方陣、その一部。

僅かにかすれた文字が奇妙に明滅を繰り返す。

しばらく点滅していたそれだが、次の瞬間一際大きな光の波が押し寄せ強引に先に進んでいく。

そして、次の瞬間。

本城の家は、中にいた俺と本城、そしてただの御近所である我が家まで巻き込んでこの世界から姿を消した。

最恐の幼馴染3（後書き）

次回は第一話の続きますです！

1941 開戦 2

高知沖、空母『ヨークタウン』

目の前の光景は圧巻だった。

『ヨークタウン』の右舷側では同型艦の『エンタープライズ』が飛沫を上げながら並んで航行している。

この二隻を取り囲むように『ポートランド級』や『ニューオーリンズ級』といった重巡洋艦に『ブルックリン級』の軽巡洋艦、それに駆逐艦が堅牢な輪形陣を敷いている。

どの艦も対空砲に仰角がかけられ臨戦態勢にある事をうかがわせる。

これとほぼ同規模の艦隊が二十カイリほど離れた海面にもう一つ展開しているのだ。

総戦力は空母4、巡洋艦12、駆逐艦24、搭載機合計は四百機に迫る機動部隊だ。

指揮官は『ブル』の愛称で知られる海軍最強の猛将、ハルゼー中将。

目的は呉軍港に配備されている日本軍主力艦の撃滅。そして、基地に隣接して建設されている『工藤技研』研究所の破壊。

水兵達はこの大艦隊を見て、自らの勝利を確信していた。

相手は所詮ニップだ。いくら数を揃えても白人である我々にはかなわないと。

このハルゼーの演説で、その確信は一層強まった。

しかし、マイクを置いたハルゼーの表情は陰しかった。

「…とうとう、来てしまったか…」

司令部の他の面々も、複雑な表情を浮かべている。

彼らは理解していた。この戦争が合衆国に利益をもたらさない事を。それどころか不利しか生まない事を。

さらに、ハルゼーは個人的にある人物を恐れていた。

（あの鬼才がこの事態を想定していないはずがない…）

脳裏に浮かぶのは幼い顔つきの一人の少女。

五年前にマリアナでの演習の折に一度だけ話す機会があった、静かなる狂人。

今から彼らが攻撃するのはその牙城。油断すれば一瞬で食い殺される。

すでに二次にわたる攻撃隊は出撃を終えている。

後は、戦果の報告を待つしかなかった。

高知県上空高度八千メートル。空中管制機『天空』

暗めの照明で照らされる機内は、まるでSF小説に出て来る宇宙船のようだった。

機体の内壁に沿うように複数の大型無線が置かれ、あちこちにあってブラウン管が薄暗い光を放っている。

それらに囲まれた機体中央には、レーダーなどの情報を客観的に表示する戦況表示板が置かれ、自機的位置を中心に多数の表示が水性ペンで書かれている。

それら全てがもつともよく見える位置に置いてある指揮官席に腰かけた女性士官が、傍らの無線で呼びかける。長い漆黒の髪と小柄な体はおしとやかな日本美人だが、その眼には戦意が溢れている。

「『カモメ』より各隊、状況を報告」

『こちら「ツバメ」異常無し』

『こちら「サシバ」同じく』

『こちら「トンビ」楽な仕事をくれると嬉しい』

『こちら「ライチョウ」一機エンジン不調で引き返させた。他に異常無し』

この通信における符号は『ツバメ』と『サシバ』が海軍基地航空隊、『トンビ』と『ライチョウ』が陸軍飛行戦隊である。

それぞれの返事を聞いた彼女は、一拍置いて宣言した。

「各隊了解。これより本戦域における一切の航空指揮権の掌握を統合航空軍中佐、新庄マリは宣言します！」

それに対し、一斉に返事が返る。

『「ツバメ」了解』

『「サシバ」了解』

『「トンビ」了解！』

『「ライチョウ」了解』

返事を聞いたマリが指示を出す。

「全隊、方位190に進軍開始！前衛は『ツバメ』『サシバ』。残り
は二隊に後続せよ。追って指示を出す」

『『『『了解！』『』『』』』

全機が指示に従い移動を始めたのを戦況表示板で確認すると、マリはそのまま視線を敵編隊の表示に向ける。

敵編隊は大きく四つに分かれて飛んでいた。おそらく二個の艦隊が展開していてそれぞれが戦闘機を先行させて後方から雷爆撃機編隊が続いていると思われた。総数はおよそ百五十。

対するこちらは陸海軍戦闘機隊の混成部隊で機数は百近い。さらに呉上空には後詰の陸軍航空隊一個戦隊が控えている。

それだけ確認すると、マリは椅子に腰を下ろして傍らのボトルから少し水を飲む。

敵戦闘機を多めに見積もり半数の七十機前後だとしても、こちらの数の優位は崩れようがない。性能差とこちらの航空管制を加味すればその差はさらに開く。

「…意気込んでる艦隊には悪いけど、敵は全て空の部隊で仕留めさせてもらっわ」

高知沖五十キロ。アメリカ海軍機動部隊第二次攻撃隊。

編隊は重苦しい空気に包まれていた。

まだ彼らは敵と遭遇したわけではない。

理由は、先だって出撃した第一次攻撃隊の状況だった。

はじめは全機勝利を確信した様子で、予想より早く迎撃に出撃し

た日本軍戦闘機隊との交戦に突入した。

だが、無線から聞こえる声は、あつという間に救援を求める悲鳴のような声に代わった。

『なんなんだ！ジャップの戦闘機があんなに速いなんて聞いてないぞ！』

『ケツを取られた！誰か助け…』

『こちら攻撃隊！敵戦闘機の攻撃を受けている！戦闘機隊はこつちを援護してくれ！』

この直後、彼らの使用している周波数隊に強力な妨害電波が発信され始め、機体間の交信は手信号か発光信号しか使えなくなり、第一次攻撃隊の状況は完全に分からなくなった。

そして、彼ら第二次攻撃隊はとつくの昔に第一次攻撃隊が帰還するのとすれ違っているはずなのに一向にその姿は見えなかった。

『全滅』

全員の脳裏にその言葉が浮かんだ。

その時、前衛を務めている戦闘機隊が急激に高度を上げ始めた。敵機を視認したのだ。

後方の攻撃隊も密集陣形をとり相互の火力支援を行いやすくする。直後、高度を取った敵戦闘機が急降下しながらこちらの戦闘機隊と交差する。

直後、火や煙を吹きだしながら数機の戦闘機が撃墜される。墮ちたのは、全てこちらの護衛戦闘機だった。

「…！」

あまりに一方的な戦果に衝撃を受けるアメリカ軍パイロット達。

急降下していった敵機は、そのまま千メートルほど降下すると機首を引き起こして今度は急上昇しながら襲いかかる。

今度はこちらでも急降下で応戦する。そして交差。

今度は敵機にも被害が出て、二機が撃墜される。一機など一瞬で機体が消滅するような大爆発を起こしていた。

だが、こちらの被害はさらに大きく五機ほどがそのまま引き起こしをかけることなく海面へと突っ込んでいった。

戦闘機同士の戦いを、後方の攻撃機隊は祈るように見つめる。

その時、太陽が一瞬陰った。

次の瞬間、編隊の最後尾の数機が一瞬で撃墜される。

「敵機発見！」

遅ればせながら後席の搭乗員から敵機発見の報告が届く。

「クソッ！連中は罔だってことか！」

前方で交戦中の戦闘機隊は最初に襲ってきた敵戦闘機への対処に追われ、こちらを支援する余裕はない。

攻撃隊の後方からは多数の敵戦闘機が風防に陽光を反射しながら一斉に押し寄せてくる。

後席の搭乗員が必死に旋回機銃を放つが、敵機は軽快な機動でそれを躲し、まるで糸で引き寄せられるかのようにこちらとの距離を詰めていく。

距離を詰め切った敵機は、両翼や機首に仕込んだ機銃を一斉射すると即座に離脱していく。追撃の銃撃を放つ隙もない、敵ながら見事な襲撃戦法だった。

それでも、運悪くこちらの攻撃を受ける機体もある。

放たれた銃弾がコクピットを直撃した機体は、蜘蛛の巣城にひび割れた風防の中を真っ赤に染めてしばらくまっすぐ飛んだかと思う

と、そのまま真つ逆さまに墜落して行つた。

翼の弾倉に被弾した敵機は一瞬でバラバラに碎け散り、炎の塊から機体の残骸を撒き散らしていく。

だが、必死の反撃にもかかわらず、堕ちていく機体は明らかにこちらの攻撃機の方が多い。

機銃に操縦席を一舐めされた機体は、機体の原型をとどめたまま真つ逆さまに海へと突っ込んでいく。

エンジンに被弾した機体は黒い煙を吐きながらも、なんとか飛び続けていたが、編隊から落伍したところでとどめを刺される。

腹に下に抱えている爆弾に機銃の直撃を受けた機は、一瞬で爆散し周囲の味方機を巻き添えにする。

爆弾を投棄する余裕すらない。

このままここで全滅か？

だれもがそんな思いを感じ始めた時、敵機の襲撃がパタリと止んだ。

唐突に離れていく敵編隊に、攻撃機のパイロット達はぽかんとした表情をする。

このままいけば自分達が全滅する事を覚悟していたからだ。

「……ここまで来て、引くわけにはいかん……」

この場で爆弾を投棄して撤退するという選択肢が頭をよぎったが、すでに敵艦隊はその視界にとらえつつある。これまでの道程で払った犠牲を思えば、到底容認する事は出来なかった。

「全機、進軍を継続！仇敵を討ち果たせ！」

編隊長の判断で、進軍は継続される。

そこに、さらなる地獄が待っているとも知らずに。

広島湾上。戦艦『大和』

「ほう。今度は迎撃を突破してきたか」

その露天艦橋で呟くのは艦長の高柳大佐。

周囲には対空見張り要員と伝令が控えている。

先の第一次攻撃は味方の戦闘機隊が太平洋上で殲滅してしまい、艦隊には出番が無かった。

だが、今度は迎撃が間に合わなかったようで、敵編隊は明らかに数を討ち減らされ編隊を乱れさせながらも艦隊の上空までたどり着く事に成功したようだ。

「もつとも、それが奴らにとって良きことかどうかは分からないがな」

すでに『大和』を含む艦隊各艦は高角砲に仰角をかけ、いつでも射撃できる態勢にある。射撃管制レーダーもすでに予熱を終え、敵編隊にその指向性電波を照射している。

接近する敵編隊を見ながら、高柳は館内放送のマイクに手を伸ばす。

「総員傾聴！これより本艦は敵航空部隊との交戦に突入する！総員、主砲射撃に備えよ！」

次の瞬間、今まで静かに正面を向いていた主砲が敵編隊に向かっ

てゆっくりと旋回を始める。

同時に艦の奥深くに置かれた戦闘情報管制室（CIC）が、レーダーからもたらされる射撃情報を主砲射撃専用の電算機に入力する。距離、高度、速度を筆頭に、自艦の速度、気圧、湿度、風速、緯度まで入力し、必中の射線を割り出す。

甲板の対空砲要員のうち、シールドに守られていない者達は各所に設けられた退避所に避難する。もし甲板にいるときに主砲が放たれれば、彼らは爆圧で人間の姿を放棄する事になる。

水圧駆動式の主砲は、しばらく微調整を行い砲身を僅かに上下させ、やがて一点でぴたりと止まる。

すでに砲弾は装填され、後は引き金を引くのを待つだけだ。

「射撃準備完了！」

CICにいる砲術科の兵員の報告を受け、露天艦橋のすぐ下に控えている砲術長が高柳に許可を求める。

「準備完了、いつでもいけます！」

それにゆっくりうなずいた高柳は、射撃許可を与える。

「よろしい。本艦の力、やつらに思い知らせてやれ」

次の瞬間、全艦でサイレンが鳴り響く。そして、三十秒後。

――――！

とても人間の耳では収まりきらない巨大な砲声が轟いた。

砲身からは、艦の全幅をはるかに超える長さの砲炎と共に、音速の二倍以上の速度で九発の対空散弾が放たれる。

放たれた砲弾は、事前に指定された時間飛翔した後、時限信管が作動、数千もの弾片を周囲にばらまく。

露天艦橋で敵の動きを見ていた高柳だが、砲煙で一瞬その姿を見失う。

その砲煙が消えた時、そこにあったはずの敵編隊の姿はどこにもなかった。

「…他の艦に恨まれるかな？」

『大和』の初陣は、完勝に終わった。

1941 開戦 3

高知沖アメリカ軍機動部隊。

そこは沈痛な空気に包まれていた。

出撃時とは明らかに違う種類の緊張感が艦隊に漂い、対空砲に取り付いている水兵達の表情も強張って見える。

「…消耗率九割以上だと…」

意気揚々と出撃した攻撃隊。そのほとんどは生還する事ができなかった。

帰還したのは艦爆が二機と攻撃機が一機、それに戦闘機が十二機のみだった。

出撃した総数が三百機に迫る数だったのに、全てかき集めても十五機しか生還しなかったというのは異常だった。

「生存者の報告によれば、敵はかなり早い段階で迎撃機を出撃させ、第一次攻撃隊はクレから百キロ、第二次攻撃隊も五十キロ前後の距離で敵戦闘機の接触を受けています」

航空参謀が報告する。

「ただ、第二次攻撃隊はどうやら目標上空まで到達したようなのですが、そこで正体不明の爆発…おそらくは新型の対空兵器の攻撃を受け全滅したようです」

戦闘機のパイロットが正気だったという前提ですが。

そう参謀は付け足した。すでに生存者の半数が発狂し鎮静剤を打たれ医務室に眠っている。

「撤退する」

ハルゼーは簡潔に告げた。

「すでに航空戦力は壊滅状態なのだ。一度帰らないなら俺達はただの空箱に過ぎなくなる。ましてやここで母艦まで失ったら、艦隊の再建に一年は掛る」

俺はそんなに長い間、後方で待機などできんからな。復讐を誓い、戦意溢れるその様子に安堵する参謀達。

凶報が舞い込んだのはその時だった。

高知沖上空。日本軍航空隊。

それは、五年以上の時間と膨大な資金を費やして作り上げられた地上最強の航空戦力だった。

先陣を切るのは敵直掩機を殲滅する任務を負う制空隊。

主力を占めるのは海軍の主力戦闘機九八式。それに陸軍の『隼』や最新鋭の『飛燕』も中隊単位で含まれている。

それに続くのは、海軍の陸攻部隊。

主力は葉巻型の胴体が特徴の九八式陸攻。両翼に内蔵されたインテグラルタンクが圧倒的な燃料搭載量と長大な航続距離を約束している。

胴体内の爆弾倉には陸攻用に開発された重量一トンの大型魚雷が積まれている。

それより少し先行しているのが陸海軍で統一して採用された高性能双発攻撃機『銀河』

空荷で最高速度六百キロに迫る驚異の高速機。三千メートル付近を飛行する主力より千メートルほど低い位置に展開している。

彼らの役目は両翼下にぶら下げている多数のロケット弾と胴体内の二百五十キロ爆弾による反跳爆撃で護衛艦のスクリーンを破壊する役目が与えられている。

逆に高度六千メートルの高みに位置しているのは統合航空軍の戦略爆撃機『連山』

日本初の四発陸上機であり、軍全体でも四十機前後しか配備されていない新鋭機である。

それが三十機以上も緊密な編隊を組んで飛行している。

彼らの役目は高高度からの水平爆撃。爆弾倉には総重量千五百キロに及ぶ巨大誘導爆弾が搭載されている。誘導は無線方式で母機の爆撃手が行う。

はつきり言って母機の危険が大きい戦法だが、事前に対空火器を制圧した上で雷撃と組み合わせれば十分な威力を発揮すると思われる。最悪の場合、高度を一万メートルまで上げて敵戦闘機や対空砲を振り切り単独で行う事も視野に入れている。

今回投入する三十機前後という数は、無線が混信を起こさない限界の数だった。

そのさらに上空には、先の防空戦の序盤の指揮を執った電子戦機『天空』の姿もある。

防空指揮は陸地上空に入った地点で地上の管制施設に移行される。その後は沖合で敵艦隊の索敵情報を収集していた。

総数は二百五十機を超える、一度の航空攻撃としては史上最大規模の戦力だった。

「全機傾聴！」

指揮官であるマリが無線に叫ぶ。

「敵艦隊は二つに分かれている。それぞれ空母二隻を中心に輪形陣を組み、周囲を巡洋艦と駆逐艦十隻以上がスクリーンを展開している。作戦は通常通りに行く。各機の奮闘に期待している」

『『了解！』』

全機が一斉に無線に叫び、混線で一瞬ノイズが走る。

次の瞬間、先陣を切る制空隊が一気に加速。同時に『銀河』隊も速度を上げ、同時に高度を千メートル以下に一気に落としていく。

『九八式陸攻』はこれまでの陣形を崩し、両翼を大きく前に突き出した鶴翼陣を作る。このまま敵艦隊に襲いかかり挟撃する姿勢だ。

『連山』隊はこれまでの密集陣を崩し大きくバラけている。敵戦闘機の襲撃が危険だが、周囲には一個中隊の戦闘機隊が護衛に付き抜かりはない。密集しすぎると相互の爆撃を邪魔しかねず、また同一の標的を狙う可能性が高まってしまふ。それでは無駄弾だ。この爆弾なら一発で戦艦だって沈む。二発目は無い。

「制空戦闘機隊、敵直掩機と交戦に突入！」

オペレーターの一人が鋭い声で報告を上げる。

それを聞き、マリは全隊に命じる。

「全軍突撃！一群は雷撃隊が、二群は水平爆撃隊が攻撃しなさい！我らの空に土足で踏み入った罪、連中に思い知らせてやれ！」

前衛制空隊。

「全機、突撃！」

隊長を務める加藤陸軍少佐は、視界に敵機を捉えた瞬間、全機に突撃を命じた。

一斉にスロットルを最大に叩きこみ、頭が後ろに引つ張られるような感覚とともに他の機体を置き去りにして加速する機体。

加藤が操る機体は『飛燕』陸軍のこれからを担う最新鋭機。

液冷エンジン搭載により鋭いくちばしのような形状になった機首は、見るからに空力特性がよさそうで、実際にその性能も期待を裏切らない。

最大速度は時速六百キロを超え、海軍の『烈風』に格闘性能では及ばないものの、急降下のダイブスピードでは、八百キロ近くを出しても問題ない圧倒的な強度を誇る。

武装は十二・七ミリ機銃を機首と両翼に二門ずつ、計四門を搭載。『烈風』が二十ミリ四門を搭載している事を考えると若干見劣りする印象を受けるが、『烈風』が艦載機としてそれ単独で戦闘機相手の制空戦闘から重爆相手の戦闘までこなさなくてはならないのに対し、『飛燕』は純粹な対戦闘機戦だけを想定して設計されている。単発の戦闘機相手なら、この火力で十分だった。

初陣となるこの戦いで『飛燕』はその力を最大限に発揮しようとしていた。

最大速度で敵との距離を詰める加藤とその僚機。

それに対して敵戦闘機も正面からこれを迎え撃つ。

視界の中で見る見るうちに大きくなる太い胴体の敵戦闘機。

次の瞬間、加藤は直感で操縦桿の引き金を引く。

ダダダダッ！

軽快な音とともに放たれる機銃。

しかし、これは相手の胴体のすぐ下を掠めて終わる。距離を短く見積もりすぎた。

同じように敵の攻撃も『飛燕』のすぐ上を掠めて終わる。どうやらこちらの高速に幻惑されたようだ。

そのまま至近距離で交差する。

バックミラーを確認すると、交差した敵編隊は後方で味方の機体と格闘戦に突入している。手出しは無用だ。

周囲を見れば、至る所で敵味方入り乱れる乱戦に突入している。だが、その規模は急速に縮小しつつあった。

なぜか？

それは日本側が数でアメリカを圧倒していたからだった。

こちらの制空隊の機数は六十機以上。

それに対し、アメリカ軍の直掩機は多く見積もっても三十機に届かない。

しかもこちらには後詰の直衛隊三十機以上が攻撃隊のそばに控えている。

「初陣で戦果無しか……」

残念そうに加藤が呟く。できればちゃんと敵機を撃墜して『飛燕』の初陣を飾りたかった。

その時、無線に指示が飛びこむ。

『制空隊に要請。攻撃本隊に接近する機影あり。数三十前後。直衛隊だけでは突破される恐れがある、動ける機体は支援に当たれ』

そのまま方位と高度が指示される。高度は六千メートル前後。こちらの接近を受けて緊急発艦した機体らしい。このままでは『連山』と激突する。直衛機は一個中隊八機。これでは阻止しきれない。

一方、こちらの高度は三千メートル前後。これから緊急上昇が必

要だ。

「各機、『連山』隊を支援する。続け！」

加藤の号令に、僚機が一斉に返事を返す。

そのまま一気に上昇をかける。

その速度は、周囲の九八式や『隼』とは比べ物にならない。あっという間に距離を広げていく。

薄い雲を抜けると、敵機の風防が光を反射するのが見えた。

「当たれ！」

そのまま一気に距離を詰め、至近距離から機銃を放つ。

敵機はどうやらこちらの接近に気付かなかったらしく、回避する事もなくまともに攻撃を食らう。

連続した着弾は、機体のジュラルミンを貫通しその内部を破壊する。

一瞬で両翼はぼろ雑巾と化し、胴体の前半分はエンジンから漏れ出したオイルで黒く汚される。

必死になって機体の安定を保とうとするパイロットだが、次の瞬間オイルに引火。機体とともに火葬される。

編隊の僚機も次々に攻撃を仕掛ける。

これに対し、敵は編隊を二つに分離。後方の機体が『飛燕』隊に立ち向かい、先行する残り半分が『連山』を目指す。

一瞬、先行する敵機を追撃しようとする加藤。今回の役目は攻撃隊の護衛。見逃すわけにはいかない。

だが、それより僅かに早く無線から指示が飛ぶ。

『「飛燕」隊はその場で敵戦闘機を始末しろ。残りは直衛隊が片付ける』

それなら奴らを気にする必要はない。残った連中を後顧の憂いなく相手出来る。

残った敵機はきれいな四機編隊を二つ組みながら一気に急上昇。その頂点で背面飛行に移りこちらに向かつて急降下してくる。

自機とこちらの位置関係に、自らの旋回半径を完璧に把握していなければ出来ない高度な機動。相手は精鋭だ。

こちらもそれに応じて急上昇しながら正面对決に入る。相対速度は千二百キロを優に超える。

そのまま機銃を撃ちまくりながら交差する。

次の瞬間、『飛燕』隊の三番機と七番機が煙を吐いて海面へと堕ちていく。幸運にも搭乗員は無事で脱出しようとしている。

振り返って確認すると、敵編隊も二機を失ったようであり残りの六機が水平飛行に戻り再び高度を上げようとしている。もう一度一撃離脱を挑むつもりようだ。

「させるか！」

だが、こちらが相手の戦法につきあう必要はない。

圧倒的な急降下速度で一気に距離を詰める。

高度をとる余裕がないと気付いた敵機は上昇をあきらめ再び急降下に転じる。

だが、そこはこちらの土俵だった。

「格闘戦じゃ貴様らの機体に負ける事は無い！」

『飛燕』の特徴は液冷エンジン搭載による高高度性能もあるが、同時に従来の液冷エンジン機の弱点だった重量の問題を大幅に改善したことだった。

これによりそもそも低空での運動性を追求した『烈風』には負け

るが、低空でも高い格闘性能を発揮する事が出来る。

左右に機体を振りながら逃走する敵機に対して後ろ上方からゆつくりと狙いを定める。すでにすぐ下は海面、急降下で逃れる事は出来ない。

照準器から敵機がはみ出すほどに近づくと、加藤は機銃の引き金を引いた。

ダダダダッ！

軽快でありながら七・七ミリ機銃には無い力強さも感じられる発射音。

放たれた銃弾は敵機の主翼を一撃で貫通し右翼の半分が一瞬で干切れ飛ぶ。

僚機も順次攻撃を仕掛け、次々に敵機が海面に消えていく。

一通り攻撃を終えた時、生き残っている敵機は三機に激減していた。驚いた事に生き残っている一機はさっき加藤が右翼を半分吹き飛ばした相手だった。

ふらつきながらも必死に安定を保っている。

とどめを刺そうと機首をめぐらした時、計器に警告灯がともった。

「チッ、もう燃料が無いか…」

これまでの激しい戦闘で、本来まだ十分にあるはずの燃料はすでに半分を切っていた。機銃の残弾も心もとない。

次の瞬間。

ドッ……オオオオ……ン……！

遠くから巨大な爆音が伝わってきた。

「なんだ！」

「隊長、あれ！」

二番機のパイロットが敵編隊の向かう先にを指さす。
そこには巨大な爆炎が浮かび上がっていた。

「…『連山』がやったのか…」

あまりの光景に言葉を失う。

一瞬、すぐそばまで近づいてその光景を見たいと思ったが、燃料の警告であきらめる。

最後に生き残った敵機を無念そうに見ながら加藤は残った五機に命じる。

「全機これより帰還する！」

そのすぐ後に『天空』から方位や飛行場の指示が出され、『飛燕』隊は帰路についた。

1941〜開戦〜3（後書き）

次はまたタイムスリップ前後です！

1930 習志野騎兵第一旅団 1

ただいま、俺工藤夏樹は大変危険な状況に置かれている。

まず、しゃがんでいる俺の腕の中には、逃走中に転んでしまった幼馴染の本城。

そして周囲を囲むのは完全装備の騎兵一個小隊。騎銃の先端の銃剣を突き付けてきている。

.....

いったい俺達、どうなっちゃうの？

習志野騎兵隊司令部。

まるで洋館のような立派な建物に、それは設置されていた。

そこに、今基地にいる参謀達のほとんどが集合していた。

時刻は正午過ぎ。本来なら昼食休憩の時間である。それが唐突に憲兵隊に呼び出しを食らったのである。集まった幕僚の表情は一樣に不機嫌だった。

そんな空気最悪の中、呼び出した癖に一番遅れて憲兵隊の隊長の大佐が司令部に入ってきた。

「...一体何の用かね？」

駐屯地司令にして騎兵第一旅団司令である吉岡少将が不機嫌そうに口を開いた。

「はっ、駐屯地内で不審な人物を発見したのですが、こちらの手には余ると判断、緊急に少将閣下の御裁可をいただきたくこのように

させていただきました」

その言葉に、てっきり誤認逮捕した人間を間違つて殺したといった報告だと思つていた幕僚達は驚いた表情を見せる。本来憲兵は陸軍大臣の元、独立した指揮権を持っている。それが司令部の意見を聞きたいなどと言うとは思つてもみなかった。

「不審者なら君達で勝手に裁けばいいだろう。そのための君達だろ
うに」

吉岡はめんどくさそうにしながらも、状況を説明するよう促す。

「発見したのは小隊単位で訓練中の第十四連隊の部隊です。それが訓練中に演習場のど真ん中にいる二人組の男女を発見、逃走を図つたため追跡、これを捕縛しました」

ここまでなら普通のスパイへの対応と変わらない。

「問題はその後でして、二人ともここがどこか、どこの国なのかすら分からない様子だったということです。服装も奇妙でして、年齢的にもまだ十五歳程度のようなのでただのスパイとは思えないのです」

そして何より、これが問題です。

そう言つて憲兵隊長が懷から取り出したのは一つの腕時計。
個人的な話だと前置きして続ける。

「自分の実家は時計店をやっておりますで、時計にはいささか詳しいと自負しております。ですがこのような仕組みは見た事がないのです」

確かに、裏蓋のはずされた腕時計は、ゼンマイも何も入っておらず奇妙な緑色の板とそれにはんだ付けされたいくつかの部品。そして小型の電池しか入っていなかった。

そして、裏蓋の表面に刻まれた製造年。

そこには『AD2005』とはつきりと刻印されていた。

メーカーのところには『SEIKO』の文字。

その刻印を見て、一様に沈黙する幕僚達。

「まさか、そいつらは未来から来たとしても言うんじゃないだろうな……」

冗談めかした声で言う幕僚に、真面目な表情でうなずく憲兵隊長。

「どうか、ご協力をお願いします」

彼らは知らない。

そのクォーツ腕時計の回路の片隅に、本来の機能上不要なものが取り付けられている事に。

それは1.5ボルトのボタン電池から供給される僅かな電力で高感度圧電素子から送られてくる電気信号をデジタル暗号に変換し、半径数百メートルの範囲内に発信し続けていた。

習志野駐屯地、営倉。

「なあ、本城。ここは本当にどこなんだ？」

ノミの湧いたむしろの上に転がった俺は、疲れ切った口調で向かいの独房にいる本城に問いかける。

あの後、正体不明の騎兵に連行された俺達は持物を全て取り上げられ、昔の軍服のようなものを着たおっかないおっさんたちにわけのわからない質問の嵐を浴びせられ、そのまま別々にこの独房に入られたのだ。

俺はつい先ほどまで本城の家の中にいたはずなのに、今じゃ窃盗の現行犯も真つ青の激烈な取り調べと、不衛生な独房生活である。平穏な日常を返せ。

「……………」

「おいっ！」

本城の答えが無い事にいら立った俺はむしろから起き上がり向かいの独房を見る。

怪しい事をしていた。

奴の耳には白いレースのついた奇妙な形のイヤホンとワイヤーのような堅そうなケーブルが伸びている。

そのケーブルの先にはヘアピンを組み合わせたらしい奇妙な形の針金の塊が握られていた。

「…おい、何をしている？」

声をひそめて尋ねる。だが、本城は答える気がさらさら無いらしく、時折考え込むようにしながらイヤホンから聞こえる音に耳を傾けている。

その時、あいつがピクリと動くと素早くイヤホンや針金を制服の

ポケットに押し込む。

そこでようやく俺の方に視線を向けると、唇の前で親指と人差し指を合わせ横に引く動作をして見せた。

（黙ってろってことか…）

詳しくは教えてもらえなかったが、以前あいつの巻き添えを食らいどこの組織に拉致された時もあいつは同じことを言ってきた。こういうときは本城に従う方がいいと経験でわかっている。

（くそっ！もうどうとでもなれ！）

後ろ向きな決意を俺が固めた時、半地下式の牢屋の入口が開け放たれる音がした。

駐屯地司令、吉岡少将のお出まじだった。

吉岡サイド

吉岡の前では、椅子に座らされた小柄な少女が無表情にこちらを見つめていた。

「君達は何者かね？」

営倉から尋問室に引つ張り出された少女に丁重に問いかける。ただ迷い込んだ民間人なら理由を聞いて憲兵に嫌味でも言いながら穏便に済ませればいい。もう一人の少年は別室で参謀長に同じような質問を受けているはずだ。

吉岡の質問に、表情を変えることなく少女は簡潔に答えた。

「未来人」

まさかの答えにフリーズした。

スパイ容疑者が、まさかこんなことを言うとは思わなかった。

（こいつは本物かもしれない…）

ごまかすための張ったりだと確信した吉岡は同じ質問をもう一度する。

「君達は何…」

「『…一体何の用かね？』」

その瞬間、吉岡は凍りついた。

周囲で監視している兵達も、突然少女の物ではない声が聞こえてきてぎよつとした表情を浮かべている。

その音は少女の胸元から聞こえてきた。

流れる音、そらは先ほどの会議室での会話に他ならなかった。

硬直している全員の前で、少女は胸元に手を入れそれを引きだした。

見た目はただの下着を彩るフリルにしか見えない。

だが、僅かな隙間からうかがえるその中身は金属質の光沢を放ち、今も先の会議の内容を流し続けていた。

「…これはモノモルフ構造の圧電素子を利用した高性能スピーカーと高感度無線受信装置、それに小型のフラッシュメモリを組み合わせた小型通信装置」

「…なんなのだそれは…」

絶句する吉岡に、いたずらっぽく微笑む少女。

「あなた達の、百年先の技術よ」

1930 習志野騎兵第一旅団 2

さて、今回も俺こと工藤夏樹の現状報告から始めさせてもらおう。まず、俺と本城がいるのは東海道本線を走る長距離特急の中。

四人掛けのボックス席にるのは顔に無数の絆創膏を貼り付けている俺と不気味なアルカイクスマイルを浮かべている本城、それに俺達が拘束されていた習志野駐屯地の司令である吉岡少将とその部下で俺達を最初に拘束した騎兵部隊の指揮官。

軍人二人と俺は上等なスーツに身を包み、本城は質素な着物を上手く着こなしている。服に着られている俺とは大違いだ。

旅の最終目的地は、海軍最大規模の拠点であり横須賀や舞鶴、佐世保と並んで四大鎮守府に列せられる軍都呉。

朝に習志野を出発して大阪で一泊する、現代人たる俺としては信じられない日程だ。

俺の手に握られているのは一枚の小さな新聞の切り抜き。

そこには、呉にほど近い無人島に出現した謎の建築物に関する小さな記事が載っていた。

習志野駐屯地、医務室。

顔の形が変わるんじゃないかと言うほど殴られた夏樹は、本城に付き添われてベットで寝ていた。

夏樹は必死になって、本城に言われた通りに黙秘を続けたのである。その結果、本城が隣の部屋で話をつけるまで血の気の多い参謀長殿にひたすら殴られ続けたのである。

あれだけ殴って腫れ一つないその拳には衝撃を受けた。いったい

どんだけ頑丈なんだよ。

その後、吉岡司令に救助された俺は医務室に運ばれ、さすがに罪悪感を覚えたらしい本城が手当てを試みてくれたが、脱脂綿をつまんだピンセットが頬の傷口にめり込んだ時点で丁重にお引き取り願った。泣きつ面に蜂つてこういうの言うんだろ？（遠い目）。

後を引き継いだマツチヨの衛生兵は多少乱暴だが手際よく傷の手当てをしてくれて、一晩眠って翌朝には、若干目が腫ればつたいが普段通りの生活が出来るようになった。

その時には、俺達の生活環境は驚くほど改善されていた。

昨日は独房に放り込まれていたのに、医務室から出ようとすれば折り目のきっちりした軍服をまとった従兵がついてきてくれて、行きたい所へ案内してくれる。与えられた部屋は吉岡司令に与えられている司令用の宿舎（ものすごい豪邸）、その客間が本城と一緒に与えられていた。

どうやら俺が寝てる間に本城が交渉をまとめてくれたらしい。

そして、部屋で暇を持て余していると本城が吉岡少将を連れて（昨日と比べて随分やつれた感じがする。原因は本城だろう。合掌）部屋に入ってくるなり言った。

「喜べ。少将閣下が呉まで旅行に連れて行ってくれるそうだよ」

ニヤリと言うにふさわしい笑みを浮かべた本城と、胃のあたりを押さえて苦悩の表情を浮かべている吉岡司令の差異が痛々しかった。

その後、本城による俺への詳しい状況説明と吉岡司令の休暇取得などの絡みで二日ほど習志野で旅支度をする事になった。俺達の服

装調達も行われた。

その時、俺は本当に過去にタイムスリップしたんだと肌で感じる事になった。

俺達が向かったのは駐屯地からほど近い津田沼の町。

そこまでは軍の鉄道工兵による路線が敷かれているので、資材の運送に従兵と一緒に同乗させてもらった。

ついでに、俺達の身分は吉岡司令の親戚の子供というもので、海外から帰ってきたばかりなのだということにしてある。司令宿舎の客間を借りている子供の設定としては一番やりやすいという事で本城が決めた。

俺と本城の乗った車両の牽引車は当然のように蒸気機関車で、小型の物を二台つなげて重連として大量の物資を輸送した上での津田沼への帰りだった。車両の騒音と振動は半端ではなく、乗り物酔いした事が無い俺でも気分が悪くなった。

そうしてたどり着いた津田沼は、まるで発展途上国の様だった。

いや、この時代の日本はまさに発展途上国なのだ。

京成と国鉄、二つの津田沼駅を中心に広がる商店街は雑然としていたが活気にあふれている。

街中には軍服の姿も目立ち、たまの休暇を満喫している様子だった。

ついでに、俺達の今の服装は俺は吉岡司令から貸してもらった普段着の着物を着て、本城は参謀の一人がなぜか持っていた男物の子供服（笑）を着ている。

…いや、これを本城が着るとき、つい思いつきり笑ってしまい、顔の傷口に爪を突っ込まれた。これのせいで、本城の機嫌はさつき

からすこぶる悪い。

付き添いの従兵（実は彼は俺達を捕まえた部隊の所属で遠藤さんという。お前達を捕まえてから馬に触る事も出来ない恨みごとを言っている）の人はきちんと軍服を着ている。

これなら、見た目は完璧に遠くから兄か親戚の軍人に会いに来た年の離れた兄弟（笑）に俺と本城は見えるはずだ。

「それじゃ、最初にどこに回りますか？」

遠藤さんが問いかけてくる。

「まずは服だ」

非常にそつけなく本城が答える。いい加減機嫌を直してくれ…。

「分かりました。とりあえず、一番上等な店に行きますか」

ついでに俺達の予算は非常に潤沢である。高給取りの将校である吉岡司令から本城がごっそり奪いとっている。吉岡さん、この埋め合わせはいつか必ずします…。

遠藤さんの案内でたどり着いたのは小さな呉服屋。ここがこの辺では一番の店らしい。

「いらつしゃい！」

店に入ると、俺より少し小さい中学生くらいの女の子が元気よく出迎えてくれた。その愛らしさに頬が緩みそうになる。

「どんな品物をお探しですか？」

少女の質問に俺が答えようとすると、後ろから本城が出てきて俺に代わって言う。

「私には女物の着物を三着、この男にはできれば洋服、ないなら適当な着つけが簡単な形の着物を三着。どちらも旅行に使えるものにしてくれ」

「は、はい。かしこまりました！」

なぜか本城の顔を見た少女の顔が引きつっていたが、要望を聞くとすぐに店の奥に駆け出していく。

「おい、本城。あの女の子なんか顔が引きつってたぞ。もうちょつと優しい言い方したらどうだ？」

「ふんっ！お前があの子に色目なんぞ使うからだ」

一体いつ俺が色目なんか使ったんだと思う。というかお前が気にする事じゃないだろうに。

俺達の様子を後ろから見て、遠藤さんが本城に同情のまなざしを向ける。

「…お嬢さんも大変ですね…」

それを聞いてにつこりとはほ笑みながら振り返る本城。

「私に同情してくれてありがとう。この調子なら君の昇進は確実にある。だが、余計な事をしゃべったら…」

二階級特進だ。

最後のところは何と言ったか俺には聞き取れなかったが、遠藤さ

んはひきつった顔でコクコクとうなずいている。

その時、奥からさっきの少女が出てきた。

「洋服の品揃えはあまりありませんので、こちらでどうでしょうか？」

まず出てきたのは、古い映画に出てくる英国紳士が着ていそうな茶色の古風な印象のスーツ。正直俺が来ても似合わないだろうと思うが、本城の奴はふんふんとうなずいている。いや、俺に選ばせてくれよ。

なんとなく口をはさめないでいると、次の品物が出てきた。

「いや、それはないだろ！」

さすがに口を挟まざるおえなかった。

出て来たのは縦縞柄のスート・スーツ。古い映画のアメリカマフイアが着てるやつである。

はつきり言って周囲に飾られている和服から完全に浮いていて、なぜこの店にこんなものが置いてあるのか非常に疑問である。

「あ、あの。お気に召しませんでしたか？」

少女が少し上目づかいにこちらを見て来る。非常にかわいらしいがさすがにこれはない。

「ああ、できればこれは……」
「買った」

俺が辞退しようとしていると、本城が勝手に買った宣言してきた。

「おいっ！これは俺が着るものなんだぞ！」

「ふんっ、財布を握っている私に逆らうと言うのか」

懷に紐でつながれた財布をひらひらさせてニヤリと笑う本城。

「安心しろ。そっちのスーツも一緒に買ってやる。何も今すぐ着ろという気もない。精々大事にとっておけ」

いきなり着ると言われる事を考えていた俺としてはかなり拍子抜けだったが、それなら別にかまわない。着なければいいだけの話だ。

「裾直しはいかがなさいますか？」

「ああ、お願いするよ」

それなら一度実際に着てみなければならぬ。更衣室はどこか聞こうとする。

その時、本城がポケットからメモを取り出し一緒にしまっていた万年筆でさらさらと何かを書きだした。

「夏樹、わざわざ履く必要はない。店員、これが夏樹のサイズだ」

そのままメモを握らせる。

「一ミリも間違っていないはずだ。それでやってくれ」

「おいちよっと待て」

何でもないように言う本城に待ったをかける。

「なんでお前が俺のスリーサイズを熟知してんだよ！てゆうかいっそんなの調べた！？」

激しい口調で問い詰めると、本城の奴は頼なんか染めている。

「だって、将来の夫の事はちゃんと知っておかないと…」

「一体いつ俺とおまえは婚約したんだ！」

それ以前にたとえ親兄弟でも、そこまで詳細なスリーサイズは知らないと思う。

結局、測った方法は分からずじまいで、数字を確認すると本当にあったいた（恐ろしい…）のでそのままそれで裾直しをお願いする。これとあと一つ青い着流しを買って、俺の買物物は終了。次は本城の番だ。

「着物でしたらたくさんございますので、好きなものをお選びください」

そう言うって周囲の展示してあるの以外にも、店の奥からサイズ的に合いそうな商品を掘り出してきてくれる。

「ふむ、夏樹はどれがいいと思う？」

商品を眺めながら、俺に問いかけてくる本城。

「そうだな、この青いのなんかいいんじゃないか」

俺は適当に近くにあった蒼地に色とりどりのアサガオが描かれたものを指す。

「馬鹿が、それは浴衣だ。旅に着ていくものではない」

駄目だしを食らう。そうせ俺に和服の知識なんてねーよ。

しかし、駄目だししたくせに、本城の奴はその浴衣を買い、それ以外に桃色の紬と水色の訪問着を買って終わった。

その後、俺達は靴屋や小道具やをめぐり適当な旅道具をそろえた。これまでは靴も現代にいた頃の物をそのまま使っていたので、実はかなり目立っていた。はつきり言って新しい靴のはき心地は決して良くなかったが、革靴は本革使用のきちんとしたものだし、普段用の下駄もかなり高級なもので割らないか心配だった。

一通り品物をそろえ終わったところで、俺は二人と別れ裾直しを頼んでいた店に行った。

閉まっている扉を開けようとすると、中からさっきの少女とその母親と思しき人物の会話が聞こえてきた。

「本当に売れてよかったね！これでしばらくはご飯も平気だね」

「そうね、本当にこの不況も早く終わってくれないかしら」

実は俺の本音としては、ここであのズート・スーツは返品してしまい、自分の予算を得るつもりだった。だから二人に待ってもらっているのだ。

だが、この会話を聞いて今がいつの時代か思い出す。

今はまさに、世界恐慌の真ただ中なのだ。

思えば、路地の奥に何をするでもなく座っている汚れた男の姿があった。

店にはシャッターを下ろしているものもたくさんあった。

そして、この呉服屋も今日の食事にも困っているほどなのだ。

その時、扉が内側から開けられた。

「いらつしゃい！……って、さっきのお客さんですか！今終わりますんでその椅子に座って待っていてください」

「ああ、ありがとう」

改めて見れば、この少女も和服で分かりづらいかかなり線が細い。
ダイエットなどではなく、食べ物が少ないのだ。

なんとなく、居心地が悪く感じられた。

そのあとすぐ、俺はスーツを受け取って二人の元に戻った。

袋には、ズート・スーツがきちんと入っていた。

1930 習志野騎兵第一旅団 3

列車の車窓からは、関ヶ原ののどかな風景が広がっている。太平洋側有数の豪雪地帯にして、新幹線開業後も最大のネックとなっているエリアだ。

その平和な光景を見ながら、俺——工藤夏樹——は本城の現状説明を思い出していた。

時は尋問と拷問の間の行為に見舞われた翌日、いきなり呉旅行を告げられた直後の事だ。

いきなり呉への旅行を宣言した本城は、まだ殴られた跡が痛むので早めにベッドに入っている俺の横に丸椅子を持ってきて座っている。

看病での失態を取り戻すつもりか、本城はナイフで器用にリンゴの皮をむいている。一本に繋がってするするむけていくリングを見ていると、なんで傷口にピンセットを突き刺すのか本当に疑問である。嫌がらせか？

そこで、本城に現状の説明を受けたのだ。

「タイムスリップごは！」

タイムスリップ！？と叫ぼうとした瞬間、本城のボディーパープーが鳩尾に決まり、ベッドの上で悶絶する俺。

「大きい声を出すな。傷に響くぞ？」

たしなめるように言ってくる本城。切ったリングを一口にして「国光か…」とつぶやいている。怪我を気にするなら、お前のさっきの一撃は何なんだと言いたい。激痛で言えないが。

「ごほっ…。それで、タイムスリップって本気なのか？」

詰まった息を整えて本城に聞き返す。

「そうだ、本気だ」

本城の説明によれば、なんでも一度過去に行ってみたくなくて二月ほどかけて準備を進めてきたそうだ。すでにその時点で正気を疑いたくなるが、本城でこれなら余裕で許容範囲だ。当初の予定では『七年』戻るつもりだったそうだが、俺が本城の家に行く時、魔方阵のどこかを書き変えて『七十年くらい』過去に行ってしまったらしい。

「おい、それより戻る方法はあるのか!？」

それを聞いて、俺は本城に掴みかかる。相手が自分と三十センチ以上も身長差のある女だとかそんなことは一切頭になかった。

「方法はある…!」

絞められて、若干苦しそうにしながらも本城は答える。

「だが、一緒に転送されたはずの家を見つけないでは話にならない」

なんでも、家の中に帰還に必要な装置を積んでいるらしい。本当

なら、家ごと自分達は転送されるはずだったのだが、これまた俺が書き換えたせいで別々に転送されてしまったらしい。

「それなら、家はどこにあるんだ！」

俺に掴まれてベッドに引きづり込まれるようになっていた本城が、当てはあると言う。

「それが今回の呉旅行だ」

なんでも、新聞記事にそれらしきものがあつたらしい。近いうちに海軍と東大の調査隊が向かうそうだ。

幸いな事に、俺達を捕まえた騎兵隊の指揮官はそれなりに名の知れた華族で、多少の無茶は通るということだった。

「この特権を利用して現場に近づく」

そしたらこっちのものだ、とシニカルな笑みを浮かべる本城。
具体的な帰還方法は現地に行ってからにすると言う事で話は終わった。が…

「それより夏樹、こんなに強引に仕掛けられても、いきなりこんなプレイはちょっと…」

本城が顔を赤らめて言った。

気がつけば、本城は俺に引き寄せられる形で俺の下半身の上うつ伏せになり、上目づかいで上半身を起こした俺を見上げていた。

本城の表情と合わせて、実に危ない光景である。

「どうしても言うならいいけど、さすがに公開は…」

ついでに、ドアは半開きになり、様子を見に来た吉岡少将が俺の事を犯罪者を見る目つきで睨んでいる。外に控えている衛兵を呼んでいる。

「違う！誤解だ！」

必死の弁論もむなしく、その後本城が助け舟（ただし行先は地獄）を出してくれるまで集まった衛兵と吉岡少将からこつてり絞られることになった。

その時の会話を思い出し、悪夢を見る表情になる夏樹。

あの後、猛烈な尋問にさらされる俺に向かって、外見相応のかわいらしい、いじらしい表情で本城は言ったのだ。

責任取ってくれるよね？と。

瞬間、尋問の手は完全に止まり、吉岡司令と衛兵、全員が俺の返事を待ち構える。

過酷な尋問に神経が擦り切れそうだった俺は、本能が発する危険信号を無視して言ってしまったのだ。

もちろんだ、と。

その瞬間、周囲の衛兵達は汚らしいものを見るような目つきで俺の周囲を離れ、本城には同情と励ましの視線を向けて部屋を出て行

った。

「工藤君…」

吉岡司令だけは、ここにきて本城の本性を思い出し、俺に対して憐れみの視線を向けて来た。

少し落ち着いた俺は、ゆっくりとこれまでの会話を脳内で吟味。
真っ青になった。

「おい本城！さっきのは嘘も方便というか言葉のあやというかとにかく本心からの物では…」

必死に言葉を重ねる俺に対し、いままで作っていたかわいらしい表情が崩れた本城は、ニヤリと笑みを浮かべた。

「夏樹、私は嬉しいぞ。あそこまで激しく私を求めて、それに責任も取ってくれるのだろ？証人も大勢いるからな」

「そんなバカな！」

結果、駐屯地内で、俺は本城に対して『責任を取らなければならぬ』行為に及んだ男とされ、会う人会う人から文字通り家畜以下の扱いを受ける事になったのである。

ついでに買物についてきてくれた遠藤さんは俺の理解者で『俺にもその気持ちはわかる…！』と暑苦しく語っていた。立派な変態である。

今、一緒に呉への旅についてきてくれている真田少佐も、今朝会ったときは文字通り虫けらを見る目で俺を見て来たのである。無茶苦茶きつかった。吉岡司令がとりなしてくれたので威圧感は若干収まっているが、今でも俺には話しかけようとしない。

ついでに本城のアルカイックスマイルの理由は、俺がそのシニカ

ルな笑みを止めると八つ当たり気味に言った事が原因である。

その指示を忠実に守った結果、なぜかアルカイクスマイルに落ち着いたのである。その時も、俺の言う事なら何でも従います的な態度で本城は従ったのである。駅員さんの視線が痛かった。はつきり言ってもう勘弁してほしい。

吉岡司令は完全に俺を見捨て本城サイドに着いた。逃げやがって畜生！

せめて真面目そうな真田少佐を味方につけたいが、こちらは完全にシカトの態勢。取り付く島もない。

もうどうとでもなれ！

ヤケクソ気味な俺を乗せ、列車は一路大阪に向かっていった。

1930〜呉での再会〜1（前書き）

いつの間にかお気に入りが十七件になっていてとてもうれしいのです！

今回は少し短めですが本城美樹の視点から書いてみました！

1930 呉での再会 1

「家が！俺の家が！」

いきなり夏樹の絶叫から始まって悪いが、今回は仕方あるまい。今、私、本城美樹の目の前に広がっている光景を簡潔にまとめてみる。

まず正面に、この世界に転送されてきた私の家が洋上に浮島のように浮いて見える。おそらく地下部分の深さと水深がちょうど一致したのだろう。

その少し右側。そこには夏樹の家が屋根の一部とアンテナだけを水面に突き出して完全に水没していた。どこまでも運のない奴だ。さすがに夏樹もこれはショックだろう。

「仕方ないか」

少し私が慰めてやろう。
未来の妻として。

大阪で一泊した私達は、そのまま山陽本線で広島を目指した。

呉は軍事都市であり、近くの広島も陸軍部隊が師団単位で展開する重要拠点だ。吉岡のじじいの力を使えば軍用線を利用して国鉄より確実に早くついたが、現時点で吉岡や一部の連中以外に私たちの存在を知られたくなかった。

夏樹には話していないが、私達が帰還するには『ある物』が大量

に不足している。これを確保するには国家と軍の協力が不可欠だ。そのためには、最終的にこちらの存在を知らせなくてはならないが、美樹は可能な限り今の状況——こちらが一方的に相手の事を知っている状況——を引きのばしたかった。

夏樹からは、私が普段と変わらないように見えるのかもしれないが、実際は私も不安なのだ。七年前にタイムスリップするのだって、やろうと思えば二週間できた。しなかったのは、どんな事になるか分からず不安だったからだ。

それが、事故で戦前の時代まで飛ばされたとはいえ、夏樹と一緒にいるのは本当に心強かった。

…それに、事故の原因の一端は、間違いなく夏樹にもあるのだ。少しぐらい痛い目にあってもいいだろう。

完全に、自分に最大の責任がある事を忘却している美樹だった。

旅は予定通りに進み、正午には呉に着いた。

「おお…、凄いな…！」

夏樹が息をのむのも無理はない。

眼前に広がる呉軍港。そこには、旭日旗を掲げた大小無数の艦艇がその威容を洋上に浮かべていた。

正面に見えるのは、ハインチ級の主砲を単装六基六門備えた八千トン級重巡洋艦『古鷹』

その隣の栈橋で、目刺状態で三隻横付けしているのは、サイズから見て特型駆逐艦だろう。艦体の前方によっている艦橋構造物と連装三基六門の十二・七センチ砲が印象的だ。

このいずれも、この時代においてそれぞれの艦種における最強の存在だ。

私としても、この時代に苦しい国家財政の中、これだけの戦力を整備した事に素直に感心する。

そして、夏樹に言っておく。

「夏樹？そんな事じゃこれから先が思いやられるぞ」

そう、これから向かう先は、ここにいる連中が束になってもかなわない、文字通りの海の女王が待っているのだから。

「……………」

その圧倒的光景に、夏樹は言葉を失っていた。

冷静に見える私も、正直気押されるものを感じていた。

場所は周防大島と柱島諸島の間、東大の調査団に乗せてもらった調査船の上。一緒にいるのは私と夏樹、お目付役の真田と調査に当たる東大チーム。吉岡のじじいはとうとう胃に穴が開いたらしく、呉市内で静養すると言っていた。

そこには、先ほど呉で見たのとは比べ物にならないほど巨大な艦艇がひしめいていた。

まず目につくのは、後ろに湾曲した一番煙突が特徴的な、泊地の中でも最も巨大な戦艦『長門』

周囲に停泊する『川内』型の軽巡洋艦と比べても、その大きさは圧倒的だった。

そのそばには、連装砲を六基備えた大型艦——おそらくは『伊

勢』型——がタグボートの助けを借りて広島湾へと進出しつつあった。

停泊する艦艇の間ではカッターが行き交い、その間を真つ黒な煙を吹きだす内火艇が走り回っていた。

これらの光景のいずれも、現代の日本では見る事の出来ないものだった。

一緒に乗っている調査員達も、どことなく誇らしげで、

「『長門』と『陸奥』は日本の誇りじゃけん！」

と言っている。この男、土佐出身か。

「それよりも、調査場所の詳しい位置を教えてくださいませんか？」

「うにゃ。場所はどうも泊地の西側水道に面した柱島諸島近くの浅瀬じゃけん」

「浅瀬？」

なんとなく、不幸な推測が頭をよぎる。

「そうじゃ。なんでも見た事のない建材でできておつて、中に入れないそうじゃ。わしや本当の宇宙人っちゅう奴じゃないかとおもつとるんだがね！」

まるで少年のような事を言う調査員に、若干の親近感を感じる。もしかしたら、私達が未来人だという事を信じてくれるかもしれない。

その時、乗っていた内火艇が柱島の島影に進入した。

そこに、予想通りの光景を見つける。

「…本当に、運のない奴め…」

絶叫している夏樹を見て、ため息をつく。

そこには、基礎の部分が若干浮かんで見える私の家と、屋根の一部を残して完全に水没している夏樹の家があった。

1930 〱 呉での再会 〱 2 (前書き)

初めての感想をもらって凄くうれしいのです！
前回と違って今回は少し長め。簡単な伏線とかも張ってみました！

1930 呉での再会 2

さて、語り手役を俺、工藤夏樹に戻して、話を進める。

まずは毎度恒例の現状報告。

俺と本城、そして真田少佐の三人がいるのは、例の調査隊が滞在する柱島諸島の西端に位置する無人島。目の前に広がるのは夜の漆黒の海。

俺と真田少佐はふんどし姿で、本城は腿まである紅白の横縞模様の古風な水着を着ている。

真田少佐は全身から”屈辱！”という空気を滲ませ、歯ぎしりの音がこつちまで聞こえてきそうである。

俺は、そんな真田少佐に申し訳ないと思いながら、そもその元凶である本城の事を睨んでいる。

その本城と言えば、普段はツインテールにしている髪を一つにまとめ、伸脚なんかして準備を整えている。

俺達が目指すのは、すぐその海に鎮座している本城家。調査隊は誰もこの事を知らない、完全な独断専行である。

目的は、内部の転移装置と防衛機構の確認、そして、一部重要区画の封鎖。

案内は本城。実行は俺と真田少佐。

…なぜだろう？嫌な予感しかないのだが。

自宅が完全水没しているのを目撃して、絶叫した俺だったが、その後後頭部の衝撃と同時に記憶が途切れている。未来の妻を”僭称”する本城が”気を使って”一撃で意識を刈り取ったのだ。どこが

気づかいだ。

気がつけば周りは暗くなり、調査隊は野営の準備を終え火をおこして食事をしていた。

痛む頭を擦りながらそこに近づいていくと、公開処刑が行われていた。もちろん比喻である。

静まり返っている調査員達の囲みの中心にいるのは、花札を広げている本城と真田少佐だった。

真田少佐は精悍な顔に脂汗を浮かべ、指先が若干震えている。

対して、本城の方はかわいらしいニコニコ顔だが、普段から奴の顔を見ている俺には、内側から黒い何かが湧きだしているのが感じられた。

「すみません、なにやってるんですか？」

状況がいまいち掴めない俺は、近くにいた調査員に問いかける。

「ああ、それがな……」

調査員の話では、みんなで食事してどんちゃん騒ぎを繰り広げた後、本城がだれか花札をやらないかと言ったそうだった。もちろん掛け金あり。楽しそうだとみながやる気になり、まず調査員の一人が本城に挑んだ。

すると、本城は苦戦するような様子を見せながらもそれに勝利したのだ。

その後も、五人抜き、十人抜きと一方的に勝利を重ねた本城だが、そこですこし酒を飲んだ真田少佐が、女の子に負けるなんて不甲斐ないと言って出て来たのだ。

太っ腹にも、真田少佐はこれまでの調査員の負け金全てを肩代わりしてやると言って、代わりに本城にこれまでの掛け金全てをかけた勝負を挑んだのだ。

…断言するが、その時の本城は、してやったという目をしていてに違いない。

そのまま勝負を挑んだ真田少佐だが、一回戦で激戦の末敗れてしまった。

もう一回と挑んだ少佐だが、この時点で完全に本城の術中にはまっている。

そのまま掛け金は雪だるま式に増加していき、気付いた時には信じられない額に膨れ上がっていたそうだ。

「今いくらなんですか？」

「…一万五千元だ」

その程度かと思う俺。

その俺の様子を見て、調査員は正気を疑う目を向けて来た。

「おい、一万五千もあれば普通に家一軒建つぞ！その程度なわけないだろ！」

そうだった、こっちでは金銭価値が違っていた。

「こい！」

俺が納得した時、本城の声が聞こえると同時に観客の調査員達がどよめいた。その中で真田少佐が絶望の表情を浮かべている。俺にはよくわからないが、手札は破滅状態のようだ。

一縷の望みを賭け、札を取る少佐。

しかし、希望の光は即座に消滅。代わりに目には涙が浮かんでいる。

ニコニコ表情を変えずに、札を引く本城。内側の黒さが増しているぞ。

その一枚で、勝負は終わった。

真田少佐の借金総額は一万六千百円。

真田少佐の、本城の奴隷としてこき使われる日々が始まった。

そんな事があって、今の真田少佐は完全に本城に強く出る事が出来ない。

すでに奴隷の少佐相手に化けの皮を被る気もないらしく、俺にするのと同じように顎で使っている。

その、奴隷としての初仕事が今回の独断専行での潜入だった。

「二人とも、今回の作戦の肝は二つだ」

準備体操を終えた本城が、腰に手を当てて仁王立ちして言う。見た目は完全に小学校中学年だが、その頭蓋骨の中には悪魔も真つ青な大量の知識と悪知恵が詰まっている。

「まず、ここにいる調査隊員に気がつかれない事。これは食べ物に少し盛っておいたから朝までは心配しなくていい」

「ちよつと待て。お前今何て言った！」

この悪魔は親切だった調査隊の皆さんに毒を盛ったというのだ！
なんという鬼畜……！

「安心しろ、ただの睡眠導入剤だ。私特製のな」

最後の一言でさらに不安を募らせるが、もはやどうしようもない。

話を進める。

「それで、もう一つは？」

「うむ。もう一つは、防御施設の一部無力化だ」

これには俺と真田少佐、二人とも頭に疑問符を浮かべる。俺はなぜそんな事をするのか。少佐はなんでこの娘がそんな事を知っているのかである。

俺達二人の様子を見て、本城が言う。

「まあ、理由はおいおい分かるだろう。重要なのはここから先は絶対に進めないと思わせる事だ。奴れ…真田少佐も、いい加減吉岡のじじいの言ってた事を信じる」

一度『奴隷』と言いかけて訂正した本城。珍しい事もあったものである。しかし、本城の発言を聞いた真田少佐は目を見開いている。

「まさか…、本当に未来人…？」

「まあ、そういう事だ」

衝撃を受けている真田少佐にあっさりと言い放つ本城。

「それより、夜明けまで後六時間ほどしかない。始めるぞ」

俺達三人は、なるべく飛沫を立てないように、静かに本城の家の敷地に乗り込んだ。

全身の海水を真田少佐が運んでくれたタオルで拭く。驚いた事に、少佐は古式泳法の達人だった。

「おい本城、本気でこの家の中に入るのか？」

その時、俺は重要な事を思い出した。

そう、この家には無数のトラップが仕掛けられているのだ。今の
ような軽装では生きて帰れるとは思えない。

「はあ？お前は何を言ってるんだ？」

本気で理解不能という様子の本城。

そのまま玄関の扉をあける…のではなく、その脇の花壇に手を伸ばす。

そのレンガの一つを外すと、中には指紋認識装置が仕掛けられていた。そのまま触れる本城。

次の瞬間、電子音と共に花壇が沈みこみ、後にはLEDに照らされた地下への階段が姿を現した。

その様子を、あんぐりと口をあけて見つめる俺と真田少佐。

「なあ本城。これって俺でも使えるのか？」

「あたりまえだろ。夏樹は毎朝これを使って起こしに来てくれてた
ろうに」

「じゃ、じゃあ、あの家の中のトラップは…？」

「馬鹿か。あんなの突破できるのはグリーンベレーかSEALSくら
いだ。ただの趣味に決まってる」

マジで号泣した。俺のいままでの苦労は一体…！

もつとも、鬱陶しく感じた本城が俺の脾臓を一撃し、即座に止め
られたが。

そのまま地下通路を経由して本城の家の内部に入る。

入ったところにあつたのは、整然と壁沿いに並んでいる多数のディスプレイとタワー型コンピューター、そして巨大なタンスのようなスカラー・ベクトル複合型スーパーコンピューターだった。

「これは一体……！」

文字通り、小説に出て来る宇宙人の基地そのものの光景に衝撃を受ける真田少佐。

それを尻目に、本城はディスプレイの一つに近づくとブラインドタッチで何かを打ち込んでいる。

しばらくすると、壁面に埋め込まれている大型スクリーンに家の見取り図が出された。

「呆れた事に、俺はそこに表示されている範囲の半分も知らなかった。」

見取り図から見た本城の家は、五階建てのビルの三階部分までを地下に埋めたような構造だった。

基本的に俺が今まで出入りしていたのはその地上部分だけで、今俺達がいるのは地下二階のサーバールームのようだ。これは地下二階の玄関側の半分の占有した空間で、多数の電子機器が低い動作音を上げている。

この上の地下一階は機械工作室と記され、最新の自動旋盤などが詰め込まれているらしい。

逆に、地下三階は燃料電池を中心とした自家発電施設になっているようで、ほとんどは各種ポンベやタンクで占められている。

地上階は基本的に一般家屋と似たような間取りだが、家具の代わりに置かれているのは各種解析装置の山だ。

そして、その全てを貫く形で中央をエレベーターが通っている。その見取り図を指して、本城が作業内容を説明する。

「今回の作業の目的は、こちらで隠匿したい設備の地下区画への移動だ。移動したい設備はこれから指示を出す。回収した資材は基本的にこの地下二階のサーバールームに保管してもらう。それが終了し次第、トラップの一部解除と地下二階以下の封鎖を私が行う。時間はない、すぐに働け」

命令口調の本城に真田少佐が切れかかっていたが、本城が借用手形を取り出したのを見て肩を落としていた。

萎れている真田少佐に声をかける。

「少佐、がんばりましょう…」

「…殿をつける、殿を」

もはやそこに精悍な陸軍士官の表情はなく、悪質な高利貸しに追われる夜逃げ人を思わせるものになっていた。

…合掌。

半分死人になっている真田少佐を押しながら、俺は作業を始めた。

本城サイド。

二人が部屋から出るのを確認し、私はさっきディスプレイを表示する作業と同時に走らせたある計算の結果を確認する。

「…やはり無理か」

その結果は、ほぼ予想通りだった。

簡単に言ってしまうえば、まっとうな帰還方法はない。

どう考えても必要なエネルギーを確保する事ができない。
だが、

まっとうでない方法ならば？

新しい数式をHDDから引き出して変数を入力。再び計算する。
数秒で結果は出た。

「…なかなかの覚悟がいるな…」

だが、この方法は絶対に夏樹が許しはしないだろう。
ならば、

「私が全て一人でやるしかないか…」

メモを取って、ディスプレイに表示されているデータを全て削除
する。

メモには、女の子らしい丸文字で『RDS - 220』×20と記
されていた。

1930 〱 呉での再会 〱 3 (前書き)

なんだかそろそろ開戦シーンとかも書きたくなってきたのです。

1930 呉での再会 3

東大調査チームサイド。

それは、驚愕の連続だった。

調査団の主席を務める大高義秋は目の前の施設を見て、魂を抜かれそうな衝撃を受けていた。

最初の衝撃は、扉を開けると同時に始まった。

近づいてくる彼らを察知したかのように、自動で開いた扉。

驚く彼らがその先に見たのは、見た事もない明るい光を放つ照明だった。

彼らは最先端の技術を研究する東大の人間である。見た目は現在アメリカなどで開発が進んでいる蛍光灯というものに近いと感じたが、どうやらそれとも違うようだった。

つまり、まったく未知の技術が使われているという事だった。

さらに、一つ取り外してみたところ驚くべき事が分かった。

製品に記されている文字は、日本語に極めて酷似していたのだ。

正確には、アルファベットと奇妙に崩れた漢字の組み合わせだったが、ほぼ問題なく読む事が出来た。

『SONY 2005 60W』

とりあえず、書かれた文字は放置して、まずは先に進む事になった。

調査員達の士気は最高だった。

なにしろ、わけのわからないものがあるから調べてくれと言われども、何があるのか分からないのでは真剣に取り組もうと言う気にもなれない。結果として、送り込まれたのは東大の中でも窓際族と呼ぶべき面子になっていた。場所が呉という海軍の本拠地でなければ、適当に京都大学あたりの人間が送られただろう。

調査員達も、精々公費でいける小旅行程度に考えていたのだ。

それが、出てくるのは明らかにこれまで知られていなかった技術で作られた代物だったのだ。調査員の一人が冗談で言った『宇宙人の基地』という説すら現実味を帯びてきていた。

人類の大発見に、今自分達が直面していると感じていた。

その彼らは、周囲の部屋が存在を後回しにして、とりあえず廊下をまっすぐに進んでみた。

そこにあつたのは、技術の最先端を行くと言われるドイツですら製造は不可能と思える各種加工装置と、操作方法すら判然としない謎の機械の山だった。

「……………」

さっきまでの興奮は冷めていた。

とても自分達だけで扱えるような代物ではない。

「きよ、教授。どうしましょうか……？」

「軍に協力を要請しろ。ここにある物がどれだけの価値を持つか、政府の馬鹿でも理解できるだろう」

ここは絶対に他国に知られるわけにはいかない。わが国で独占しなくてはならない。

そのためには、情報の絶対的秘匿が必要だ。

その時、大高の頭にこの調査に同行した一般人の事がよぎった。

「……おい、一緒に調査についてきた連中を捕縛しろ！」

彼らには悪いが、国のために多少の不自由は我慢してもらおう。

彼らは知らない。

内部の音声と映像が、マイクロ波通信によって外部に転送されている事を。

夏樹サイド。

予感は当たった。

本城の家での作業を始めるとき、本城がまず手渡したのは映画とかで出て来る白い防護服だった。

「おい、これは…」

「私が開発した最新の対NBC戦用特殊装備だ。世界で最も軽い代物だ」

この重さで軽い！？普通に十キロはあると思うんだけど。

「さっさと着ろ」

本城に促されて、服の上から着る俺と真田少佐。

出来上がったのは、雪山の謎の巨人×2だった。

その格好でまず指示されたのは、一階の鉛で覆われた部屋で台車ごと固定されている、巨大な卵状の何かだった。

「おい、これは何なんだ？」

「ああ、それはイギリスに依頼された新型のMIRV弾頭だ」

「？」

よくわからないが、ろくでもないものだという事だけは分かった。次に運んだのは、小型の冷蔵庫のようなもの。コンセントから引き抜いてもバッテリーでしばらく駆動するらしい。

好奇心に駆られた真田少佐が中を見ようとすると本城が止めた。

「それは絶対開けるな。バイオハザードは映画の中で十分だ」

それを聞いた瞬間、俺は真っ青になった。本城がそう言ったからには間違いなくそうなるのだ！

奇妙な顔をしている真田少佐を慌ててそれから引き剥がして、そのまま作業を続けた。

その後も出るわ出るわ。足の八本ある馬や、背中に翼の生えたライオンの？製。ガタガタと動く中身不明の箱。

最後に本城の学習机（無数の機械の間に置かれたかわいらしい机。実にシニールである）を運ぼうとしたら、慌てて本城が来て自分で運んで行った。いったいあの机に何が…！

そんなこんなで作業を終え、キャンプに戻った俺達三人。

しばらく寝たふりをしてしていると、調査隊の人たちが起き出した。

どうやら薬の副作用などもないようである。

そのまま俺達も今起きたふりをして朝食の準備を手伝った。しきりに、欠伸をしている本城がかわいがられていた。

そして調査隊が出発した後。

「フン…、やはりそう来たか…」

俺と本城、真田少佐は調査員が出払ったテントの中で、本城が家から持ち出したノートパソコンの画面を覗き込んでいた。最初はカラー表示される薄型ディスプレイに驚いていた真田少佐だったが、

どうやら大分この非常識にも慣れて来たらしい。

画面の中では、真剣な表情で周囲を調べる調査隊の姿と、俺達を拘束するように命じる隊長——大高さん——の声が聞こえてきていた。

「おい、どうするんだ？」

「なに、連中の思惑に乗ってやるだけだ」

俺の質問に、あっさりと答える本城。

「一時的に拘束させて口止めして解放とでも考えているんだろうが、こつちの身元が分からないとなれば話は別だ。だが、陸軍の士官と一緒に行動していた事で、強硬手段に出にくくなっているだろう」

一応は身内だからな。

詰将棋をやるような調子で言葉を組み立てる本城。

ついでに、真田少佐はこれを聞いて絶望の表情を浮かべている。

憲兵の世話になるのでは完全に陸軍で昇進する望みは潰える。いや、本当にすみません…。

「そこで、ある程度上の人間が出て来たところで隠匿してある『これ』の場所を教える」

指さすのは目の前のノートパソコン。

「これを目の前で華麗に使いこなせば、それで未来人の証明完了だ」

そうそう、と本城が付け足す。

「夏樹と真田は基本黙秘だから頑張ってくれ」

「またか！」

駐屯地で殴られた経験が頭をよぎる。もう嫌だ！

その時、真田少佐が一瞬鋭い視線を本城に向けた事に、俺は気がつかなかった。

抗議しようとした時、テントの外で水音がした。どうやら調査隊の一部が、早くも拘束しに来たようだ。

「話はここまでだ」

あっさり俺の抗議をスルーする本城。そのまま手際よくノートパソコンをジュラルミンケースに入れて、事前に掘っておいた穴に放り込む。

「二人とも、幸運を祈るぞ」

冗談じゃない！

猛烈に嫌な予感がするぞ！

その直後に、本城が呟いた「私もだがな…」という発言を、残念ながら俺は聞き取れなかった。

この事を後で激しく後悔するなんて、その時は思いもしなかった。

1941 反撃の狼煙 1 (前書き)

つい話の流れを無視して開戦直後の戦闘を書いてしまったです。
舞台はハワイ沖。海軍の至宝、第一機動艦隊。
そして米本土には、水中から忍び寄る次世代の主力兵器達。何話か
続けて開戦直後です！

1941 反撃の狼煙 1

北太平洋上。

呉を襲撃したアメリカ軍機動部隊は、自らが世界最強であると自負していた。

だがその考えも、これを見れば一瞬で吹き飛んでしまっただろう。

二つの輪形陣を組んだ艦隊。その中央をそれぞれ航行するのは四隻の正規空母。

右側の輪形陣で守られるは、艦首部分の飛行甲板を支える支柱が目立つ日本で最も古い正規空母『赤城』『加賀』そしてバランスの取れた中型空母として現在慣熟訓練中のヘリ空母『十勝』の原型にもなった『蒼龍』型空母『蒼龍』『飛龍』の四隻。

左側の輪形陣ではアングルドデッキ（斜め甲板）を世界で始めて装備した大型正規空母『翔鶴』型空母が四隻勢ぞろいしている。艦名は一番艦から『翔鶴』『瑞鶴』『紅鶴』『蒼鶴』である。

輪形陣を構成する護衛艦もそうそうたる面々が揃っている。

輪形陣それぞれに二隻ずつ配されているのは、艦隊の守護神『金剛』型である。

それぞれ、今年に入って行われた出師準備改装によりケースメイト式副砲の全廃が行われ、代わりに高角砲が十二・七センチ連装高角砲六基十二門に増設。同時に新型の射撃管制レーダーと射撃指揮装置を搭載。これらによって対空戦闘能力は最新鋭の大和型に次ぐ性能を誇っている。

同じく二隻ずつ配されたのは、世界で初めて艦載機としてヘリコプターを搭載した航空巡洋艦『利根』型である。

主砲は艦首に集中配置された三基の十五・五センチ三連装砲。

艦尾は巨大な格納庫が置かれ、そこに二機の哨戒、連絡用のヘリコプター『林檎』を搭載している。

当初は水上機を多数搭載する案も検討されたが、ヘリコプターの

利便性に水上機では太刀打ちできなかった。実際、海軍において水上機の重要性は急速に低下しつつある。

対空兵装は十二・七センチ高角砲を四基八門搭載。また、主砲の仰角も最大七十五度まで取る事が出来、対空砲としての使用も可能だ。

レーダーと射撃管制装置は大和型や金剛型の物に比べ一世代古い代物だが、それでも十分な性能と言える。

それらの間を埋めるように展開するのは各種駆逐艦だ。

最も数が多いのは『利根』型と同じ第二次補充計画（マル2計画）で建造された防空駆逐艦『白露』型で、六隻全てがこの艦隊に参加している。

当初は『初春』型の改良型として建造される予定だったが、当時開発が急速に進んでいた各種新型装備の試験艦として利用されたため、艦ごとにかなり外見が異なる奇妙な艦になっている。

主兵装は砲塔形式の十二・七センチ高角砲で、これを前後に一基ずつ搭載している。

最大の特徴はその射撃指揮装置であり、いまだに軍極秘の扱いを解かれていない『特型射撃装置一型』を搭載している。従来に比べ飛躍的に計算速度と重量の点で飛躍的に性能が向上した物で、その後の艦艇には全てこれが搭載されている。

同数が配されているのが『初春』型で、艦隊では『赤城』『加賀』に次ぐロートルである。

こちらも出師準備改装でドイツ製の二十ミリ四連装機銃を第二主砲に変えて二基増設し、半ば防空艦として扱われている。

残り四隻が海軍の主力の艦隊型駆逐艦『陽炎』型である。

『朝潮』型から引き続き、艦首側に一基、艦尾側に二基の十二・七センチ連装砲を搭載。雷装は六十一センチ三連装魚雷発射管を三基搭載。搭載する酸素魚雷と合わせて海軍の艦隊型駆逐艦の集大成と言えた。

その旗艦『蒼鶴』の艦橋。そこでは艦隊司令が最後の会議を開い

ていた。

『蒼鶴』艦橋。

「本作戦の目的は真珠湾軍港の徹底した破壊だ」

作戦参謀が全体に告げる。

「先ほどの通信で分かった通り、本日より我が国はアメリカ、イギリス、フランスを中心とする大西洋連邦諸国との戦争状態に突入した。これを受けわが軍は事前に想定されていた計画に基づき『天一号』を発動した。すでに参加各隊はそれぞれの任務を開始している事だろう。本艦隊も予定通り『撃』作戦を開始する」

『撃』作戦はいくつかの行程に分かれている。

まず第一段階で、空母艦載機による徹底した爆撃を敵飛行場に仕掛ける。予想される敵戦力は四百機前後。それに対し、こちらは第一次攻撃隊だけで四百機以上の戦力を送り込む計画である。後続する第二波も三百機を超える予定であり、まず間違いなく、この二撃で敵航空戦力は叩きつぶせると判断していた。

第二段階は、真珠湾への艦砲射撃を敢行するにあたり、最大の脅威になると予想される真珠湾要塞群の破壊である。これは機動部隊の第二次攻撃隊が行い、航空部隊の新兵器が使用される事になっている。

第三段階では、戦艦、巡洋艦による艦砲射撃を予定している。特に燃料タンクは最大の目標である。真珠湾の燃料タンクは地上部分

が欺瞞でメインは地下にあると推測されている。これの完全破壊が戦艦部隊に求められている。これに先んじて、航空部隊は第三次攻撃を敢行。第二次攻撃で取りこぼした在泊艦船の殲滅を目指す。

この段階で、航空部隊の消耗率は二十五パーセントを超えると予想されている。艦隊の弾薬残量は少ないもので二十パーセントを切る見込みだ。

この時点で、艦隊は後退。可能であればミッドウェー島の敵飛行場を空襲して本土へ帰還する。

この作戦は、アメリカ軍の呉空襲を遥かに凌ぐ大作戦だった。

「では、質問はないか？」

説明を終えた作戦参謀から引き継いだ参謀長が、集まった指揮官に問いかける。

それに全員が沈黙で答える。すでにこの作戦を前に数え切れないほどの作戦会議と図上演習を行っている。後は実行に移すだけだった。

集まっていた指揮官がヘリでそれぞれの艦に戻り、静かになった艦橋で司令官、山口多聞中将が近くにいた主計課の士官に向かって声をかける。

「今回の作戦、お前はと思うか？」

声をかけられた方は恐縮していたが、山口が再度促すとなかなか含みのある答えを返した。

「おそらく、現時点で最大の戦果を上げる目的でしたら、最高の作

戦かと思えます」

「ほう、つまりそれ以外の目的からすると最高でないと」

若干の笑いを含んだ山口の言葉にうなずく士官。

「なら、大尉だったらどういった作戦を立案したかね？」

山口の問いかけに、若干考えた大尉はゆっくりと返事を返した。

「…自分でしたら、本土を強襲します」

現状の我が艦隊の戦力は、他国の海軍に比べ懸絶した戦力を保持しています。一度であれば、ハワイを無視したアメリカ本土への攻撃も可能だと考えます。

大尉はそう締めた。

それを聞いた山口は含み笑いを漏らした。

怪訝そうな大尉に、山口が答える。

「いや、優秀な人材は意外なところに隠れていると思ってな」

これは極秘だぞ、と前置きして山口は告げた。

「お前の言う通りだと俺も思う。だが、今回の『撃』作戦は『天一号』の主演ではないのだ」

驚く大尉に、子供のような表情を向ける山口。

「本当の主演は、今頃すでに行動を起こしているだろう」

その顔は、艦橋の窓を通り越し遙か東方を指していた。

十二月六日十八時（東部標準時 日本時間七日八時） 北米大陸東海岸 ノーフォーク

そこはアメリカ海軍の総本山にして大西洋連邦の総本山でもある。無数の艦艇が平時から出入りしているそこは、日本の呉と横須賀を合わせたよりも多数の艦艇が出入りしていた。

チェサピーク湾の湾口は、哨戒任務の駆潜艇と駆逐艦が十重二十重に網を張り、東ヨーロッパ連合（E E U）所属の潜水艦の進入を断固として阻止している。

湾の奥に進むと、そこは世界最大の海軍基地として君臨するノーフォーク海軍基地がある。すでに開戦が決定し、近日中にイギリス北部、オークニー諸島にあるイギリス海軍の本拠地スカパフローへの進出が予定され、各艦整備に余念がない。

川を挟んで対岸に存在するポーツマス造船所は、もう日が落ちているにも関わらず照明が煌煌と照らされている。戦艦の装甲の取り付けは基本的に夜間に行われるのだ。

当直の兵士達はこの先の戦争について仲間たちと思いいいに話している。だが、そこにさほどの緊張感を感じられない。ピリピリした空気を感じても、具体的な開戦の日取りが分かるわけではないからだ。

しかし、その彼らに開戦の一撃は容赦なく打ち付けられた。

……ッ！

見張りの兵士が、何かが上空から飛来するのを目撃した瞬間だった。

ズドン…！

軍港に、突如として轟音が響き渡った。

「何事だ！」

眠っていた兵士達が慌てて飛び出してくる。

その間も、次々と上空から何かが飛び込んできて周囲に破壊と破壊を撒き散らして行く。

その時、一際巨大な爆発音が軍港全体、ひいてはノーフォーク全体を揺らした。

「なっ…！」

兵士達の視線の先には、甲板から巨大な火柱を吹きだして松明と化している正規空母の姿があった。

栈橋に横付けして補給を行っていた空母は一撃で飛行甲板を貫かれ、艦内に積み込まれた航空機もろとも火葬されつつあった。

栈橋の上では弾薬を輸送していたトラックが、次々に天高く舞い上げられている。

水線下にも損傷が生じたのか、空母は急速に傾斜を深めつつあった。

さっきまで照明がついていたドックは慌てて照明を落としたが、直撃による火災で真っ赤に照らしだされていた。熱を受けた照明が音を立てて割れて行く。

夜の軍港は、急速に混迷の度合いを深めて行った。

同様な事態はサンディエゴでも起こっていた。

昼間の軍港に飛来する多数の飛翔体の姿は、市民からもはっきりと見る事が出来た。

ノーフォークと違い、こちらは多数の多弾頭タイプが使用されていた。

ドックに入渠しているところを直撃を受け、コンクリートと鋼材の混合物と化す駆逐艦。

工廠施設に降り注いだ無数の子弹は市街地の一部を巻き込みながら、周囲に破壊の嵐を撒き散らす。

慌てて脱出を図って、衝突事故を起こす巡洋艦の姿もある。

市街地で発生した火災は、拡大の兆しを見せていた。

両軍港からは即座に緊急電が放たれた。

サンディエゴでは、哨戒中の飛行艇がある光景を目撃していた。電文には、こう記されていた。

刺客は海底より来り。

日本海軍が誇る戦略型潜水艦『イ400』型。その初陣だった。

大西洋連邦にとって、最悪の混乱から始まった大戦。

その混乱は、翌日になりさらに拡大する事になる。
もつとも、それはE E Uや大日本帝国も同じ事だったが。

1941 反撃の狼煙 2

十二月八日（現地時間七日）早朝 ハワイ諸島オアフ島真珠湾軍港。
真珠湾は天然の良港である。

波の荒い太平洋とは狭い一本の水路でつながれ、外海が荒れようとその中に籠っていれば安全が確約された。

軍港施設も充実している。大型の戦艦すら入渠可能なドックが設置され、隣接する工廠群が万全の補給を保証する。

太平洋のキーストーンにふさわしい地だった。

だが、そこを踏み荒らそうとする者たちが、空から舞い降りようとしていた。

オアフ島レーダー基地。

「敵味方不明機多数を確認！距離五十キロ、方位340！」

そこで、悲鳴のような報告が行われていた。

真珠湾はすでに昨日の呉空襲と同時に厳戒態勢に入っている。

しかも、その直後に反撃としてノーフォークとサンディエゴが正体不明の攻撃を受けたとの情報も入っていた。

レーダー要員は航空機の飛行予定を完全に頭に叩き込み、予定にない飛行物体を確認したら即座に司令部に通報していた。

そのレーダーのスクリーンが、突如として多数の反応を捉えた。距離は五十キロ。本来の性能ならこの倍の距離で確認できるはずだった。

「ちっ！連中は低空から接近してきたんだ！」

すでにリーダーが低空の目標の捕捉に問題を抱えているのはよく知られていた。欧州の戦闘は、そういった多数の情報を各国にもたらしていた。

即座に空襲警報が発令され、飛行場で待機していた戦闘機隊が出撃を開始する。

特に海軍の戦闘機隊は地上からの指示で、オアフ島上空に敵機が到達する前に迎撃する構えだった。

彼らは気がつかない。

すでにそれが、敵の術中にはまっている事に。

日本軍第一次攻撃隊第一波。

それは史上空前の規模の洋上航空戦力だった。

編隊の先頭を進むのは海軍の新鋭戦闘機『烈風』隊。機数は百機を超えている。予定の距離に達したため、ここまで五百メートルを維持していた高度を、翼に装備した緊急増速用ロケットを利用して急速に上げて行く。

それから数キロ離れて続く攻撃隊主力。

まず、上昇を開始したのは直衛任務にしている烈風隊の一部。数は三十前後。こちらは増速用ロケットを使わずゆっくりと攻撃隊に歩調を合わせて上昇していく。

その後を追うように上昇するのは海軍の主力艦上攻撃機『天山』。機数は百五十機超。高性能のエンジン『誉』を搭載。最高速度が五百キロに迫る高速攻撃機だ。

腹部には巨大な八百キロ爆弾か、五百キロ爆弾を二発搭載してい

る。

これらとは逆に、高度を低く抑えたまま飛行する部隊もある。

機体は液冷エンジン機特有のどがった機首を持ち、印象としては陸軍の新鋭戦闘機『飛燕』に近い。

この機体の名前は『彗星』海軍で初めて液冷エンジンを搭載した高速機。地上攻撃機として陸軍でも採用が決まっている。空荷であれば最大速度は六百キロを超す高性能機だ。

兵装は腹部に二百五十キロ爆弾を二発抱えている。同時に翼には鉛筆のようなロケット弾が大量に搭載されている。対空兵装の破壊を目的とした兵装だ。

機数は百機前後。こちらにも直衛の烈風が二十機ほどついている。すでに先頭の戦闘機隊はオアフ島上空に侵入を果たしつつある。

「作戦は成功かな？」

天山の一機に乗り、全攻撃隊の指揮を執る淵田美津夫が周囲を見ながらつぶやいた。

編隊は、ここまで一度も敵戦闘機に出くわしていなかった。

前方では、さすがに気がついた敵戦闘機が味方の制空隊と交戦に突入していたが、その数は明らかに少ない。

だが、先だって迎撃に出撃した海軍の戦闘機隊は？

その答えは、無数のアルミ箔だった。

アメリカ海軍戦闘機隊。

「クソッ！奴らにはめられた！」

指定された空域に到達した彼ら。

司令部から、自分達が敵編隊のど真ん中にあると言われ、高度を間違えたかと慌てて周囲を見回した。

その時、部隊の一人が発見した。

「隊長！チャフです！」

周囲を舞っていたのは無数のアルミ箔だった。太陽の光を反射して銀色に輝いている。

「全隊、すぐに引き返すぞ！」

即座に撤退に移る戦闘機隊。

だが、すでに手遅れなのは明白だった。

日本軍は、戦わずしてアメリカ軍の戦闘機隊の半数を無力化する事に成功したのだ。

前衛戦闘機隊。

「とつとつ開戦か…」

戦闘機隊の一隊を率いる本田士朗は一人の操縦席で小さくつぶやいた。

本田は東大の経済学部を卒業したのに、その後海軍の予科練に入学した変人として知られていた。

その本田は、今の状況で戦争することにまったく利点を見出していなかった。

今の日本は非常に好景気だったからだ。

近年急速に進んだ技術革新のおかげで国内市場は順調な成長を続けているし、満州をはじめとして日本との関係の強い東アジア諸国や日本の実効支配下にある中国の一部地域への輸出も好調だ。

昨年には、大西洋連邦諸国やソ連のボイコットに遭いながらも、アジア初のオリンピックを東京で成功させ日本の発展をアピールしていた。

技術面での協力関係にあるドイツやEEUとの関係も良好だった。

（もつとも、それがこの戦争の原因になったのは間違いないが…）

その時、オアフ島の島影が見えてきて、本田は無駄な思考を振り払った。

周囲には同じ隊に所属する烈風が多数飛行している。

彼らに課せられたのは攻撃隊本隊に先行して敵戦闘機ファイター・スウィープの掃討を行う事だった。

「全機、散開！」

隊長の指示に従い一切に散開ブレイクする。

自らの後ろに三機の僚機が続くのを確認して、一気にスロットルを開く。

すでに前方には多数の黒点——敵戦闘機——の姿が見えてきている。見たところ、まともな編隊を組んでいるのは一握りで、ほとんどはバラバラに緊急離陸しているようだった。

それに向かって、彼らは容赦なく襲いかかって行った。

本田はまず近くの一機に狙いを定める。液冷エンジンにも関わらず、彗星などと違い太い機首が印象的な『ウォーホーク』だ。まだ十分に高度を取れず速度も乗っていない。

「食らえ！」

そのまま斜め上方から両翼に仕込まれた二十ミリ機銃を放つ。
放たれた銃弾は、一瞬で主翼を金網レベルまで破壊し燃料に引火して火を噴きながら堕ちて行く。

「…撃墜ー！」

そのまま編隊を率いて一度急降下する。追撃を警戒しての行動だ。
案の定、機体の下の死角から急上昇で襲撃を狙っていた敵機が何機かいた。機種はさつきと同じウォーホークだ。
気付かれた相手はそのまま正面戦闘を挑んできた。再度機会をうかがう余裕はないと判断したらしい。

「そんなのに付き合うか！」

だが、本田はそのまま針路を変え急降下を続ける。同時に編隊は二機二組に分かれる。

それを見て慌てて追撃する敵機。正面からの銃撃は性能差を生かすににくい。無駄な危険を避けたのだ。

低空で旋回し、今度はこちらが敵機の背後を取ろうとする本田。
だが、敵機もそうはさせじと鋭い旋回で本田の背後にぴたりとつける。

この時、敵機は奇妙に思ふべきだった。なぜ本田が自分達を振り切らないのかと。

あと少しで本田機が射程に入る。

その時、側面から二十ミリ機銃の嵐が敵機を襲った。

あっという間に地上に突っ込む敵機。

「助かったぞ！」

本田が無線に叫ぶと、射ち落とした部下が、わざとやったでしょ！と本田の考えを完全に見抜いて言ってきた。本田はわざと敵機に追いかけて、味方の射線に誘い込んだのだ。

苦笑しながら次の目標を探す本田。

だが、空戦はすでに収束しつつあった。飛んでいるのはほとんどがこちらの戦闘機で、僅かに生き残った敵機はすでに敗走している。その時、隊長から指示が来た。敵機への追撃より地上の対空砲の制圧を優先する内容だった。

すでに真珠湾の上空に、味方の攻撃機部隊が侵入しつつある。序盤の一撃で、オアフ島の制空権は日本側が完全に握ろうとしていた。

1941 反撃の狼煙 3

オアフ島上空 日本軍第三次攻撃隊。

第一次攻撃の時点で四百機以上いたその機数は、すでに三百機前後まで減っていた。消耗率は二十五パーセント超。間違いなく大損害である。

無論、その全てが撃墜されたわけではない。連続する出撃に機体が耐えかねて故障したものもあるし、帰還はしたが損傷が激しくて再出撃不能とされた機体も多い。生き残った搭乗員の疲労も限界に達している。

だが、これまでの出撃で彼らが未曾有の大戦果をあげたのは間違いない、その名誉を支えに、搭乗員達は今日最後の出撃に臨んでいた。

「しかし、妙だな……」

これまでの戦いを無傷で生き残り、今回も指揮を執っている淵田は怪訝そうな表情を浮かべていた。

真珠湾に大型艦がない。

その事は第一次攻撃で軍港上空を通過した時に明らかになっていた。

司令部では、条約型の旧式戦艦と近年就役した新鋭戦艦が、合計で六隻前後停泊していると見積もっていたのだ。そのために、水深の浅い真珠湾で使用可能な浅沈度魚雷を開発したのだ。

だが、湾内にいるのは巡洋艦以下の補助艦艇に限られ、その巡洋艦も多くは旧式かドック入りしているものだった。

そのため、第二次攻撃で使用予定だった魚雷は使用されず、低空からのトス・ボミングで仕留めていた。

悲惨なのは敵飛行場だ。

第一次攻撃の際の撤退方位から、当初は民間飛行場と思われた飛行場がいくつか軍用になっている可能性があり、対艦攻撃の必要性が薄れた航空隊は集中的に爆撃を加えていた。

淵田の眼下には、島全体を飛行場として整備されているフォード島が見える。飛行場の周辺施設は彗星隊がばら撒いた小型爆弾の雨を食らって今も激しく炎上を続けているし、滑走路は、淵田を含む天山隊が大型爆弾の集中砲火を行い、二か所にまるで巨大な斧を叩きつけられたかのような大穴を穿たれ、三つに細胞分裂している。

だが、大型艦がない事実、淵田はうすら寒いものを感じていた。

（連中、この攻撃を分かってたんじゃ…）

考えてみれば、アメリカ軍がこの攻撃を予期していた可能性は十分にあった。当初は気休めのつもりで偵察隊がばら撒いたチャフに、敵は迅速に対応し戦闘機隊を差し向けて来た。湾上空に到達したとき、すでに艦艇は動き始め盛んに対空砲を撃ってきた。飛行場の敵機はほとんどが偽装され発見を逃れようとしていた。

それでも勝てたのは、こちらの戦力が相手を大幅に上回っていたからに過ぎない。もし相手が、後二百機航空機を配備していたらどうなったかわからない。

なら、そのぶんの戦力はどこに…。

その時、淵田に部下からの報告が入った。

「隊長、やはり真珠湾にめばしい目標はありません。攻撃を第二目標に切りかえる事を具申します」

第三次空襲では天山の装備は、二百五十キロ対地徹甲爆弾を二発搭載している。すでにめばしい艦船は撃沈し尽くし、後は対地攻撃を行うだけだからだ。

一応、有力な敵艦がいるようならそちらを優先することになっていたが、いないようなので第二攻撃目標である燃料タンクの攻撃に移る。火災による煙が攻撃の障害になるので、ここまで一切の攻撃を行っていない。

本来なら、燃料タンクへの攻撃は艦隊の艦砲射撃で行う手筈だったが、真珠湾上空への侵入直前、艦隊司令部からの指示で変更がなされた。

怪訝に感じた淵田が理由を尋ねても、返事は得られなかった。

（一体何があつたんだ…）

その時、編隊が軍港の上空に侵入を果たした。対空砲を警戒するが、すでにほとんどが破壊されたようで、飛行場を襲撃している編隊が散発的に砲撃を受けている程度だ。

「よし、各機爆撃態勢！」

無線に叫ぶと、淵田は爆撃照準器を覗き込む。搭載されている照準器は工藤技研製の『特式爆撃照準器』高速ジヤイロで水平を保ち、自機を自動で計算に組み込んで照準を補助する最高機密の装置。高価なため一部の指揮官機にしか搭載されていない。

「ちよい右」

「ちよい右了解」

照準を合わせる淵田の声に従い、操縦士が機体を操る。眼下には、巨大な艦船用燃料タンクがたむろしている。

「よし、そのまま直進」

「直進了解」

装置ではさすがに横風の影響まで計算に入れる事は出来ない。事前に投下した観測弾の軌跡を読んで照準に反映する。後続の機体は淵田の爆撃にタイミングを合わせて一斉に投下する。責任は重大だ。

「投下、今！」

照準器の十字と目標が重なった瞬間、淵田は投下索を引いた。

次の瞬間、重量物の投下で跳ね上がる機体。

それを感じながら淵田が背後を振り返ると、編隊の各機は全機が無事に投下を終えていた。再度照準器を覗くと、急速に小さくなる爆弾の姿が見えた。

投下から着弾まで数十秒。全員が、息をのんでその瞬間を待つ。

一瞬、目標のタンクが膨らんだように見えた。

「……！」

次の瞬間、タンクは炎の塊に代わる。同時に周囲に多数の爆弾が着弾、破壊の嵐を撒き散らす。

僅か数秒で、タンクのあった付近は火の海と化していた。存在が予想される地下タンクの破壊に成功したかは定かでないが、甚大な打撃を与えたのは間違いなかった。

遠くを見ると、ダイヤモンドヘッドが爆炎を上げていた。あちらの攻撃部隊は、新型の対地貫通爆弾を搭載していたはずだ。自由落下にロケット加速を組み合わせ、高度六千メートルから四メートルの対爆コンクリートを貫通する凶悪な兵器である。おそらく、あの地下にある砲兵観測所は阿鼻叫喚の地獄と化しているだろう。

「全機、帰還する」

戦果を見届けると、淵田機を先頭に全機が撤退する。

機体は、あつというまにオアフ島の上空を抜けた。

任務を終えた充足感を感じながら、淵田はそれでも油断なく周囲を監視していた。気を抜いた奴から、先に死んで行くのが戦場だ。

その時、一群の艦艇が真珠湾から遠ざかる方向に航行しているのが見えた。

真珠湾に姿が見えなかった戦艦かと警戒する各機。

だが、その艦隊は旭日旗を掲げていた。

「隊長、あれは行きに見かけた砲戦部隊じゃ…」

確かに、よく見れば先頭を航行しているのは艦隊に所属していた陽炎型だし、中心を単縦陣で航行しているのは四隻の金剛型だ。

かなりの高速を出しているらしく、艦全体をうつすらと水しぶきが包んでいる。

「だが、進行方向がおかしいぞ」

本来なら、戦艦部隊は第三次攻撃に前後して真珠湾への砲撃を敢行する予定だった。

それが、今は急いで艦隊へと引き返している。

猛烈な悪寒に、背筋を振るわせる淵田。

「…一体何があったっていうんだ…」

答えは、北の大地にあった。

1941 反撃の狼煙 3 (後書き)

次回はまたタイムスリップ前後なのです！

幕間 1 風間祥子の困惑 (前書き)

今回は短めなのです。

明日また長めを出すです！

幕間1 風間祥子の困惑

みなさんこんにちわ。私、風間祥子です！

最初の方に登場してましたが、みなさん覚えてくれてましたか？
今年高校に入ったばかりのピカピカの一年生です！

高校では、本城さんや工藤君みたいな楽しい人と出会えましたし、
山田君みたいなカッコイイ男の子とも出会えて、今とっても幸せです？

でも、最近困った事がありました。

なんと、本城さんと工藤君がいなくなってしまったのです！
学校に来ないのでお家を尋ねてみたら、大きなクレーターが出来
ていて、後には何もないというミステリーなのです！

山田君も一緒になって調べてくれましたが、結局手掛かりは掴め
ず、一か月が過ぎてしまいました…。

そんなある日。

「…これは一体何なのでしょうか？」

場所は私の家の駐車場。

目の前にはうず高く積まれた大量の段ボール箱。
その向こうでは、今も次々と黒い猫の書かれたトラックがやって
きては、荷台一杯の荷物を降ろして行きます。

送り主は『本城美樹』と書いてあります。

…本当に、何なのでしょうか？

幕間1 風間祥子の困惑 (後書き)

お気に入りが増えました！とっても嬉しいのです！

1930 責任

柱島で調査隊に拘束されてから一週間。

案内された部屋に、俺はすぐに飛び込んだ。肋骨のヒビが痛んだが、気にする余裕はなかった。

「本城！」

「…なんだ、夏樹か」

ベッドの上の本城は、俺に気がついて上体を起こす。そのままいつも通りのシニカルな笑みを浮かべようとするが、失敗していた。

本城はボロボロだった。

病院の白衣の下には無数のアザが出来、左腕は肘から先が指先まで全てギブスで覆われていた。顔は比較的怪我が少ないようだったが、頬に大きな青あざが出来ていた。

頭の中は悔恨の念でいっぱいだった。

分かれる前の本城の言葉の意味。俺はまたかと思ったただけだったが、実際は俺や真田少佐、吉田少将を守るためのものだった。

「…！本当に、ごめん…！」

俺は傷に障らないように、触れるように本城を抱きしめた。

「…夏樹…」

本城も、ゆっくりと震える右手を俺の背中に回した。

「…怖かったよ…！」

そのまま本城は子供のように泣き始めた。
俺には、抱きしめる事しかできなかった。

話は拘束される直前までさかのぼる。

本城は拘束される直前、俺と真田少佐にこう言ったのだ。

自分は知らない、全て本城に聞けと言え。と。

理由を聞こうとしたが、その直後にばらばらに拘束されてしまい、真意を確かめる事は出来なかった。

その後の三日間ほどは混乱の連続だった。要請を受けた陸海軍なそれぞれ調査隊を派遣、その重要性を理解するのにそう時間はかからなかった。即座に要塞区画指定がされ、柱島の西水道は使用不能になった。

俺達三人は、そのまま海軍の飛行艇に乘せられて横須賀に直送。そこで身元を尋ねられた。

本城に聞いてくれ。

相手は怪訝そうな顔をしていたが、すぐにそれが緊張に包まれた。スパイ容疑がかかったのだ。

最初は海軍の立派な建物に連れて行かれたが、この直後に場所不明の監獄に叩きこまれた。

そのまま厳しい尋問が繰り返された。三日間睡眠はゼロ。食事と水は最小限。寝れば殴られ起きていても殴られた。

それなりに鍛えた体のおかげで死ぬことはなかったが、後一日でも続いていたらヤバかったかもしれない。

それは突然に終わりを迎えた。

突如解放された俺は、そのまま丸一日医務室で眠る事になった。
この時の俺に、本城の事を考える余裕はなかった。

一晚寝て、ようやく本城の事を思い出して診察に来た医者に問いかけた。俺は本城の事だから、一人だけちゃっかり無傷でいて、いつも通りのあの似合わない笑みを見せてくれると思っていたのだ。返事は、予想外のものだった。

あのお嬢ちゃんはまだ起きてないよ。

俺はてっきりまだ寝てるんだと思った。俺が痛い目にあってるのにあの野郎！

案内してほしいと言うと、難しそうな顔でその医者はうなずいた。

「たぶん、今晚が峠になるだろう」

えっ…？

瞬間、凍りついた。

「お嬢ちゃんはかなりひどい扱いを受けたらしくてな、全身の怪我がかなり酷い。その状態で無理に動いたりしたから余計に悪化してる。正直厳しいところだ」

即座に俺は病室から飛び出した。

そのまま病院の中をでたらめに本城を捜しまわった。見つかったのは奇跡だった。

「本城…！」

本城はベッドに横になって眠っていた。
それが安らかなものでないのは、表情を見ればすぐにわかった。

付き添いの看護婦が立ち上がり俺を制止しようとするが、そのまま近づいて布団から出ている右手を握る。温かいが、握り返してこないことに猛烈な不安を感じた。

それでも、俺は握り続けた。

しばらくして俺を探しに来た医者が姿を見せたが、何も言わずに立ち去った。

医者が看護婦を連れて出て行ってから、怪我をした体が限界を迎えて倒れるまで握り続けた。

それから三日間、本城は眠り続けた。

怪我を押して見舞いに行こうとする俺に業を煮やした医者は、とうとう俺を精神病患者用のベッドに拘束した。

それでも、必死になって頼み込んで、一日一度手錠と足枷付きという囚人状態で見舞いに行く事を許してくれた。

その間、俺と同じで尋問で怪我をした真田少佐となぜか旅館で飲んだお茶に彼岸花の根（心臓の毒）が入っていて（おそらく本城が混ぜた）緊急入院していた吉岡少将が訪れた。

「覚悟の上だろう」

真田少佐が苦しそうに言った。

「あの状況で捕まれば、こうなる事は明らかだった。その上で、本城さんが言った『本城に聞け』という言葉は自分ひとりに尋問を集中させようというものだろう」

なんでも本城さんは特高の奴らに、東京のトップ以外に話す事はないと言っていたそうだ。僕と君の二人を尋問しても本城さんに聞くように言っただけ。最年長の少将閣下は入院中で手荒な事はできない。そして特高にとって、事は自分たちでは手に余るほど重要。ここまで条件を整えて、出来るだけ上位の人間に自分を売り込もうと

したのだろう。

真田少佐の予測を聞いた後、俺はいつその事に気がついたのか聞いた。

「分かれる前の最後の言葉で」

「ならなんで止めなかった!？」

ベッドの上で拘束されながら叫ぶ俺に、少佐は厳しい表情で告げた。

「本人が望んだからだ」

そのまま静かに続ける。

その言葉を聞いた時、私ははつきり反対しようとした。負担が彼女一人に集中するからだ。だが、彼女は目ではつきりと言うなど言ってきた。そもそも、これは明らかに君の負担を軽減する事が目的だ。だれが中心かを考えれば普通は男の工藤くんか騎兵士官である私だと考えるだろう。それを彼女は変えたかったんだ。責任を取るために。

「上の人間を要求したのはついでだろう」

俺は何も言えなかった。

タイムスリップからこれまで、俺は自分から何かをしただろうか。全部本城に押し付けて文句しか言ってこなかったのではないか。その果てに、あいつは全部の責任を背負い込んだのか。

自責の念に苛まれる俺を見て、二人は病室を出て行った。

そして、ようやく本城が目を覚ましたと聞いて、俺は全力で本城の元へ向かった。

腕の中で泣いている本城に話しかける。

「こっちに来てから今まで、全部お前に押し付けて本当にゴメン…」
「…ううん、そんな事ない。夏樹がいるだけで凄く楽しかった…」

腹筋を使わない時特有の細い声。怪我はすぐに治るほど軽いものではなかった。

腕の中におさまっているせいで、その表情は分からない。

「…だからもう、絶対に離れないで…」

「ああ、約束する。これから一生絶対に離れない」

その時、動く右手を本城が枕の下に入れた。

「ちゃんと証拠もあるからね？」

細い声。だが、確実に普段の奴と同じ印象を感じる。

これは…

『約束する。これから一生絶対に離れない』

「こんな感動的な告白してもらえて、私は本当にうれしいぞ」

取り出したのは録音機。再生されるのは、俺が本城に約束するシーン。

「なっ！お前まさか…！」

「せっかくの怪我だ。有効に使わないともったいないではないか」

抱きしめていた腕を離す。

そこには、涙の跡を残し、若干苦痛に歪めながらも、いつも通りのシニカルな笑みを浮かべている本城の姿があった。

慌てて後ろを振り返ると、一緒に病室にやってきた医者と看護婦、少佐と吉岡司令はすっと目をそらす。

その顔は、こうなる事をあらかじめ知っていた人間の表情だった。

「~~~~！畜生！嵌められたーーー！」

絶叫する俺を、本城が満足げな表情で見つめていた。

幕間 2 山田太郎の閃き (前書き)

とうとうお気に入りが四十件を超えて、とっても嬉しいのです！
今回は短めですが、この後明日も投稿するです！

幕間2 山田太郎の閃き

「中身は全部プラレールだな」

読者のみんな、俺の事を覚えていてくれたか！工藤みたいなリア充野郎とも友達づきあいが出る、やさしい心の持ち主、山田太郎だ！…えっ、お前もだろ？何を馬鹿な。俺は生まれてから今まで、彼女なんて一人もないぜ！……（はあ…）

そんな俺だが、今日突然風間様（さんづけなんておこがましぜ！）に呼び出された。学年一の美少女（俺的には本城さんよりこのみだ）に呼び出されて浮かれる俺の目の前に現れたのは、ぎっしりプラレールの詰まった大量の段ボール箱だった。

場所は風間様の御自宅（風間様を生んでくれなかったら、このブルジョワめ！と罵倒するところだ）の駐車場。そこを埋め尽くすようにして置かれていた。

「しかも送り主が本城さんか…」

本城さんが夏樹の奴と一緒に家ごと行方不明になるという怪事から、すでに一カ月。馬鹿でかいクレーターが出来ているのに、なぜかマスコミにも取り上げられない不気味さもあって、クラスメイト達は意識的にそれを無視している。

「後ね、この紙も一緒に入ってたの」

風間様が懷から取り出したのは、一枚の設計図のようなもの。どうもプラレールの敷き方のようだ。

「でもね、この建物が分からなくて…」

確かに、この見取り図だけでどこの建物なのか調べるのは難しい。
だが、

「ん…？これって夏樹のところの廃工場じゃないか？」

俺はなんとなく見覚えがあった。

以前何かで本城さんと夏樹に連れられてそこに行った事がある気がする。確かそこで…。

…不自然に記憶が途切れている。一瞬のブラックアウトの後なぜか倒れている俺を、ひきつった顔の夏樹と満足げな本城さんがのぞきこんでいた。

…なんだか怖いので、これ以上考えない。そうさ、俺は何も覚えていない。覚えてないったら覚えていない！

「…それよりも、風間さんはこれを組み立てるつもりなの？」

「うんっ！もしかしたら、二人の行方が分かるかもしれないし」

…正直、プラレールを組み立てて、二人の行方不明者が見つかるとは思えないのだが、風間様は本気の様だ。

「だったら、何人か応援呼ばないとなー」

この設計図と目の前の段ボールの山を見るに、作られるプラレールの規模はどう考えてもギネスブックに挑戦するとは思えないものだ。二人でやったらどれだけ時間がかかるか分からない。二人で長時間一緒…。

クソッ！それも捨てがたいが、風間様の貴重な時間を無駄にすることはできない！

「わかったわ。よろしくね、山田くん！」

感謝する風間様。

…あれ？今一瞬、不機嫌そうに見えたのは気のせいかな。

「よし。そうと決まれば始めるか！」

…というか本城さん、出来ればこの荷物、半分くらいは工場の方に送ってもらいたかったんですが。
運ぶのどうしよう…。

1930 責任 2

「なんだと…！」

本城の告白に、俺は言葉を失った。

「他に方法はないのか？」

「…ない」

俺の確認に、そっけなく答える本城。

「ふざけるな！そんなことしたら、ここにいるみんながどうなるか…！」

俺は本城に掴みかかった。

「お前は吉岡司令や真田さんがどうなってもいいって言うのか！」
「そんなわけない！」

本城も怒鳴り返してきた。

「夏樹はずっと早く帰りたいって言ってた！だから私は頑張って準備して、夏樹が傷つくだろうからこの事も秘密にしてきたの！それなのに、なんでこのタイミングで気付いちゃうの！」

瞳に涙を浮かべながら本城は続ける。

「本当は、全部私が背負うつもりだったのに、どうして…！」

あまりの本城の覚悟に、衝撃を受ける俺。
肩を掴まれたまま、本城は俯いて静かに泣き始めた。
小さくしゃくりあげる声が、俺の胸を苛んだ。

時は三日ほどさかのぼる。

転移直後の尋問の日から一月ほどが経過している。

あれから何度か俺達は帰れるのか本城に尋ねたが、少し時間はかかるが可能だそうだった。方法は教えてくれなかった。どうせ聞いても分からないだろうと、俺も深く考えなかった。

あれから、本城は政府と交渉し、各種技術協力を条件にある程度の資材などの配慮を受けられるようになった。こちらの持つ技術を欲する政府や軍部としては、強引な尋問を行った事はかなりの弱みになっているようだった。その窓口には騎兵連隊司令を解任された吉岡司令（本当にすみません…）が当たる事になった。

それを通しての最初の要求が、今日行われる予定だった。

「なあ本城、今日は何が運ばれてくるんだ？」

すでに本城の家の前では、作業に当たる作業員（全員が真田さんの部隊に所属していた人）が受け入れ準備を進めている。

「まあ、見ればわかるだろう」

飄々とした様子の本城。自前の怪しい薬を服用して怪我はほとんど癒えている。シニカルな笑みは健在だ。

その時、視界の中に一隻の小さな船が見えて来た。奇妙に角ばっ

た印象を受ける船だ。

驚いた事に、その船はそのまま浮島と化している本城家の駐車場だった場所（向こうにいた時も使われるのを見た事が無い）に乗り上げて来た。

コンクリートと鋼鉄がこすれる嫌な音を響かせながら、低速で乗り上げた舟艇はそこで停止し艦首に備えてあつた渡り板を倒してきた。

作業員が一斉に舟艇に取り付き、荷降ろしを始めた。
出て来たのは、大量の石だった。

「なんなんだあれは？」

「なに、ちよつとした鉱石だ。地下の精錬施設で使う」

鉱石は、本城の家の庭にある貨物用エレベーター（この存在も俺は知らなかった…）で地下の収納施設に運ばれている。

舟艇一杯に積み込まれた鉱石。

気のせいかな、何かで見た気がした。

「お前、一体何するつもりだ？」

「…秘密だ」

一瞬の間が若干気になったが、本城は普段と変わらない表情だったので、出来上がるまで黙っていようと思った。

俺は気がつかなかった。

俺の視界の外、本城の手が、爪が食い込むほど強く握りしめられている事に。

そろそろ春も終わりの季節。そとにずっといると若干汗ばむほど

なので、作業の終わりと同時に俺と本城は本城の家に。作業に当たった部隊は、調査隊がそのまま残した野営施設に戻り休息に入った。本城はすぐに自分の部屋に引っ込んでしまい、俺はする事もなく鉱石が運び込まれた倉庫に赴いた。

そこは他の建物から隔離された場所で、地下一階から伸びる地下通路で連絡されていた。

通じる扉は電子ロックだったが、すでに指紋と声紋を登録済みの俺はすぐに通れた。

その時、背後から慌てて駆けて来る足音が聞こえて来た。

「待て夏樹！その中に入るな！」

その右手には見覚えのある白い防護服があり、よほど慌てたのか、顔に汗を浮かべている。

驚いた俺が足を止めたのを見て、本城も足をゆるめる。

「夏樹、私の家で勝手に行動するとはいい度胸だな」

「うっ……」

確かに。俺の家が海中に消えてしまった（涙）とはいえ、ここは本城の家なのだ。勝手にうろつくのはほめられた事じゃない。

「わ、悪かった」

「分かればいい」

そういうと、本城は俺を通路から引っ張り出し、すぐにロックを掛け直した。

それを確認すると、本城は足早に去って行った。

その様子に、どこかおかしい物を感じる俺。

ふだんのあいつなら、あの後『だが、私の夫になってくれるなら

話は別だぞ?』などと言ってくるはずだ。だが、今回はそれが無かった。

「体調でも悪いのかな?」

あいつが元気だからうつかり忘れがちだが、あの尋問からまだ一月しか経っていないんだ。

(少しは気づかってやるか)

この時、俺は深く考えなかった。本城の持っていた防護服の意味を。

鉾石は翌日も大量に運び込まれていた。

俺は地下で、その精錬が行われる様子を見ていた。

地下一階と二階をぶち抜いた、高さのある部屋にその施設はあった。俺はそこを二階部分に設けられたガラス張りの部屋から眺めていた。

施設は完全に機械化されていて、黒っぽい鉾石がアームで機械に放り込まれ、出口からは緑色の塊になって押し出されていく。

その塊は、さらに奇妙な円筒形の装置に運び込まれ、なにか作業をしている。

…似たような何かを、見た事がある気がする。

本城の動きは、いよいよ怪しくなってきた。

これまでは、朝は俺に起こしに来させていたくせに、急にそれを止めさせたのだ。おまけに、最近は夜もあまり眠っていないらしく、俺にしか分からないほど僅かだが顔色が悪い。

「…直接本人に聞いてみるか」

うじうじ悩んでも仕方がない。ここは一発、本人に聞いてみよう。
そのまま地下から本城の部屋の前まで移動し、扉をノックする。
だが、返事はない。

「本城、入るぞ」

一応そう断って、本城が寝起きしている各種機械に埋め尽くされた部屋に入る。

本城は中央の学習机に突っ伏して眠っていた。女性の寝顔を見るのはあまりほめられたことではないが、その寝顔はあまり安らかとは言えない。

うなされているようなら起こしてやろうと思い、机に近づく。

その時、机の上に置いてある、何かの設計図のようなものが俺の視界に入った。

卵のような形をした何かを描いたそれは、俺の知らない言語で書かれていてすぐに判別する事は出来なかった。だが、異常に不吉な何かを感じさせた。

「んっ…」

その時、俺の気配に気がついたのか、本城が身じろぎした。

慌ててその設計図をポケットに突っ込む俺。やってから、なんでこんな事してるのか自分で疑問に思ったが、次の瞬間本城が起きてしまっただけで返すタイミングを失った。

「…！夏樹！なんで私の部屋に勝手に入った！」

「いや、だって呼んでも出てこないから心配になって…」

なにやら動揺した様子の本城。

それに、とつさに口をついて出る言い訳。

だが、本城はそれを聞いて嬉しそうな苦しそうな、複雑な表情を浮かべた。

「そうか…、いや、私の事を心配してくれるのは嬉しいが、しばらくこの部屋には入らないでくれないか？」

「…わかった」

理由を聞きたかったが、本城の目が珍しく真剣だったので追撃する機会を逃した。

体に気をつけるように言って、俺は本城の部屋を後にした。ポケットの中に突っ込まれた手。

その中には、机の上にあった一枚の設計図が握られていた。

「あ~~~~、畜生！これでもない！」

翌日。俺は本城の家の書庫に籠って設計図の解読を試みていた。

ここまで、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語を調べたがそのどれでもなかった。

周りには引っ張り出された辞書が散乱し、今また新しい辞書がその仲間入りを果たした。

「これはどうだ…、ん…？」

半ばあきらめながら、新しい辞書を取る。

「…あった」

それはキリル文字、つまりロシア語の辞書だった。どうりで見覚えのない言語だったわけだ。日本でロシア語を知ってる人間なんて外務省か旅行会社にしかない。それを使つて解読を進める。

二時間後、ほぼ解読が終わった。

「これ、一体なんだよ…！」

そこに記されていたのは、多段階核弾頭の設計図だった。

名称は『RDS-220改』

基本設計は中心にある起爆用プルトニウム型爆縮原爆の周りに核融合用の重水素を充填。さらにそれをウランが包むという三層構造だ。補足に書かれている通りなら重量は二十トンを超える巨大爆弾だ。

威力は広島型の数千倍。ここで起爆すれば広島ではなく広島県が日本の地図から消えるだろう。

その時、俺は昨日ここに運ばれていた鉱石が何なのか思い出した人形石だ。

人形峠周辺で取れる特殊な鉱物。戦後日本で、国土の半分を掘り返したといわれる大規模な探床において発見されたもの。

国内で唯一、ウランを含む鉱石。

本城は俺が倉庫に入るのを止める時、防護服を抱えていた。その意味が分かった。

「…本城！」

あいつが何を考えているか、今すぐ確認する必要がある！

俺は、急いで本城の部屋に向かった。

「本城！」

部屋は散らかりきっていた。床一面に大量の紙が散乱し、その間に引っ張り出された引き出しが転がっている。何かを探していたのは明らかだった。

「夏樹！部屋に入るなと……」

「探してるのはこれか？」

突然部屋に入ってきた事に抗議する本城の言葉を遮って、俺は例の設計図を取りだした。

「なっ！どうしてそれを持つてる！」

「そんな事よりも、俺はお前が何をしたいのか知りたいな」

俺の言葉に、本城は顔をそむけて答えない。

「これは核兵器だろ。こんなものを作って、お前は何をするつもりなんだ！」

俺達はいくまでもこの世界の部外者だ。本城が帰る準備を終えたらさようならだ。だが、そこに核弾頭を置いていくなど正気とは思えなかった。

ここまで、多くの人とこの時代で出会ってきた。真面目な騎兵将校の真田少佐。不幸属性の吉岡司令。不景気に喘ぐ商店の人たち。恐怖の憲兵隊。

たとえ会う事が出来なくなっても、幸せになってほしかった。今行っている技術提供もその足しになればいいと思つての事だ。

だが、そこに核弾頭を残して行く事が、彼らの幸せにつながるとは思えなかった。

俺が怒鳴ると、本城は聞き取れないような小さな声で何か言つた。

「なに？」

「帰るために必要だと言つたんだ！」

俺が再度問いかけると、本城は怒鳴るように言つた。

「私達が元の世界に帰るのに、この爆弾を起爆して出るエネルギーを利用する以外、方法はないんだ！」

衝撃の事実だった。

話は、ここで冒頭に飛ぶ。

「悪かつた……」

肩を掴んでいた手を離して、そのまま抱きしめた。

「そんなことになるんなら、俺は帰れなくてもいい。お前と一緒にいるって約束したんだ。だから、こういう事を一人で抱え込まないでいいんだ……！」

「夏樹……！」

そのまま本城も抱きついてきた。

俺は思う。

なぜここで、あんな事態が起こるんだ。せめてあと一分ずれていれば、あんな事態は避けられただろう。

俺に深いトラウマの記憶を植え付ける事になる惨劇。

「な、なんだこれ！」

「もしかして…！」

突然足元に生じた魔方阵。

次の瞬間、青白い光とともに俺と本城の姿はその場から消えていた。

1930、責任、2（後書き）

次回はまた開戦直後です！

『反撃の狼煙』では、北で変事が起こったと書いてありますが、実際は南でも同時進行で危機が起こっています！

1941 北の凍土 南の煉獄（前書き）

総合評価があと少しで二百なのです！

…これを読んでる皆さんは、戦闘シーンと本城さん達のどたばたとどっちの方が好きですか？気になるのです！

ついでに、そのドタバタを極めた作品として、新しく『飛ばされて西の果て！？』という作品も書き始めました！

今回の戦闘は、呉空襲と同時に始まったトラック攻防戦、そして、翌日に開始される満州・冀東^{きとう}の防衛戦です！日本はこの両面の危機をどう乗り越えるのか！？

1941 北の凍土 南の煉獄

十二月十日午前一時 朝露国境地帯羅南沿岸

あたりは闇に包まれていた。僅かな月と星の光が、海岸線まで迫った急峻な山岳地帯を浮かび上がらせている。

その時、海上から突如として砲火が生じた。

それは連続して発生し、数秒後、陸地上空に無数の照明弾が点火され眼下の大地を照らしだした。

そこにあつたのは、大地を埋め尽くす無数の戦車だった。

砲塔に設けられた二枚のハッチを開いた姿がミッキーマウスのように見えるBT7。

砲塔と車体が台形をした、現状で世界最高の戦車の一つであるT-34。

さらに、車体に大型砲を直接装備し、さらにその上に小型砲塔を設けた背の高い戦車、アメリカ製のM3中戦車の姿まで見える。

夜間で整備を行っていた車両の間では多数の整備兵が照明弾の明かりの元、恐慌状態で逃げまどっている。

彼らの脅威は、洋上にあつた。

第五艦隊旗艦『那智』

「全艦砲撃始め！」

艦隊総司令官の細萱戊子郎中将は、憔悴した、それでもなお戦意に満ちた表情で命令を下す。

次の瞬間、照明弾に照らされた敵地上部隊に傘下の艦隊が一斉に

砲撃を開始する。

最も目立つのは、旗艦である『高雄』型重巡『那智』と姉妹艦である『摩耶』の二隻。双方ともに五基十門の二十・三センチ砲を振りかざし、一斉に砲撃を加えている。

それに続く、一回り小さい艦は軽巡『夕張』五千トン級軽巡と同等の武装を三千トン強の小柄な体に押し込んだ特異な艦。主砲である人力装填の十四センチ砲を必死になつて撃ちまくっている。

沿岸近くには、先だつて照明弾射撃を行つた駆逐隊が展開している。今も五インチ級の主砲は榴弾に照明弾を織り交ぜて射撃を継続している。

降り注ぐ砲弾は、ソ連軍地上部隊に破滅的被害をもたらしていた。戦車を直撃した二十・三センチ砲弾は一撃で戦車を爆砕し、残骸を空高く舞い上げる。大地に穿たれた巨大な穴は容易に戦車を呑みこむサイズがあり、転げ落ちた戦車は、衝撃で主砲を捻じ曲げ内部の戦車兵を傷つける。

『夕張』や駆逐隊の砲撃も次々と着弾を果たす。

十四センチ砲の直撃を受けた戦車は、こちらも一瞬でスクラップと化す。駆逐隊の放つ榴弾は、その弾片で戦車の履帯や整備兵を容赦なく引き裂く。

状況に、満足げな表情を浮かべる細萱。

まさに一方的な虐殺だった。

終わりは、唐突だった。

突如、見張り員が悲鳴のような報告を上げる。

「雷跡発見！右舷前方、距離20（二千メートル）！」
「面舵一杯！」

とっさに指示を出す。

（しまった、敵潜の待ち伏せか！）

操舵手は、命令を受け即座に舵輪を回しているのだろう。
だが、この状況で重巡の艦体はあまりにも重すぎた。

（間に合わない…！）

次の瞬間、激しい衝撃が『那智』を貫いた。

十二月十一日 西カロリン諸島 トラック環礁

上空は、数次にわたって繰り返された空襲に対する対空砲火のせいで黒く染まっている。

そこへ、撃墜された彼我の航空機の残した黒い筋と、地上から立ち上る火災煙が混じり混沌とした様相を呈している。

兵士達は疲れ切った表情で、陣地に散らばる空薬莖を片付け、滑走路に開いた穴を重機で埋め戻して行く。

その時、再び空襲警報が鳴り響いた。

滑走路の補修を行っていた部隊は、急いで重機を片付け、上空から発見されないように偽装を施す。

対空陣地では、射撃管制レーダーの予熱が行われ真空管を温めている。

滑走路には、続々と戦闘機が掩体壕から引き出されてくる。

主力は海軍の九八式戦闘機。他にも、少数の紫電や飛燕が見える。レーダーが捉えた敵編隊への距離は二百五十キロ。まだ余裕はあるが、急ぐにこしたことはない。

ばらばらに離陸していく戦闘機隊。離陸直後に、ここ数日の激し

い空襲で力尽きた艦艇の骸が視界に入る。いずれも浅い環礁の海底に着底し、焼け焦げた上部構造物だけを波間にのぞかせている。

戦闘機隊は高度を上げながら、その上空をフライパスしていく。その針路は南に向けられていた。

環礁を離脱した編隊は、その眼下に多数の艦艏の姿を見つける。艦隊の中央に位置するのは、長年連合艦隊の旗艦を務め、かるたにも載っている戦艦『長門』『陸奥』。巨大な四十一センチ砲は僅かに仰角がかけられ、臨戦状態にあることをうかがわせる。

それに続くのは、一回り小柄な艦体に連装六基十二門の三十六センチ砲を搭載した『伊勢』『日向』『山城』『扶桑』。どれも艦齢二十年を超える老嬢である。

周囲には妙高型をはじめとする重巡や各種五千五百トン型軽巡、それらに率いられる水雷戦隊が輪形陣を組んでいる。

煙こそ噴き出していないが、艦隊の中には明らかに火災の痕跡をとどめているものもあった。

その針路は、戦闘機隊とは僅かに異なっている。

その船先の先には、ラバウルを出撃した敵艦隊があるはずだった。

掲げる旗は、星条旗とユニオンジャック。

大西洋連邦の双璧、その片翼をなす艦隊だった。

十二月十二日 満州国北部サルト市

市内の鉄道は、開戦以来二十四時間フル稼働状態が続いていた。行きは増援を送り込み、帰路は避難民を満載して新京方面へと脱出していた。

満鉄職員は文字通り不眠不休でその運行業務に当たり、奇跡的にこれまで大きな事故を起こさずに運行を続けている。

戦局は、劣勢を極めていた。

混乱の続く戦局で、司令部が見積もった北部からの侵攻戦力は最低でも三十万。実際は五十万を上回ると推測された。国境の要塞群は後方との連絡を絶たれ次々に玉砕。残存部隊は総力を挙げて遅滞防御戦を遂行していたが、すでに孫呉そんこと北安ほくあんが陥落。綏化すいかの陥落も時間の問題であり、ハルビンには佳木斯じゃむすを落とした機械化部隊が迫りつつあった。

羅津方面（朝露国境）から侵入したソ連軍は東部方面軍の戦線を突破。海岸沿いに朝鮮半島への侵攻をうかがい朝鮮総軍を牽制すると同時に、主力が延吉から牡丹江を目指し、東部全域を包囲する動きを見せ、牡丹江と東部方面軍の側面を守る満州国軍を端から削り込む形になっている。正面も、虎頭ことうがすでに陥落。強力な圧力を受けている。

西正面戦線は三倍以上の戦力を誇るソ連軍の猛攻を受けて、殿に臨時集成装甲団を残し新京・奉天地区まで主力は後退。一部歩兵部隊が白城市・チチハル間に展開してサルトが包囲されるのを阻止し、残りの機械化装甲軍は再編完了し次第吉林に集結していた。

航空部隊は陸海軍に統合航空軍まで加えた総力戦を続けているが、数で圧倒的差をつけられ絶望的な戦いを強いられている。

軍はハルビン・チチハル間を絶対防衛線と定め、サルトを死守する構えだった。

その理由は、多数そびえたつ鉄骨の塔にあった。

日本国内の石油の大半を供給するサルト油田がそこにはあった。

同日 中満国境地帯 冀東国民党自治区きとう

そこは地獄と化していた。

貿易で潤っていた市内は、敗走した国民党軍の脱走兵による略奪の嵐にさらされ、至る所で火の手が上がっている。商店は売上金から商品まで、ありとあらゆるものを剥ぎ取られていく。

外国人居留区では、各国の警備隊と日本軍が共同して周囲に繋がる道路を閉鎖し、残された自国民を決死の覚悟で離脱させている。

すでに鉄道は満州領内まで侵入した便衣兵に破壊され、軍の機甲部隊の護衛のもとトラックで脱出を試みていた。

本来この地区を守るべき国民党政府軍は、国境付近の敗北の報が流れるや統率を失い、ただの匪賊ひぞくと化した。

駐留していた日本軍は味方と便衣兵ゲリラの区別もつかない戦況に、ひとまず戦線を立て直そうと満州南西部へ後退としていたが、侵入した便衣兵ゲリラが猛威を振るい、ありとあらゆる通信インフラが破壊され情勢の把握もままならない状況になっていた。

司令部偵察機が捉えた敵侵攻軍の総数は最低でも二百万、銃のかわりに鍬や鋤を持って向かってくる連中も含めると三百万を余裕で超えていた。

掲げる旗は赤一色。

冀東は、害虫に食い漁られるように赤に染められよとしていた。進む先には、満州の地があった。

1941 北の凍土 1

1941年十二月十日 満州西部

『全車傾聴！』

無線から響いた声に、この戦車の車長、橘孝俊は途切れそうな意識を必死にを手繰り寄せる。この二日間、彼はまともな睡眠を取っていない。

もつとも、それは満州に存在する全ての日本人に共通する事だろうが。

『後退中の友軍部隊の最後部は本部隊から二十キロ後方まで下がった！師団直轄の機動砲兵の後退まで後四時間だ。それまで持ちこたえるぞ！』

久しぶりの良い報告に沸き立つ車内。

「ようやく後退か！」

「生きて国に帰れますね！」

彼ら第四十二戦車中隊の所属する第五戦車師団は、三日間味方部隊の殿を務め続けていた。国境線の最前線に配備されているだけに車両は最新の百式中戦車だが、激しい交戦で戦力はすでに半減していた。車両整備にあたる整備班は決死の覚悟で部隊と行動を共にしてくれて、整備不良で立ち往生するような車両は一両もなかったが、一刻も早い後退が望まれていた。

その時、最悪の報告が届いた。

『こちら早期警戒隊！ソ連軍機甲部隊捕捉！数二百両以上、全て』

鏡餅』です！戦車跨乗兵多数！後方に歩兵のトラッ…』

報告は途中で途切れた。同時に彼方から爆音が響く。無線のスケルチ回路がノイズを自動でカットし沈黙が舞い降りた。『鏡餅』とはソ連軍の主力戦車T-34の事を指す。その菱型の姿からそう呼ばれている。

同時に司令部から命令が届く。

『第四十二戦車中隊に命ずる。突撃態勢にある敵機甲集団を殲滅せよ。なお、砲兵支援は陣地転換作業中につき行われない。支援として後退の遅れている第二十二機動歩兵中隊が向かう。到着は二時間後を予定。それまで自力で持ちこたえろ！』

『…全車、聞いての通りだ。これより我が中隊は敵機甲部隊の突撃阻止戦闘に突入する！前面には味方工兵の対戦車壕が掘られてる。間違つて落ちるなよ！以上！』

「…了解！」

ヤケクソ気味な返事を返す橘。九日の昼に最後の補給を受け取ってから、彼らは三回の対戦車戦をこなしている。すでに徹甲弾の残弾は三分の一を切り、榴弾は弾切。^{かんぱん}機銃は銃身が凍りついて整備から五割の確率で暴発するとお墨付きをもらっている。

「…なんとも絶望的な状況ですね？」

操縦手の特年兵、佐々木武がその幼い顔に苦笑するような表情を浮かべる。もはやなにかふつきれてしまっている。

「仕方ないか。俺達の後ろには後退中の西部方面軍三十万がいるんだからな。そのためなら、最新の百式装備の部隊でもここで使い潰してもいいって考えなんだろう、司令部はな」

なんとも豪勢な生贄だと、橘は思った。

詳しい情報はさすがに入らないが、少なくともこの殿集団には俺達第五戦車師団と第二機動歩兵師団が含まれている。どっちも最新の装備を優先して配備されている陸軍最精鋭部隊だ。噂では独立重戦車大隊まで見かけたという。もしそうなら、ここには西部方面の機甲戦力の三分の二……いや、開戦当初の交戦で全滅した第三戦車師団を除けば四分の三以上になる。

……一体、司令部は何を考えてる……？

橘の思索はそこで途切れた。

「敵戦車発見！二時の方向、距離三千！」

「射撃準備、弾種徹甲！敵が地雷原を超えたところで砲撃開始。取り付いてる戦車つかいすて跨乗兵は無視しろ、整備班の連中がやってくれるはずだ！」

主砲の照準器を覗いていた、砲手の朽木の報告を受け臨戦態勢に入る車内。

中隊の車両は、全て車体が地面に隠れるように掘られた壕に入り待ち伏せの態勢を取っている。空襲を警戒して大量の雪に覆われた戦車はただの小さな雪の塊にしか見えない。

その周りには、それぞれの戦車の壕をつなぐ細い塹壕が掘られ、中には小銃を抱えた兵士が予備の弾薬を抱えて駆けまわっている。中には明らかに銃に慣れていない兵の姿も見える。

すでに戦いに備えて、整備兵は自衛用に配備されている旧式の小銃を抱えて急造の陣地線に籠っている。おそらくこちらの砲撃で全滅するだろうが、生き残った敵歩兵が肉薄してきたら彼らに任せるしかない。暴発するかもしれない機銃は最後の手段だ。

その時、彼方から爆音が轟いた。

「馬鹿め。性懲りもなく地雷原に突っ込んだか」

視線の先では、突っ込んできたＴ―３４が雪の下地雷を踏みつけ履帯を吹き飛ばされている。もちろん、車体に取り付いていた兵士も投げ出され一部はそのまま戦車に轢き殺されている。平均寿命二週間の呼び名は伊達ではない。

周囲の敵戦車も次々と地雷を踏みつける。

宙を舞う、戦車の履帯と兵士の肉片。

さらに数両が撃破され、ようやく前進が止まる。

代わりに乗っていた歩兵が下りて、車体に乗せていた機関銃を戦車の車載機銃とともに地面に向けて撃ちまくる。

次々と破壊される地雷。地雷処理の最も手っ取り早い方法。しかし、橘達はこの後の反攻戦で悪夢を目撃する事になる。

『全車。距離があるがここで撃ち方始め！弾を打ち切った車両から後方の第二陣地まで後退。歩兵中隊もそっちに向かわせる！整備班は今すぐ後退しろ！』

「撃ち方始め！」

隊長からの指示を受け、橘が砲撃を命じる。

即座に放たれる四十五口径七十五ミリ砲。

放たれた被帽付徹甲弾は音速の二倍以上の速度でＴ―３４の正面装甲に斜めに直撃する。
ひぼつきてこっだん

しかし、距離と角度の関係で砲弾は巨大な火花とともに弾かれる。車体に大きな損傷を与えたとは思えない。

だが、周囲の生身の歩兵は違う。

砲弾の衝撃波だけで、手足を千切られ内臓を破裂させる。

悲劇は連続する。

こちらの存在を察知した敵戦車は、主砲を放つ。

この衝撃は歩兵にさらなる損害を与える。まだしがみついていた

兵士は一瞬で弾き飛ばされ、やはり衝撃波でさつきと同じような被害が続出する。

しかし、敵戦車の砲撃は、こちらに損害を与える事はない。砲塔以外外からは見えないのでは、目標が小さすぎた。

こちらの砲撃も敵戦車を撃破するには至らないが、決して無傷ではない。

連続した直撃弾は内部の戦車兵を痛めつけ、剥離した内部装甲が車内を跳ねまわる。

履帯を直撃した砲弾は、複数の転輪を履帯もろとも吹き飛ばし、一瞬で行動不能にする。

（イける…！）

戦況を見て、橘はこの防衛戦の勝利を確信した。だが、彼らには致命的な問題があった。

「車長！残弾三発です！」

「クソッ！もう少し弾があれば…！」

そう、すでに弾は各車二十発もなかったのだ。

撃ち切るのは、あつという間だった。

最後の一発を撃って、橘は命じる。

「後退する！」

「了解！」

そのまま車両はバックで壕から抜け出すと、正面を敵に向けながら後退する。本来なら後退するための塹壕も欲しかったが、そこまで掘る時間は彼らにはなかった。

車体全てを晒した中隊の車両に、ソ連軍戦車の砲撃が連続して直

撃する。

だが、百式の正面装甲は、それらをなんとか耐え抜く。装甲の厚さは、T-34に決して劣っていない。

しかし、運の悪い者もいる。

一両が、履帯に直撃を受ける。

即座に停止しようと制動を掛けるが間に合わずに派手にドリフトして、脆弱な側面を敵に晒す。

それを見逃すほど敵は甘くなかった。

即座に集中打が浴びせられ、脱出を試みた戦車兵ごとまとめて粉砕する。

砲塔で弾かれた砲弾が車体の上部を直撃し、そのまま撃破される車両もある。砲塔の防楯の設計ミスに起因するものだ。

だが、損害はその二両だけだった。

味方の歩兵部隊がトラックの荷台から迫撃砲を撃ち放つ。

放たれた発煙弾は内部の黄リンを燃やし、透過性の悪い五酸化二リンを発生させ、敵戦車の視界をふさぐ。

その隙について、残り八両はそのまま後退、敵の射界から逃れるとそのまま方向転換。後方の陣地に、即席歩兵と化した整備兵を乗せたトラックと共に後退する。

煙幕の向こうでは新たな敵機甲部隊が出現し、先の部隊と同じように地雷原に突っ込んでいた。

圧倒的劣勢の戦況を、彼らはまだあきらめていなかった。

翌日、彼らに悪夢の報告が入った。

後衛部隊第二十八歩兵師団全滅。

同時に、師団の担当していた戦域約五キロを敵自動車化狙撃師団

と機甲旅団が突破。後衛部隊主力の後方に回り込んだ。

包囲された部隊は戦車二個師団、機動歩兵一個師団、それに機械化歩兵二個旅団。

徒歩の部隊は先に後退していたが、敵突破部隊が側面から直撃。壊乱状態で撤退部隊本隊に收容されている。

本隊への突撃は第二航空軍の決死の攻撃で阻止したものの、孤立した部隊の救出は混乱した西部方面軍では不可能だった。

最寄りの味方はハルピン・白城市間の防衛線。直線距離で約二百キロ。

司令部は、包囲下の部隊を第一臨時集成装甲団と命名。独力での味方戦線への合流を命じた。

敵中突破二百キロ。三分の一の戦力を失った、第四十二戦車中隊の死闘が始まった。

1941 北の凍土 2

十二月十日 満州西部 ハルピン・白城市防衛線から北西に百五十キロ 第四十八戦車中隊

「全車、ギリギリまで敵を引きつける！」

橘は、戦車の車長席で声をからして無線に怒鳴っていた。

周囲には、工兵が掘った穴に車体を隠し砲塔だけ外に出した百式と九七式戦車が二十両ほど展開し、その前面には撃破された敵戦車が百両以上もその骸を雪原に晒している。

前面からは味方の損害に構う事なく、敵戦車が襲いかかってくる。臨時集成装甲団の撤退は、遅々として進んでいなかった。

現在、集団の先頭は第四戦車師団が務め、これを第六十七機械化歩兵旅団が支援する形をとっている。

だが、敵の包囲は想像以上に分厚く、雪の合間を縫って行われる熾烈な航空攻撃も部隊の足を引っ張っていた。

そして、橘率いる第四十八戦車中隊は、周辺で壊滅した部隊を統合して一個中隊欠員の大隊規模まで膨れ上がり、しんがり殿を押し付けられていた。

延々単調な突撃を繰り返すソ連軍機甲部隊に、橘率いる部隊はひたすらに待ち伏せに専念し、徹底した偽装もあり、その姿は雪の中の小さなでこぼこの一つにしか見えない。

その一つ一つから五十七ミリか七十五ミリの被帽付徹甲弾が放たれ、敵戦車の車体や履帯を打ち砕く。

「隊長、もうこれ以上は無理です！」

砲手の都築が悲鳴を上げる。撃破された敵戦車が邪魔で射線を確保できないという異常事態だ。

工兵と整備班が掘った陣地に立てこもり、迅速な陣地転換で敵の砲撃や航空攻撃を回避しつつ必死の防衛戦を継続する橘達のキルレシオではすでに五十対一を超えているが、敵の攻勢は衰える兆しを見せない。

「クソッ！全車後退！二キロ後ろの二線陣地に後退する！砲兵に投射型地雷の散布を要請！」

『こちら第五戦車師団司令部。投射型地雷は弾切れだ。代わりにお前達の前面に噴進弾の制圧射撃を仕掛ける。巻き込まれないように気をつける』

「ふざけんな！どこからどこまでが前面なんだよ！」

撤退中で、常に戦線が動き続ける状況でどこが前面なのかすら判然としなかった。

少なくとも、今ソ連軍がいる場所はきのう俺達が夕食を食った場所だ！

『…今の暴言は聞かなかった事にしてやる。いいからさっさと後退しろ！』

「…了解！」

その時すでに、部隊は陣地から抜け出して一斉に後退を開始している。

同時に、その前面に後方の砲兵陣地から放たれた多連装ロケット弾が爆竹のような破裂音を響かせながら、雨あられと着弾している。どうやら司令部は荷物になるロケット弾をここで一気に撃ちつくしてしまうつもりようだ。

報復として放たれるソ連軍の百二十二ミリ砲が敵味方の区別なく戦場全域に降り注ぐ悪夢の状況で、彼らには死ぬ自由すら与えられていなかった。

同日夜

敵の夜間空襲などを警戒して、嚴重な灯火管制が敷かれている部隊は、雪の中に半ば埋もれるようにして休息を取っていた。

橘達も硝煙の臭いに満ちた車両から降り、簡単なテントを張って十六時間ぶりの食事を取っている。

「ねえ隊長、これって勲章物じゃないですか？」

操縦手の佐々木が、エンジンの余熱で温めた缶飯を食いながら今日の戦果一覧を見て橘に問いかける。

今日一日で、彼らの操る百式はT―34を二十八両、BT―7を十六両の計四十二両を撃破していた。はつきり言って頭のおかしい戦果である。部隊全体ではおそらく三百両以上を撃破している。

代償も払った。

この一日で、部隊の稼働戦力は十六両まで激減した。撃破された多くの車両は九七式で、装甲の差が顕著に表れていた。故障して回収できなかった車両も多い。今も外では暗い雪の中、整備兵達が徹夜で稼働車両の整備を続けている。

「だったらお前は勲章と砲弾、どっちが欲しいか？」

「そりゃもちろん砲弾ですよ」

部隊の補給状況は最悪の状況だった。砲弾はさっきの戦闘でほとんど使い果たした。包囲された彼らにはまともな補給も難しく、整備兵達は残り僅かな交換部品のストックで、必死に整備を続けている。

た。

その時、司令部から無線が来た。

『第四十八戦車中隊、聞こえるか』

「こちら第四十八戦車中隊です。どうぞ」

『間もなく補給物資をそちらに投下する。目印になる物を準備しておけ。以上』

「おいちよつと待て！詳細を…」

『ザ……………』

「切りやがった…」

その時、外から突然ローター音が響いてきた。

慌てて、目印になるように焚火の上の覆いを剥ぎ取る。

次の瞬間、部隊の真上に垂直離着陸機の群れが現れた。

工藤重工製『林檎』乗員を減らせば三百キロまでの重量物を輸送できる、緊急輸送の頼もしい足。海軍でも採用されている。

ここまでローター音が聞こえなかった事から考えると、連中は敵に発見されないように超低空を匍匐飛行（NOE）してきたのだと思われた。

彼らは、燃え盛る焚火を見つけると、そこめがけて胴体下にぶら下げていた専用輸送コンテナを一斉に投下した。

「うおおっ！」

慌ててそこから逃れる橘達。

コンテナはテントを押し潰し（全員から悲鳴が上がった）温かいみそ汁の入った鍋をなぎ倒し（絶句）焚火を揉みつぶしながら（もはや悲鳴も上がらない）全部で四個投下された。

ダウンウォッシュで雪を派手に巻き上げながら、編隊は離脱していった。

「…これで中身がくだらないもんだったら、次の砲撃目標は司令部に決まりだな…」

コンテナのすぐわき、慌てて飛びのいて雪まみれになった橘が、怨嗟の声を漏らした。

部隊の全員が、賛成のうなずきを返した。

テントを失った橘達は、堅い戦車の座席で燃料節約のためエンジン一つつける事が出来ず凍えながら眠る事になった。

同時刻 集成装甲団司令部

「彼らへの補給は成功したか…」

狭い装甲車の座席で、司令を務める栗林忠道中将は久しぶりの良い報告に息をついた。

司令部は、多数の無線を積んだ大型装甲車数両で構成されている。本来なら、どこかの町に腰を据えて落ち着いて指揮を取りたいが、孤立した集成装甲団の戦線がアメーバのように移動している現状ではそれは不可能だった。

戦局は、綱渡りが続いていた。

脱出の先陣を切る第四戦車師団は、敵の圧倒的数を前に苦戦を強いられている。支援に当たる機械化歩兵旅団は敵の砲爆撃で保有車両のほとんどを喪失し、ただの歩兵旅団になり下がっている。

攻撃するソ連軍は、機甲部隊を前面に押し出し、その後方からこちらの機動砲の射程外に配置された百二十二ミリ砲や多連装ロケット弾で防衛線に猛攻を加えている。明らかな同士打ちも散見された。

連中の作戦能力は欧州での激戦を経ても、いまだに低いままだ。

だが、その数は脅威だった。前線部隊は自軍の十倍以上の敵戦車を相手に奮闘を続けているが、相手が二十倍の戦車を投入してくれば、その優位も消滅する。

「彼らには苦勞をかける」

栗林が脳裏に思い浮かべているのは、この集団の中でも最後尾に位置している第四十八戦車中隊だ。凄まじい数で攻めよせるソ連軍相手に、損害を強いられながらも致命的な戦線の穴を作らずにいられるのは、彼らが後方の敵機甲戦力を一手に引き受けてくれているからだ。実質的な集成装甲軍の命綱とも言える。

「残り百二十キロか…」

この二日間で、部隊は六十キロ近く後退する事に成功していた。味方防衛線まで後百二十キロ強。今後三日が、今後の戦争すら左右する死闘になるだろう。

「勝って見せるさ…」

若き中将の瞳に、諦観は一切なかった。

満州防衛戦、その序盤戦は佳境を迎えつつあった。

ウラジオストック ソ連軍司令部

大地は雪に閉ざされていた。

厳冬期を迎えた沿海州は、雪原に動くもの一つなく、海は流水に閉ざされている。

ここウラジオストックも、夏の間に備蓄した暖房用の薪と食料を食いつぶしながら冬ごもりに入っている。

そんな静かな街で、司令部だけは忙しく動いていた。

「西部の敵殿部隊はまだ殲滅出来るのか？」

会議の席で、東部戦線全軍の指揮を任されているジューコフ元帥は、静かに問いかけた。

「はっ！敵の抵抗は凄まじい物があり、すでに正面攻撃に投じられた三個機甲旅団が全滅したとの報告です。退路を断っている第百八自動車化狙撃師団も激しい突破攻撃を受けかなりの損害を被っています」

「ですが、戦果も大きなものを上げております」

隣の参謀が引き継ぐ。

「後方に回り込んだ部隊は、初期の一撃で後退中の日本軍三個師団相当を壊滅に追い込んでいます。航空偵察では殿部隊の機甲戦力も三分の一程度まで減少しております。後数日で殲滅出来るものと考えます」

「フム…」

頭の中で、後の発言を行った参謀の首を飛ばす事を確定するジューコフ。その数日で敵が味方の戦線に合流する事は目に見えているのに、後数日で殲滅出来るなど馬鹿以外の何物でもない。それは手遅れと言っただ。

「他の戦線はどうかね？」

「北東部はあまり芳しくありません…」

北部方面軍からやってきた参謀が、居心地悪そうに答える。

「日本軍もサルトの重要性は理解しているようで、極めて激しい抵抗を継続しています。北部の部隊は国境での抵抗の後、大興安山脈に一部を残して後退したようですが、その戦力も含めて日本軍第三軍は全てをサルトに集中させています。こちらもハルビンとチチハルを射程に収めています。そこから先の進軍は停滞しています。航空攻撃も激しい要撃と嵐にさらされ効果を上げていません。司令部としては両翼からの迂回行動で、日本軍の後方を断つほかないと考えております」

「やむを得ないか…。北部方面軍は、当初の計画通り敵戦力の拘束を続ける。無論、隙があれば単独での攻略も構わない」

「はっ！」

「東部は？」

「正面での攻撃が停滞していますが、側面を突破した沿岸方面の部隊が牡丹江を目指して進軍中です。現在満州軍と思しき部隊の抵抗を受けていますが牡丹江まで段階的な撤退を行っているようで、一週間以内に牡丹江近郊で決戦になると考えております」

「沿岸部は、やはり駄目かね？」

「はい…。敵海軍の対地攻撃が熾烈を極め、砲兵では太刀打ちできません。やはり海軍にせめて沿岸部の制海権だけでも奪取してもらわないと…」

報告の内容は、西部の敵殿集団に手間取っている以外はおおむね順調か予定通りという事だった。東部での決戦がおそらく満州戦のターニングポイントになるだろう。

「この一戦で全て終わらせてくれる…」

ジューコフは致命的勘違いをしていた。

日本軍の本命は牡丹江に集結している兵力ではない。

そのさらに西、吉林に西部戦線からピストン輸送される部隊だった。

第二集成装甲集団。本土から緊急輸送され、大連から自走してきた第八、第十一戦車師団と第三、第四機動歩兵師団。それに東部から引き抜かれた第六百十二独立重戦車大隊『玄武』を中心とする完全機械化装甲集団。総数十八万。

すでに先陣は延吉まで前進している。

攻勢開始は牡丹江決戦の開始と同時に。第一目標はウラジオストクの玄関口ヴオロシロフ。そこからシベリア鉄道沿いに北上し、最終目標はハバロフスクに置く。

東部のソ連軍を全て包囲する一大反攻作戦。

関東軍参謀長を務める、鬼才石原莞爾が絵を描いた巧緻をきわめる作戦。

唯一のアキレス腱は、北西部防衛線。

もし白城市・ハルビン間の防衛線を抜かれたら、日本の生命線であるサルト油田を失う事になる。

あえて吉林に部隊を集結させるのも、最悪の場合増援として繰り出すため。

第一臨時集成装甲団。これが味方防衛線に吸収されれば、その西部の防衛は盤石になる。

「牡丹江の決戦前に連中が味方と合流すれば、こちらの勝ちだ」

新京の司令部で、石原は口元を歪めた。

満州戦の趨勢は、彼らにかかっていた。

1941 北の凍土 3

十二月十一日深夜 第四十八戦車中隊

「さて、中身を拝見しようか」

輸送コンテナの前に仁王立ちしている橘が、殺気の籠った眼でコンテナを睨みつける。

突然投下され、自分達の寢床と食料を奪っていった物資輸送コンテナ。もしこれで中身がくだらないものだったら、彼らの砲口は間違いない司令部を指向することになる。

「玄さん、やっちまってください」

「おう、まかせろ！」

橘の声に応えたのは、部隊に随伴している整備班のリーダーである特務士官の玄さん。なにか名前にトラウマがあるらしく、どこにいても『玄さん』以外の呼び方を認めない強情者である。

だが、整備の腕はぴか一で、今日一日、彼らの整備を受けた戦車に整備不良が原因の故障はまったくなかった。その玄さんが、巨大なカナテコを持ってコンテナの前に立つ。コンテナは内部に緩衝装置を設けた二重構造で、扉にはきちんとした機械式のロックがかかっているが、彼らは正規の手順を無視してこじ開けようとしている。理由は特にない。あえて言えば憂さ晴らしだ。

最初の扉を強引に開けると、玄さんは、最後に残った頑丈そうな扉の僅かな隙間にカナテコを押しこんだ。そして、

「ふんっ！」

ガコンッ！

そんな音とともに、コンテナの扉が暴かれた。

「おおー！」

そして、その中身を見た瞬間、あたりの人垣から歓声があがった。中身は、軍でもまだ十分に回っていない最新のレトルト食材だった。缶飯を始め、煮物、焼き魚、うなぎの蒲焼き、たくあんに、海軍から出してもらったのか、錨のマークが入ったカレーの缶詰まで入っている。

「おい！こつちも凄い物が入ってるぞ！」

別のコンテナを開けていた隊員からも歓声が上がる。

それに入っていたのは、補給の各種砲弾だった。徹甲弾に通常榴弾、さらに部隊が配備を熱望してこれまで届いていなかった最新の多目的榴弾対人用のキャニスター弾（砲弾の中にたくさんの小さな弾を詰めたもの。散弾の親玉的代物）まで含まれている。

さらに、

「こいつはなんだ？」

入っていたのは棒の先に卵のようなものをつけた兵器。

「なになに『歩兵用対戦車成形炸薬弾発射機「小龍」』？『これは敵戦車の側面装甲を五百メートル前後の距離で撃ちぬけます』？–んでもねー新兵器じゃねーか！」

慌てて教本を読んだ整備兵達は、同行していた第二十二機動歩兵中隊の兵士と一緒に試し撃ちをする事にする。新兵器を、訓練も無しに前線で使用しようとは思えない。

目標は、損傷したため部品とりに使われて放棄された九七式中戦車。ついでにそのエンジンは取り外されて湯沸かし器代わりに使用されている。

「距離は四百メートル前後か。後ろに人がいないかきちんと確認しろよ」

玄さんの指示の元、兵士達がそれぞれ『小龍』を構える。かなり姿勢はばらついている。

「よし、号令と同時に発射しろ。五秒前、3、2、発射、今！」

ボシューッ！

そんな鈍い音とともに、十発ほどの弾体が目標に向かって目に見える速度で飛来する。

そして、弾着の瞬間。

ドンッ！

戦車は一瞬で、燃料タンクに残っていた軽油に引火して炎の塊と化した。

「わー！まずいぞ！すぐに消せ！」

「馬鹿！いまさら消す余裕があるか！総員退避！」

そんな事やっていた次の瞬間、ソ連軍は火災炎を目印にして一斉に砲撃を開始する。

「馬鹿野郎！今すぐ塹壕に潜り込め！砲弾はコンテナに格納！たぶん榴弾なら耐えられる、急げ！」

結局、彼らのこの火災が原因で、その夜は両軍の砲兵が互いの

発射炎を目標に砲撃戦をだらだら続けることになり、第四十八戦車中隊はキツイお灸を据えられる事になった。
そして、翌日。

十二月十二日 第四十八戦車中隊

「止まるな！何があつても前進し続ける！」

戦車の車長席に座る橘の視界に映るのは、一面掘り返されてぐちゃぐちゃになった雪原とその合間に転がっている敵味方の兵士の死体。そしてその死体を盾に対戦車銃を撃つてくるソ連兵だった。

また、大口径の対戦車銃が車体を直撃し、嫌な衝撃を走らせる。

「クソッ！二時の方向、弾種榴弾！一撃で始末しろ！」

「弾種榴弾、テッ！」

放たれた榴弾が雪を抉り、弾片を撒き散らしソ連兵を殺傷する。

その背後から、味方の死体を押し潰しながら現れるＴ―３４。一両が間違えて味方の対戦車壕に転がり落ちるが、それを踏みつけて後続のＴ―３４が突っ込んでくる。

「こいつらゴキブリか！弾種徹甲！目標敵戦車！」

周囲には同じように戦う中隊各車と他の部隊からの増援が五十両ほど展開している。軍の持つ機甲戦力の全てだ。

彼らに、後はなかった。

すでに軍は限界だった。

後方の航空隊は決死の空輸で部隊に補給を行ってくれていたが、それは最低限にも満たない僅かなものだった。

軍の手持ち物資は回収が間に合わず遺棄されるものも含めて急速に減少し、それは保有車両の喪失とともに軍の戦力を確実に削ぎ取って行った。

当初、突破の先陣を切った第四戦車師団はすでに戦力の八割を喪失。同行していた機械化歩兵旅団も壊滅的打撃を被っていた。

集団の戦力は七割を割ろうとしていた。

だが、希望も見えて来た。

先鋒の第四戦車師団は百両以上の百式と九七式を犠牲にして、味方最前線まで六十キロの地点まで前進する事に成功していた。後一息の距離である。

だが、ここまで来て逃すつもりのないソ連側もこの六十キロに少なくとも二個戦車旅団を配置。さらに歩兵も最低五个師団は配備され縦深陣地を構築している。

すでに後のない栗林中将は、最後尾で奮闘を続けていた第四十八戦車中隊を呼び出し、先鋒を命じた。

今日が最後だと思え。

全軍が、この言葉を胸に戦闘に臨んでいた。

戦車部隊を引きぬかれた後方部隊は一気に後退速度を速め、部隊は狭い範囲に圧縮されつつあった。

今日味方と合流できなければ、前後の戦線に押し潰された彼らの全滅は確定するからだ。

全ては、第四十八戦車中隊に託されていた。

最前線で奮闘する第四十八戦車中隊。すでに今日の敵戦車撃破スコアは中隊だけで七十を超え、他の部隊の戦果を加えれば二百五十を超えていた。

だが、それも限界に達していた。

「徹甲弾残弾十を切りました！」

「クソッ！ここまで来て……！」

部隊は今日の午前中だけで四十キロ近く前進した。だが、そこで彼らは息切れた。

弾薬を使い果たしたのだ。

キャニスター弾は、一発で敵兵を百人単位で抹殺し、多目的榴弾は直撃した戦車の装甲を内側に剥離させ、内部の戦車兵を殺傷すると共に、周囲の戦車跨乗兵を弾片と衝撃波の一撃で殲滅する。
タンク・デサント

共に闘う歩兵部隊は、無反動砲や成形炸薬弾で敵戦車を容赦なく撃ちまくり、履帯や車載機銃の残骸が進撃路には無数に散らばっている。

それでも、彼らは突破しきれなかったのだ。

前面からはいまだに湧きだし続ける敵戦車の群れ。もはや数えるのも馬鹿らしい。

後方で航空隊が攻撃を加えているが、今日の前の戦線には何ら寄与しそうにない。

「終わったか……」

絶望の声を漏らし、椅子に深く腰掛ける橘。
その時、司令部から無線が入った。

『よくやってくれた。諸君らの仕事はそこまでだ。後は連中に任せ
る』

「…何？連中？」

いぶかしげな声を上げる橘。

その時、砲手の朽木が歓喜の叫びを上げた。

「隊長、味方部隊です！」

「なんだと！？」

慌てて潜望鏡ペリスコープを覗き込む。

「嘘だろ…。連中『鉄虎』じゃないか…！」

そこには、いままでこちらに押し寄せていた敵戦車を背後から一方的に撃破していく一群の戦車の姿があった。

鷲進する戦車の名は『鉄虎てつこ』日本で唯一の重戦車。工藤技研製の最新技術をフルに使用した、単価が百式の五倍以上と言う気違い戦車。

その分性能は半端ではなく、砲身に海軍の高角砲を流用した百ミリ砲はブラックボックス化された照準安定装置が取り付けられ、時速四十キロで走行しながら三キロ先の戦車を狙い撃つ驚異の高性能を誇る。

装甲も最新のセラミック系素材を含む複合装甲が採用され、現存戦車では真後ろから至近距離で砲撃しても破壊不能という。

重量は四十トンを超えるデブだが、それを補って余りある超高性

能だった。

しかし、それを十分な数前線に配備するには単価が高すぎた。結果として、軍は同時期に開発された百式を主力とし、一部の精鋭部隊だけ鉄虎を配備する『ハイ・ロウ・ミックス』を選んだ。

その陸軍の至宝とも言うべき部隊が、この戦線に投入されたのだ。

「やったぞ…これで生きて帰れる…！」

橘の涙腺が、緩んだ。

すでに前後から挟撃された敵戦車部隊は完全に壊乱状態に陥っており、独立重戦車大隊は無人の野を行くがごとく塹壕を乗り越え、障害物を吹き飛ばし、敵戦車の残骸を押しつけていた。

第四十八戦車中隊の戦いは、一度終わりを告げた。

もつとも、手に入れた僅かな時間は、次の戦いへの準備期間に過ぎなかったが。

「勝ったな…」

新京の司令部で、いくつかの報告電を受けた石原は小さく唇の端を持ち上げた。

今回の殊勲者は間違いなく、あの絶望的戦況で孤立した集成団を率いて脱出に成功した栗林だろう。

「奴には何か恩賞を与えねばな…」

そして、彼らが作った貴重な時間で北西部の白城市・ハルピン間

の防衛線は完全に構築され、防衛線の構築に伴い西部から引き抜かれた戦力は東部での総反攻の基幹戦力となるだろう。

最後の切り札として関東軍直轄の第六百四独立重戦車大隊『白龍』を投入したのは予定外だったが、そのくらい彼らの奮闘に比べれば大したことではなかった。

「そして、それを生かせるかどうかはこの大陸の戦争がかつてくるな……」

石原の目は、すでに満州戦、その先を見据えていた。

その主戦場は、西ではなく南の海を越えた地にあった。

「もつとも、この反攻を成功させんと先なぞないんだがな」

反攻の舞台はヴォロシロフ。

決戦の時は、指呼の間まで迫りつつあった。

1941 北の凍土 3 (後書き)

ここで満州戦は一区切りです！

次回は戦闘パートを続けて、トラック海戦です！

1941 トラック攻防 1

十二月八日 トラック諸島

トラックは広大なサンゴ環礁である。

現地ではチューク諸島と呼ばれるこの環礁は、周囲をサンゴ礁に囲まれた広大なラグーンをなしており、太平洋の荒波から隔離された良好な泊地として知られている。

地政学的な意味も重要だ。

地図を見れば、ここはハワイとアメリカ領フィリピンとの中間海域に存在し、アメリカと対立する日本にとって極めて重要な意味を持っていた。また、マーシャル方面への補給物資の集積拠点であり、日本にとって、アメリカの真珠湾に匹敵する重要拠点だった。

環礁内の大きな島には日本名がつけられ、四季諸島、七曜諸島には海軍の基地施設や飛行場が建設されている。

緊迫する国際情勢を受け、急速に基地化がすすめられた各島には、海軍の十五・五センチ砲を転用した要塞砲が配備され、夏島の地下では大規模な地下壕に環礁全体の指揮を執るための各種施設が建設されている。

竹島などは三千メートル近い大型滑走路を持ち、連山クラスの大規模の運用も可能になっている。

『日本の真珠湾』 『太平洋のジブラルタル』 の呼び名は伊達ではない。

もともと、実際はそれほど軍事色だけの島ではない。

島に生えているバナナの木は、一本一本所有者が決まっている。それを知らずに一本もいだ海軍の水兵が持ち主の地元民に、代わりにこれをとラムネを渡している。

島にいくつもある缶詰工場では、工場の持ち主の日本人社長と地元労働者が仲良く昼寝に興じている。

島内に設けられた料亭では、いつものように夜に向けての仕込み

が急がれている。

そんな平和な南の島でもあるのだ。

だが、その調和を砕くべく、空の巨人達がトラックへ迫りつつあった。

「エンジン始動急げ！出れる機体から順次発進しろ！」

飛行場は喧騒に包まれていた。

エプロンに駐機してあった戦闘機を引っ張り出す牽引車。主翼の外板を外し、機銃弾がきちんと装填されているか確認する整備兵。全ての確認が終わった機体は、整備兵がエンジンの横からクランクを突き刺してはみ車を回し、ある程度その回転が高まったところで、搭乗員が「コンタクト！」の叫びとともにエンジンの始動スイッチを押す。

すると、エンジンは爆音とともに先端のプロペラを高速で回転させ始める。

一部の機体は、起動車と呼ばれる特殊な車両が起動していく。

これは、搭載した機械でプロペラを直接回すという代物で、主に陸軍で使用されている。

「おやっさん！俺の機体はまだか！」

「慌てんな！大体お前は二直だろ！もう少し待て！」

トラックの海軍航空隊に所属する佐竹秀雄は、出撃にまだ時間がかかる事実には歯噛みした。

佐竹は、満州事变以来大陸で戦ってきたベテランである。

初陣は1932年の春先に行われた第一次上海事変。この時は爆撃機の操縦士をしていた。

だが、その後の支那事変において戦闘機に機種転換。またたく間にスコアを伸ばしエース入りした。

第二次上海事変においては、当時最新鋭の九八式を駆り、上海上空への共産党軍航空機の侵入を一機たりとも許さなかった事から『空の守護騎士』などと欧米の新聞に書かれていた。

そんな佐竹の今の愛機は、海軍が基地航空隊用に開発した重戦闘機『紫電』である。

烈風は艦上機という性質上、どうしても設計に制約が多い。狭い空母の格納庫に入れるために機体のサイズや主翼の折りたたみ機構などが必要とし、着艦と言う危険行為を安全に行うために低高度での高い安定性が求められる。

結果として、烈風は素晴らしい戦闘機であるが、どうしてもそういった制約なしに作った機体には劣る面があった。

その制約なしに作られたのが『紫電』だ。

烈風や天山と同じ『誉』エンジンを搭載。最高速度は時速六百五十キロを超える高速機だ。

最大の特徴は、製造元の川西飛行機が工藤技研と共同開発した新開発の自動空戦フラップだ。ベテランになると、予期しない速度低下が発生する事を嫌って装置を切っている事も多いが、回避動作においてその能力は十全に発揮された。

生産単価も烈風に比べ安く、部品数の少なさもあって海軍基地航空隊の主力機となりつつある。

滑走路に並んでいる機体は、紫電と九八式が半々くらいである。

それらは、準備が整うと編隊も組まずに一目散に高度を上げて行く。戦闘機にとって、上を取られると言う事はそのまま劣勢に直結する。

ある程度機数がままとすると、夏島の管制室に従い針路を南に向けて行く。

予測される会敵時間は、後十五分。トラック到着は四十分後を予測している。

後に、数多の伝説と悲劇を生みだすことになる、トラック航空戦。その幕開けだった。

同日　トラック環礁内　防空巡洋艦『阿賀野』

艦長の沖田満が、露天艦橋で声を張り上げる。

「錨上げ！」

号令とともに、巨大な錨が海底から引き揚げられ艦内に収容されていく。艦内では鎖が絡まないように、一片が三十センチを超える巨大な鎖を決められた手順に従って錨鎖庫かぎくろにしまっている。

「両舷微速！」

それを確認すると、今度は機関がその唸りを強める。最新の高圧缶を搭載する事により、従来の同クラスの艦に比べれば飛躍的に小型化された機関室では、機関長の指示に従って機関科の兵士達が汗と油にまみれて缶圧を高めていく。

その間も、沖田の元には多数の情報が入ってくる。

「夏島管制室より入電『味方防空隊接敵。数二百以上』！」

「第一艦隊司令部より入電『各個に回避運動に入れ』！」

「レーダーより艦橋。敵編隊捕捉！距離二百、方位190！」

沖田は、一刻も早く艦を戦闘速度まで持って行きたかった。動かない艦艇など、訓練の的にも劣る。

その時、待望の報告が届く。

「機関より艦橋！缶圧、規定値に達しました！」

「第二戦速！」

「第二戦速よーそろ！」

途端、それまでゆつくりと波をかき分けていた艦が、一気に艦速ふなあしを増す。この一体感は、大型艦では味わえない小型艦ならではの魅力だ。

前方から吹きつけて来る強風を受けながら、沖田は周囲を見回す。それは、壮観な光景だった。

広大なラグーンを埋め尽くすように、無数の艦艇がそれぞれ動き始めている。

最も目立つのは、艦隊旗艦の証である中将旗を翻す『長門』と姉妹艦の『陸奥』。まだ動いてはいないが、共に高角砲がすでに試射を行い、戦闘準備を整えている。

次いで目立つのは三十六センチ砲連装六基十二門を備える『伊勢』『日向』『山城』『扶桑』の四隻。周囲に取り付いていたカッターが離れ、下に降ろされていたタラップが引き上げられていく。

早くも動き出しているのは、中小の補助艦艇（戦艦や空母以外の比較的小型の艦）が多い。

『最上』型重巡四隻はそれぞれ低速で、出撃が遅れている『長門』『陸奥』の周囲を巡回し、自らを盾にして航空攻撃から守ろうとしている。

環礁の中央に向かって進んでいくのは、小型の駆逐艦が多い。俊敏な運動性を生かして、障害物のない環礁中央部で回避運動を中心に攻撃をやり過ごそうという考えだ。

逆に、環礁の島々に近づいていく艦もある。こちらは陸上からの対空砲火が期待できる反面、浅瀬が多いために回避運動などが制限される。それぞれ一長一短だ。

「こちら遅れを取るわけにはいかないな……」

阿賀野は最新鋭の防空巡洋艦だ。

排水量は六千トンと、従来の軽巡とそれほど変わらない。

代わりに雷装（魚雷の事）が全廃され、対空能力が極限まで高められている。

主砲は最上型に採用されている十五・五センチ砲連装三基六門搭載。新型の高射対応型の砲架ほうかに寄せ、最大発射速度で毎分八発。最大射高は一万八千メートルに達し、世界最高の対空砲として完成している。

さらに、艦橋の両側に強引に詰め込む形で、六十五口径十センチ砲、通称『長十センチ砲』を単装六基六門搭載。同クラスの艦艇とは懸絶した対空火力を誇る。

射撃管制装置も工藤製の最新式を搭載。大和や金剛に搭載された物よりもさらに操作性が向上し、軽巡クラスの狭い艦内でも扱いやすくなっている。

これらの代償として対空機銃を一切搭載せず、しかも安定性が非常に悪いというおまけがついていた。台風に突っ込んだら確実にお陀仏などと陰口を叩かれている。色々な意味で個性的な艦として仕上がっていた。

あまりの安定性の悪さに、二番艦以降では長十センチ砲が廃止され、代わりにドイツ製の三十七ミリ機銃を搭載する事になっている。だが沖田は、安定性が悪くともこの装備を気にしていた。戦場では一門でも多くの火力があった方がいい。本音では、復元性（ふねが傾いても元に戻る性能）がさらに悪化してもいいから機銃を増設したいと思っていた。

十五分後。これまで動いていなかった戦艦群も、ようやく缶圧を高め動き始めた。

だが、敵機はそれ以上待つてはくれなかった。

「レーダーより艦橋。敵編隊距離300（三万メートル）三十キロ）高度八千メートル！」

「見張りより艦橋。敵編隊の一部を目視で確認！味方戦闘機隊が取り付いています！」

「…零式弾は使えないか」

戦艦の主砲には、対空戦用の散弾である零式弾が搭載されているが、味方の戦闘機と敵編隊が入り乱れているのでは使用する事は出来ない。

「第三戦速！」

敵編隊が近づくにつれて、艦の速度を徐々に上げて行く。

主砲は、敵編隊の動きに合わせてピクピクと砲身を動かしている。

「味方駆逐隊、撃ち方始めました！」

とうとう、比較的敵編隊に近い艦が砲撃を開始する。すでに戦闘機隊は離脱した。後は基地と艦隊の対空砲だけが頼りだ。

「敵編隊はB-17です！」

見張りから、敵機の機種が報告される。

B-17『フライングフォートレス（空飛ぶ要塞）』強靱な防御力と隙のない防御火器の配置をした四発重爆（エンジン四基を積んだ大型爆撃機）。九八式の二十ミリ機銃でも容易に撃墜できない怪

物。

それが二百機以上、空を埋め尽くすように飛来してきていた。

「主砲、射程入ります！」

「撃ち方始め！」

とうとう、阿賀野も砲撃を開始する。主砲の射撃は猛烈な衝撃を生むが、露天艦橋は、艦の前進に伴って発生する強風を利用して前面に風の壁を作り出し、衝撃による損害を被らないようになっていく。

それでも、顔面をはたく様な衝撃が沖田と見張り員を襲う。

衝撃に耐えながら、沖田は上空を見上げる。

空はすでに多数の艦艇と地上から浴びせられる対空砲の黒煙で真っ黒に染まっている。時折空中に赤い光が走り、その後から、敵機の残骸が黒い煙を引きずって落ちて行く。

すでに爆撃針路に入っているのか、敵編隊は対空砲の中を、まったく針路を変えずに突き進んでいく。

「敵機の目標は『竹島』の模様！」

敵機の針路を読んだレーダー手が報告する。竹島は環礁内でも大きな島で、大型攻撃機が運用できるだけの大規模な滑走路を持ち、島全体が飛行場として運用されている島だ。破壊されればトラックでの航空機運用に重大な支障が出る。

「させるな！」

沖田の叫びに応えるように、砲声が一層激しさを増す。長十センチ砲が有効射程に入ったのだ。

環礁全体から浴びせられる凄まじい対空砲火で、次々と撃墜され

編隊が崩壊していくB―17。その中でも、爆撃をあきらめないのは称賛に値した。

だが、戦意がそのまま戦果に繋がるとは限らない。

「敵機、投弾！」

とうとう放たれる爆弾。

だが、

「外したか……」

そのほとんどは、環礁のサンゴを吹き飛ばすだけに終わり、命中した少数の爆弾も、基地の致命的場所を抉る事はなかった。

環礁を離脱する敵機に、味方の戦闘機隊が再び取り付いている。

おそらく、この爆撃行での生還率は六割に満たないのではないかと
思われた。

「……俺達の勝ちか……」

ふと気を緩める沖田。

彼は忘れていた。気を抜いた者から、先に死んでいくという非情な現実を。

「敵編隊接近！数二十前後。超低空から突っ込んできます！」

驚愕とともに見張りの示す方向を見る沖田。

そこには、海面すれすれを舐めるように突っ込んでくる二十機以上の双発機（エンジン二基を搭載した機体）の姿が、くつきりと写っていた。

その機首には、黒い銃口が不気味に口を開けていた。

1941トラック攻防2（前書き）

とうとう累計ユニークPVが一万を超えたのです！
読んでくれたみんなに感謝なのです！

1941 トラック攻防②

十二月九日 西カロリン諸島 トラック環礁

前日から断続的に続く空襲は激しさを増していた。

上空にはラバウルを出撃した敵航空部隊が一時間も待たずにひっきりなしに押し寄せ、そのたびに航空隊と地上の対空砲、そして環礁内の艦艇の対空戦闘が行われた。

特に艦隊の状況は悪化の一途をたどっていた。

空襲による沈没艦はまだなく、一部艦艇が敵の超低空攻撃で大破したのを除けば大きな被害は出てないように見える。

だが、問題は目に見えないところに発生していた。

戦艦『長門』 作戦室

「それでは、これより現在のトラック島に対する敵航空部隊の攻撃と接近しつつある敵艦隊への対応を議論したい」

議論は、艦隊司令の南雲忠一中将の言葉で始まった。

「まず、現在の敵艦隊と航空部隊の展開状況を説明いたします」

現状の報告を行うのは、今回の呉への敵機動部隊の接近を受け軍令部から派遣された情報参謀の中島親孝だ。なかじま ちかたか

「現在、敵航空部隊はかつての『ラバウル危機』クライシスの際建設された五つの飛行場に、総数千機近くが展開していると見積もられています」

主力は陸軍の重爆ですが、一部に欧州でもすでに報告が上がっている機首に機銃を集中して装備した対地攻撃機ガンシップによる対艦攻撃も行われており、軽巡以下の艦艇に大きな脅威になっています。

「現在のトラックの航空戦力はマーシャル・ギルバート方面への増援の兵力を加えても五百二満たない状況です。連日の空戦で戦闘機隊の疲労もたまりつつあります。基地航空隊単独での反攻は不可能と言っていていいでしょう」

次に、昨日索敵潜水艦が発見し、その後、触接じふくせつを続けている敵艦隊についてです。

「現在敵艦隊はラバウル北方の赤道直下に展開しています。発見された艦隊は三つ。内一つは巡洋艦を中心とする大西洋連邦諸国の混成艦隊であり、おそらく先にシンガポールで報告された連合艦隊と思います」

問題は残り二つです。

「一つはイギリス海軍の極東艦隊を中心とした部隊です。キング・ジョージ五世級戦艦が二隻、R級戦艦が五隻ないし六隻を中心に、護衛の巡洋艦や駆逐艦多数をひきつれています」

「最後の一つはアメリカ海軍です。真珠湾を脱出した条約型戦艦八隻に、艦形不明の新型戦艦が四隻加わって十二隻をそろえています」

その圧倒的戦力に会議参加者が絶句する中、中島は一度唾を呑んで喉の調子を整える。

「現在はラバウルの航空隊が制空権を奪取するのを待っているのか、

積極的な行動を起こしていませんが、航空隊だけでの制圧が難しいとなれば確実に戦艦部隊での制圧を狙ってくるでしょう」

今回の議題は、これと戦うか、それともパラオまで後退するかのも会議です。

現在のトラックの艦隊戦力は長門型、伊勢型、山城型戦艦が各二隻。最上型重装軽巡が四隻。妙高型重巡が二隻。阿賀野型防空巡洋艦が二隻。川内型をはじめとする五千五百トン級軽巡が六隻ほど。それに各種駆逐艦が五十隻弱である。

このうち、阿賀野は先の空襲でガンシップの強襲を受け大破。その後水平爆撃でとめを刺され竹島近くの浅瀬にその骸を晒している。

その他にも多くの艦が、至近弾などで小さな傷を負っている。

敵艦隊との戦力差は二倍以上。はつきり言って戦うだけ無駄と思える状況だった。

「本土からの増援はないのか？」

会議参加者である巡洋艦艦長が尋ねる。

「現在、本土に残留していた艦隊は、大陸での地上部隊の支援に全力を挙げています。こちらに増援を派遣する余裕はないでしょう」

「第一機動艦隊は？」

「真珠湾への攻撃には成功しましたが、現在は満州での航空支援を行っていく全力で大湊への帰港を急いでいるとのことです。こちらへの出撃は時間から考えても望めません」

「……………」

沈黙する参加者。

どう考えても、勝つ手段が見いだせなかった。

かといって、撤退を具申するのとはばかられた。何よりそれはトラックの民間人を見捨てる事に直結する。それは許せなかった。

「私は、決戦を挑むべきだと考えている」

南雲が、口を開いた。

「確かに、戦力差は懸絶しているがその差を埋めるために…」

その時、息を切らした伝令兵が作戦室に飛び込んできた。

「只今トラックに本土からの増援を積んだ飛行艇が降り立ったのですが、乗っておられた技官殿が司令部に行きたいと言いまして、現在本艦に…」

「話が長い、邪魔だ」

報告を行っていた伝令は、突然後ろから蹴りを食らい、そのまま床に叩きつけられて気絶する。

背後から現れたのは、

「…子供？」

身長百四十センチ弱の小さな少女だった。

即座に誰何の声を上げようとする男達。

だが、それは予想外の発言で停止する。

「南雲はいるか！こっちは子育てで忙しいのにこんなところまで呼び出して、覚悟はできてるな？」

司令を呼び捨て。そして子育て？

その姿にあまりにも似合わないその言葉に、呆然とする会議参加者達。

「呼び出してしまい申し訳ありません。わざわざトラックまで来ていただいて感謝いたします」

低姿勢な南雲。

それを見て、チツ、と舌打ちする少女。

「お前が至急来てほしいというんだ、戦況と見比べれば状況は分かる。今回だけは許してやる」

二度目はないと思えよ、と少女は言った。

そこで、突然その顔に愛くるしい表情を浮かべて、作戦室に集まっている人間にぺこりと頭を下げた。

「初めまして。私は工藤技研の工藤美樹といいます。まだ二十五歳ですが、今回は新兵器の説明に参りました」

よろしく願います、ともう一度頭を下げる少女——工藤美樹。その姿のあまりの変貌に呆然とする会議の面々。南雲はなんとなくたそがれている。あの時会わなければ、遭わなければ……！

「それでは、説明を始めます。この兵器は——」

「南雲司令、あの少女はいったい何者なんですか？」

会議後、作戦室に残った南雲に、参謀の一人が問いかける。
嵐のように現れ、潮が引くように立ち去って行った謎の少女。その関わりを知りたかった。

「彼女は、我が国の至宝だ」

南雲は答える。

「君は、今の我が国の発展の要となっているのは何だと思う？」

「やはり、勤勉な国民性と…」

「違う。そういう事ではなく、もっと技術的な面だ」

少し考え込む参謀。

「それでしたら、工藤が開発した新型電算機、三菱の自動車、それに兵庫セラミックスの特殊セラミックスでしょうか？」

「君が上げたその全ては、彼女が開発したものだ」

「は？」

「工藤が開発した代物はほぼ全てが彼女の手によるものだし、工藤と他社の合併事業も大抵はそうだ。君津の製鉄所の新型転炉も彼女が基本設計を手掛けている」

「そんなバカな。あれはドイツからの技術で…」

「そうした方が妬みを買いくいからそうしただけだ」

絶句する参謀。その表情はとても信じられないと雄弁に語っている。

南雲は続ける。

「君はさっきの兵器の説明を聞いて、その技術を理解できたかね？」

「…いえ、正直性能以外は…」

「それが正常だ。その理解不能な技術を、可能な限り形にして世に送り出しているのが工藤技研だ。あそこはただ彼女の代理を果たすダミー会社に過ぎない。彼女こそが中心なのだ」

「…一体どこで彼女と知り合ったのですか？」

「…忘れもしない、五年前のマリアナ演習だ…」

それより、と南雲は話を切る。その表情はあの時の事を思い出したくないという思いも浮かんでいたが、それ以上に艦隊の切実な危機をなんとかしなければという思いが浮かんでいた。

「各艦の対空砲の砲身命数はどうなってる？残弾は？」

頻繁な戦闘で、艦隊の対空砲はその限界が早くも迫っていた。

空襲の打撃は、ボディーブローのように、艦隊をじわりじわりと締め付けていた。

十二月十日深夜 ラバウル北方海上 イギリス海軍極東艦隊旗艦『プリンス・オブ・ウェールズ』

艦隊は、緊張に包まれていた。

艦隊外周の駆逐艦が、微かな魚雷と思しき航走音を捉えたのだ。

幸い、目標は魚雷ではなかったらしく艦隊に被害の報告は出ていないが、今度はそれが小型潜水艇の可能性が出てきてしまい、艦隊は警戒態勢を強いられていた。

「まったく。決戦前にこのような目に遭うとは、我らも運が無い」

ぼやくのは、就寝中に叩き起こされた艦隊司令のトーマス・フィリップス大将。『親指トム』の愛称で知られる勇将である。

「しかし、雷撃を受ければ、たとえ戦艦と言えど一発で戦力を喪失しかねませんからね」

答えるのは、艦長のリーチだ。北海ではドイツをはじめとするEUの潜水艦隊と死闘を繰り広げている歴戦の艦長だ。

夜戦艦橋から見える外の景色は闇に包まれてはつきりとは分らないが、その中で駆逐艦をはじめとする各種補助艦艇では、聴音手が耳をすませ、他の乗員はその邪魔にならないよう息を殺しているのだろう。

このプリンス・オブ・ウェールズでも、艦首部に設けられた聴音室でパッシブ・ソナーを操作する兵員達が海中の脅威を探っている。艦隊は、トラックとの距離を詰めているところだった。

十二月八日から始まったトラックへの空襲は、三日間かけても大きな戦果を上げるに至らなかった。

爆撃機は戦闘機の護衛無しの出撃を繰り返し、そのたびに敵戦闘機と対空砲火の熱烈な出迎えを受けて、損害率が二割近い大損害を繰り返した。

敵飛行場も多数の爆弾の直撃で大きな打撃を受けたはずだが、重機による迅速な修理が行われ致命的な打撃を与える事が出来ない。

夜間爆撃による精神的なダメージは蓄積しているはずだが、それは短期的には大きな戦果にはなりえない。超低空からの近接爆撃は敵対空砲陣地や泊地に停泊する補助艦艇に大きな打撃を与えているはずだが、目に見えて対空砲火が目に見えて減少するような打撃は与えられていなかった。

結局、業を煮やした艦隊は十分な制空権を確保する事なく、敵艦隊との決戦に臨もうとしていた。

確認されている敵戦艦は六隻。それに対し、イギリス艦隊は同じく戦艦六隻をそろえている。

中心をなすのは、艦隊旗艦『プリンス・オブ・ウェールズ』と巡洋戦艦の『レパルス』それにロイヤル・ソヴリン級が四隻続いている。

そのほかの補助艦艇も、巡洋艦『エグゼター』をはじめとしてかなり強力な布陣を整えている。

さらに、アメリカ艦隊はそれを上回る戦力をここに派遣している。日本軍との戦力差は二倍以上であり、戦力二乗の法則にしたがえば、負ける事はある得なかった。

今、彼らは日本軍との決戦を目指して、一路ラバウルの制空権下から離れトラックを目指していた。たとえ制空権が無くとも、最低限の航空優勢はこれまでの戦いで得られている。昼になればラバウルの航空隊は再びトラックへの空襲を開始して、それへの対応に敵航空隊は忙殺されると踏んだのだ。

「日本軍に勝ち目はないさ」

自信に満ちた様子のフィリップス大将。

その自信が、砂上の楼閣に過ぎない事は、次の瞬間には分かった。
ドーン……！

突如として、海上に轟音が響き渡った。

「何事だ！」

「『ロイヤル・オーク』から緊急電！『我、敵の雷撃を受ける』！」
「駆逐隊は何をしているのだ！」

「本艦の聴音班も敵の魚雷管解放音を捉えています」

リーチが報告する。

被害は連続する。

「『ロイヤル・ソヴリン』『ラミリーズ』からも被雷の報告！」

「『レパルス』もです！」

「馬鹿な…！」

今まで最強と信じていた自らの艦隊が、目の前で壊滅していく事が、フィリップスは信じられない思いだった。

刺客の手は、プリンス・オブ・ウェールズにも忍び寄りつつあった。

「魚雷航走音探知！方位60距離500！至近距離です！」

「回避！」

即座にリーチが指示を出す。

フィリップスも艦橋の窓に駆け寄り、航跡を捉えようと目を凝らす。

すると、艦の後方に抜けるようなコースで、魚雷がこちらに向かってくるのが見えた。

（…よかった。この艦は無傷で済む…）

フィリップスが安堵した瞬間、魚雷は鋭角に方位を変えた。

「…！」

そのまままっしぐらにプリンス・オブ・ウェールズに向かって突っ込んでくる。

次の瞬間、艦内を衝撃が突き抜けた。

「どうやら攻撃は成功したようだな」

イギリス艦隊の監視に当たっていた『伊―19』潜水艦長、なつはら 榎原省吾しやうごは、潜望鏡から見える火災を見て言った。

本来なら、伊―19はこれから敵艦隊への決死攻撃を仕掛ける事になっていた。すでにトラックの防衛戦力が不足しているのは明らかだったので、少しでも敵戦力を決戦前に減らす必要があったからだ。

だが、その任務は急遽戦果確認に変更され、これまでイギリス艦隊に張り付いていたのを別の艦に交替して、指定された海域に急行した。

そしてそこに、昼ごろに上空に飛行艇が数機飛来し、抱えていた魚雷のようなものを投下していった。

榎原はその行動に首をかしげるばかりだった。司令部の意図が掴めない。どうして魚雷をこんなところに捨てているんだ。どうせなら機雷でもばら撒いていけ。

そして夜。

この海域にイギリス艦隊が来るのは、触接にあたっている潜水艦の連絡ではつきりと分かっていた。そこでの雷撃も、彼らは厳禁されていた。とにかくイギリス艦隊の予想進路上にいろという命令だった。

そして、その結果がこれだった。

イギリス艦隊は、どこからか忍び寄ってきた雷撃で、大型艦ばかり次々に被雷している。

「一体どんな兵器を使っただんだ？」

なけば呆れたように、檜原はつぶやいた。
これでは我々の出番がなくなるではないか。
洋上では、なおも激しい火災が続いていた。

時間をさかのぼり、工藤美樹が会議の場で新兵器の説明をしているところ。

「これはスマート機雷です」

「スマート機雷？」

「はい。これは事前に設定した条件を満たした時に起動し、指定された音源に向かって自立誘導で突撃する機雷です」

会議の参加者は頭の上に『？』マークを浮かべている。

「簡単に言ってしまうえば、これは適当な海上に放っておいて、敵を見つけると勝手に相手に突入する誘導魚雷のようなものです」

「そんなもの、聞いた事が無いぞ」

会議参加者の一人が、疑わしげに言う。

「それはそうでしょう。全て工藤の新開発技術で出来ていますから」

その言葉に驚きを隠せない面々。まさか工藤の技術とはそこまで凄まじい物なのか。

「だったら、それを大量に配備すれば我々はアメリカなど敵ではな

「いいではないか」

もつともだ何人かがうなずく。
それに首を横に振る工藤美樹。

「コストが高すぎます」

「どれほどなのか？」

「一発で『天空』が二機買えます」

「なっ……！」

それはコストが高いとかそういうレベルではない。二発もあれば巡洋艦が建造できるではないか。何かの冗談にしか聞こえない。

「今回だけは工藤が格安で提供しますが、量産できる価格ではないのであきらめて下さい」

沈黙する面々。それを見て工藤美樹は言った。

「この兵器の運用はこちらで行います。海軍には一隻だけ潜水艦をお借りしますがよろしいですか？」

反論は、なかった。

1941 トリック攻防 3 (前書き)

今回は渾身の力作なのです！

1941 トラック攻防 3

十二月十一日　トラック南方海上

「レーダーより艦橋。敵艦隊発見！距離四万メートル、方位180
現在も反応が増え続けています！」

「見張りより艦橋。マストと思しきものが南に見えました！機関の
煙も見えます！」

日本海軍第一艦隊は、早朝に環礁を出撃。トラックから広がる制
空権下にとどまり、決戦の時を待っていた。

上空は朝からひっきりなしに友軍の戦闘機隊が出撃し、敵編隊が
艦隊に到達する前に迎撃し、これまで温存されていた陸攻部隊も爆
撃装備でラバウルを襲撃し、敵航空攻撃を可能な限り抑えようとし
ていた。

そして、とうとう決戦の時は来た。

「見張りより艦橋！敵艦のマストに星条旗を確認！敵米艦隊です！」
「どうやら工藤の新兵器は役に立ったようだな」

昼戦艦橋ではなくその下、かつての前部通信室を改装した戦闘情
報室に南雲の姿はあった。

南雲の座る椅子の正面には、透明なアクリル板が縦に置かれ、艦
隊の陣形や発見された敵艦隊、周辺の空域に展開する彼我の航空戦
力が赤や青の水性ペンで書き込まれている。

壁際には、多数の無線が置かれ艦の内外を問わず、盛んに通信が
行われていた。

「触接に当たっていた潜水艦の報告では、イギリス艦隊は最低でも
四隻の戦艦が被雷し、今も現場海域にとどまり損傷艦の救援を継続

しているとの事です」

参謀が、手元の通信文を見て報告する。

「おそらく、これで戦力比は四分六分には持ち込めたのではないかと思います」

南雲は無言でうなずいている。

艦隊の陣形は複数の単縦陣で構成されている。

中心に居るのは戦艦部隊だ。

先頭は、艦隊旗艦の『長門』。その後ろには同じ第二戦隊に所属する『陸奥』が続き、そのさらに後方に第五、第六戦隊を構成する伊勢型、山城型がそれぞれ二隻ずつ続いている。

その右翼を並走しているのは、重巡部隊だ。

先頭は妙高型重巡洋艦のネームシップである『妙高』で、同型艦四隻が一同に会し単縦陣を構成している。役割は、敵巡洋艦部隊の殲滅である。連装五基十門の二十・三センチ砲は、すでに装填を終え僅かに仰角がかかっている。

さらにその右翼を航行しているのは、重装軽巡洋艦最上型四隻を先頭とする水雷戦隊である。本来なら妙高などともに巡洋艦部隊に編入すべき最上型がこちらに配備されたのは深刻な理由があったが後ほどの記述になる。敵の隙についての水雷突撃は、戦艦すら容易に撃沈しうる艦隊の切り札だ。

充実している右翼に比べ、戦艦部隊の左翼には『大井』『北上』の二隻の軽巡洋艦と一個駆逐隊四隻の陽炎型しかない。

戦力の合計は戦艦八隻、重巡洋艦かそれに類するもの（最上型はロンドン条約による主砲口径の問題から軽巡洋艦とされるが、実際は重巡洋艦と同格の戦力）が八隻、各種駆逐艦や水雷戦隊の旗艦を務める五千五百トン級軽巡洋艦が三十弱という大戦力である。

そして、今日の前に姿を現しつつあるアメリカ艦隊の戦力は、こ

ちらを全般的に凌駕していた。

やはり艦隊の中心は戦艦部隊である。

戦艦部隊は二つの単縦陣を敷いている。

一つは、艦隊旗艦と思しきサウスダコタ級戦艦を先頭にした部隊。後方にはもう一隻のサウスダコタ級が一隻と二隻のノースカロライナ級戦艦の計三隻が続いている。いずれも海軍休日明け後に建造された新世代の戦艦だ。

もう一つの単縦陣は、コロラド級戦艦二隻を先頭にテネシー級二隻、ニューメキシコ級二隻の計六隻で組まれている。いずれも軍縮条約以前かその前後に建造され艦齢が二十年を超えるロートルである。それは日本海軍の作戦参加戦艦も同じだが、数次にわたる近代化改装で新鋭戦艦とも十分に渡り合える戦力を維持している。

速度の問題で、先を行くもう一つの単縦陣には後れを取っている。これらに同行する補助艦艇は、速度の遅い旧式戦艦を置き去りにして、前を進む新鋭戦艦群に歩調を合わせている。

正面に展開する日本側から見て右翼に、多数の巡洋艦が展開している。

先頭を進みその主役を張るのは、新鋭のボルチモア級巡洋艦の『ボルチモア』。まだ一隻しか就役していない最新鋭重巡洋艦。それに続くのはやや旧式のニューオーリンズ級巡洋艦が三隻、ポートランド級巡洋艦が二隻、ノーザンプトン級四隻の計十隻が単縦陣をしている。これに対処すべき日本側の巡洋艦部隊は妙高型四隻だけであり、質、量ともに日本側の巡洋艦戦力を凌駕していた。

さらに左翼には別の巡洋艦部隊が展開している。

こちらは、最上型に対抗して建造されたブルックリン級軽巡洋艦が四隻展開している。就役当時のアメリカ重巡洋艦より強靱な防御力を持つという重装軽巡洋艦であり、三連装五基十五門搭載された主砲の十五・二センチ砲の投射弾重量（一定時間で発射される砲弾の総重量。砲弾の重量×発射速度（毎分）×一斉射での発射弾数）は二十・三センチ砲を上回っている。十分に重巡と撃ちあえる。

これらの両翼に駆逐艦が多数展開し、日本側の水雷戦隊の肉薄阻止と隙についての戦艦への雷撃を目指していた。

戦力の合計は、戦艦十隻、巡洋艦十四隻、駆逐艦が四十隻以上と全般的に日本側を上回っている。

日本側の唯一の勝算は、敵艦隊の戦艦が速度差のせいでの行動がバラけている事と、片翼に集中した水雷戦隊の突破力だけだった。

「司令、砲戦距離は一万八千でよろしいでしょうか？」

「かまわない。敵先頭集団との距離二万で重巡部隊と水雷戦隊の突撃を開始。距離一万九千で左舷へ転舵する。おそらく相手もそのくらいの距離での戦闘を想定しているだろう。後衛は前衛を始末してからだ」

長門艦長が昼戦艦橋から送った確認の艦内電話に、南雲は答えた。

「たとえ我らが全滅してでも、戦艦部隊は殲滅する。巡洋艦だけならば航空攻撃で殲滅してくれる」

彼我の距離は、確実に縮まっていった。

日本側の戦術は水雷突撃の一本に絞られている。戦艦戦力で大差をつけられているからだ。

基本的な構想は、戦艦部隊が距離二万メートル弱の中距離で砲戦に突入。敵の前衛戦艦部隊の火力を引き付ける。この時の速度は二十五ノット前後を出し、後衛の敵旧式戦艦の参戦を可能な限り防ぎ戦力の優越を維持する。

この隙に、最上を筆頭とする軽巡、並びに水雷戦隊が妙高型四隻の支援の元、敵戦艦への肉薄雷撃を敢行。一隻当たり二発も当たれば確実に交戦の継続は不可能になる。

これで敵前衛を片付けたあと、水雷戦隊は一度退避、魚雷の再装填を行った後、遠距離砲戦で適当にあしらっておく予定の後衛戦艦

群への肉薄を再度敢行、決着をつけるというものだった。

この作戦、はっきり言ってかなり綱渡りな作戦である。戦艦部隊が早期に打ち負けてしまったら水雷戦隊はただの射的の的と化す。おまけに前衛の四隻を撃沈してもその後、水雷戦隊が魚雷の再装填を終えるまでの約三十分は戦艦部隊が独力で耐えきる必要がある。

しかも、ここには敵の水雷突撃を一切考慮していないということんでもない穴が存在した。

一応それへの策もあるが、リスクなのは間違いない。

しかし、それだけのリスクを覚悟しなければ、この戦力差を覆すのは厳しかった。

「敵先頭艦との距離三万切ります！」

見張りからの報告が入る。

お互い単縦陣で二十五ノット以上を出しているため距離が縮まるのは早い。

すでに双方の主砲の射程に入っているが、お互い打ち出す気配はない。考えて見れ分かるが、たかが直径四十センチの円筒状の砲弾を三十キロも彼方の全長二百メートル、幅三十メートル程度の目標に直撃させるのである。しかも、それほどの長距離になれば相互の距離と移動速度だけでなく、気温、気圧、湿度、磁気、地球の自転速度、その他のさまざまな条件が関係してくる。よほど運が無ければ、撃ったところで砲弾の無駄遣いで終わる。

すでに両艦隊とも、並走していた巡洋艦や水雷戦隊はそれぞれ距離を開け始め、突撃に備えている。

「距離二万五千！」

見張りからのさらなる報告。

その時、状況が動いた。

「敵艦隊発砲！」

アメリカ艦隊は、日本側に先んじて砲撃を開始した。

各艦が、艦の前部に配置されている三連装砲の一番砲で砲撃を開始する（つまり、一隻当たり二発撃ったという事）。

戦艦の砲撃は「初弾観測数弾斉射」と日本海軍の教本では記される。一発目で弾道を見極め、その後射撃データを更新して数回一斉射撃を行えば敵艦は撃破できるというものだ。

この「初弾」は基本的に砲塔一基あたり一発しか撃たない。弾薬の浪費を避け、射撃速度を上げるためだ。

その一撃が日本艦隊に降り注いだ。

「敵弾弾着を確認！しかし、すべて外れています！」

だが、その一撃は艦隊から遠く離れた場所に落下する。艦には至近弾の衝撃すら届かない。

お互いの距離が時速八十キロを超える速度で詰まっているのである。距離の観測は困難を極めている。

アメリカ艦隊は砲撃の結果を確認すると、観測値を更新した上で二番砲から第二射を放つ。

二射では多少精度が改善されたが、まだ命中には程遠い。艦からはるかに離れた海面に水柱を立てる。

「連中はなにを焦っているのかな？」

「おそらく、新型の射撃指揮装置が何かを搭載して命中率に自信があつたのでしょう」

南雲の問いかけに、参謀の一人が答える。

もっとも、ただの過信だったようですが、とその参謀は小さく笑

う。

「こちらはもう少し距離を詰めてから、一撃必殺でいくか。…敵艦隊との距離は？」

「現在二万五千！間もなく二万を切ると思われます！」

「…少し早いが構わないか」

南雲の決断が、行われた。

「全艦、針路270！針路安定と同時に砲撃開始！目標は第二戦隊が敵一番艦、二番艦。第四戦隊（伊勢、日向）三番艦、第五戦隊（山城、扶桑）は殿艦」

そこで南雲は一息つき、そして裂帛の声で言った。

「我らの意地と誇り、奴らに見せつけてやれ！」

同時刻 アメリカ艦隊旗艦『サウスダコタ』

「ふむ。やはり当たらんか…」

司令塔の中で呟いたのは、太平洋艦隊司令長官ハズバンド・キンメル大将。

今回の対日宣戦の初期作戦『ヘビー・ラム』において、最も重要とキンメル自身が考えたトラック強襲部隊にキンメルは自ら座上していた。

乗艦である『サウスダコタ』は最新の高速戦艦だ。軍縮条約の頸

木を離れ、その間に培われた各種の新技术を満載した新世代の戦艦。主砲は、十六インチ（四十・六センチ）四十五口径を三連装で三基九門。従来の副砲は廃止し、代わりに対空砲と兼用の三十八口径五インチ（十二・七センチ）連装両用砲を八基十六門搭載。強大な防空能力と駆逐艦などの小型艦艇の肉薄攻撃への対処能力を両立させている。

装甲も同じ条約明け後に建造された戦艦でありながら、十四インチ防御にとどまったノースカロライナ級に比べ大幅に強化され十六インチ防御を達成。全長も十五メートル短縮され被弾面積を縮小すると同時に集中防御を徹底する事で継戦能力はカタログスペック以上に高まっている。

「さすがにあの速度で航行しては、命中は難しいでしょう」

そう参謀の一人が言う。

「確かに。新型の射撃レーダーに期待してみたのだがな」

キンメルもそれほど期待はしていなかったらしく落胆した様子はない。

「だが、ここからしばらくは数で劣勢になる。オルデンドルフの腕の見せ所だろう」

艦隊の指揮はアメリカ海軍第一任務部隊の指揮官であるオルデンドルフ中將が執っている。太平洋艦隊司令長官であるキンメルが指揮に口を挟む事はない。そんなことをすれば指揮系統が乱れてしまう。

「しかし、大統領閣下もやってくれたな。あれほどサンディエゴに

司令部を残せと言ったのに」

キンメルは吐き捨てるような調子で言った。

すでに艦隊に真珠湾が空襲を受け壊滅的な打撃を受けたとの報告は入っている。すでに航空索敵能力を喪失しているため敵艦隊の現在位置も不明と言う惨憺たる状況である。

キンメルは、真珠湾に司令部を移転する事に反対していた。正確には、アメリカ海軍に艦隊司令部をハワイに置く事に賛成している人間は一人もいなかった。そもそもオアフ島は明らかに艦隊の整備補修施設が不足しており、さらに本土から離れているために補給にも困難を伴う。

唯一の利点は、日本への軍事的圧力だが、逆に格好の攻撃目標を提供する事になりかねない上に、それをやるならイギリスとの協調のもとフィリピン方面から圧力を加える方が、補給の面からモシンガポールという大規模拠点を背後に抱え、さらにその後方にセイロン島という艦隊根拠地がバックアップにある事から楽なのである。

艦隊主力がラバウル方面に移動していたおかげで、奇跡的に空襲の惨禍を避けられたが、もし停泊していたら大惨事になっていた。

「まあいい」

冷静な目で、キンメルは船窓の外を見つめた。

「ここで奴らを叩きのめせば、それで戦争は終了だ」

勝算は、十二分にあった。

同時刻 アメリカ艦隊二番艦『インディアナ』

「敵水雷戦隊、巡洋艦部隊、共に突撃を開始！」

「敵戦艦転舵開始！T字を書くつもりの様です。距離二万二千！」

艦橋には、各部の見張り員から無数の報告が飛び込んできていた。

「この距離で転舵するか…」

艦橋の中で、オルデンドルフは冷静に報告を聞いていた。

「少し遠めだが許容範囲内だろう」

そして命じた。

「全艦転舵。敵艦隊と同航戦に入る」

「各艦目標は一番艦から四番艦までそれぞれ担当。目標を撃破し次第、五番艦以降を攻撃」

オルデンドルフが選んだのは、典型的な艦隊決戦隊形。両軍の戦艦が並走しながら力尽きるまで殴りあう工夫も何もない陣形だ。

しかも、数ではオルデンドルフの戦艦部隊の方が少なく、厳しいものがある。

だが、オルデンドルフは負けるなど考えていなかった。個艦の性能差と補助艦艇の豊富さ、そして、後方から迫りつつある味方の戦艦部隊の存在が、彼に勝利を確信させていた。

「旧時代の老骨どもに、新しい時代の礼儀を叩きこんでやれ」

オルデンドルフは口元に、小さな、それでいて獰猛な笑みを浮か

べた。

同時刻 日本巡洋艦『最上』

「全艦、最大戦速！戦艦部隊に仕事を残すな！」

その艦橋で声を張り上げていたのは、最上の所属部隊であり今回第二水雷戦隊の指揮も同時に執る事になっている第七戦隊司令である伊崎俊二少将。いさきしゅんじ

その号令を受け、機関はその唸りを高め、煙突からは不完全燃焼を示す黒煙がもうもつと上がり始める。

同時に速度も一気に上がり、最大速度である三十五ノットに達した。

「水雷戦隊の雷撃まで、駆逐艦には一隻も手を触れさせるな！」

最上は同型艦三隻とともに水雷戦隊の先頭に立って突撃を開始する。全ての主砲に仰角をかけながら高速によって生じる水しぶきに包まれるその姿は、映画のポスターを飾れるであろう程に勇壮な光景だった。

「敵巡洋艦接近！十一時の方向、距離一万八千（一万八千メートル）！」

「敵駆逐艦、針路前方に展開中！突撃を阻止する構えです！」

「突破だ！全て薙ぎ払え！」

もたらされた報告に、伊崎は吠えた。

「第五戦隊、右に出ます！敵巡洋艦部隊への突撃に移行しています！」

さらなる報告が右舷見張りからもたらされる。

伊崎が右舷に視線を向けると、先ほどまで左側を並走していた第五戦隊の妙高型四隻が、第七戦隊の右後方に移動し、徐々にその間隔を開けつつあった。

その艦首の向かう場所には、第七戦隊の針路を塞ぐように動いていた敵巡洋艦部隊十隻の姿がある。

「ありがたい。連中を阻止してくれるのか！」

その間にも、敵との距離は急速に詰まっている。

「距離一万五千！敵艦隊発砲！」

見張りから悲鳴じみた報告が上がる。そして、

…ドーンッ！

かなり離れたところに、敵巡洋艦の主砲が着弾した。

「ははは！下手くそめ！そんなへなちょこ玉が当たるか！」

その砲撃をみて、嘲笑を浮かべる伊崎。こんな高速で航行している艦艇にそうそう砲撃が当たるか。

「二番艦以降も砲撃を受けていますが、直撃弾無し！」

「水雷戦隊は攻撃を受けていない模様です！」

「いいぞ、その調子だ！一気に懷に突っ込むぞ！」

その時、新たな砲撃が最上を襲う。

「敵駆逐艦砲撃開始！こちらに向かって突撃しています！距離一万！」

「撃ち払え！全艦砲撃開始！」

その号令を受け、待ってましたばかりに最上の主砲である六十口径十五・五センチ砲が火を噴く。最上型の主砲は三連装砲が艦首方向では一番低い位置に一番二番砲塔があり、それより一段高い位置に三番砲があるという変則背負式になっている。これである程度の仰角がかかっていれば三基全てが前方の敵を攻撃する事が出来る。後方の僚艦や駆逐艦も砲撃を開始する。

最上型は最上と同じ十五・五センチ砲を各砲塔一門ずつの交互打ち方で放ち、駆逐艦は艦首方向に指向できる十二・七センチ連装砲一基で砲撃を繰り広げている。

水雷戦隊旗艦の『神通』は、十四センチ砲を必死に打ちまくっている。どの艦も高速による動揺で命中を狙うというより牽制の色合いが濃い。

「敵巡洋艦部隊、離れていきます！第五戦隊と交戦に突入！」

「敵駆逐艦、距離八千！駆逐隊ごとに散開し突撃態勢を維持します！」

「くっ、小癩なまねを……！」

敵駆逐艦散開の報告を受け、歯ぎしりする伊崎。これでは目標を絞る事が難しくなる。敵の雷撃のタイミングを図る事も難しい。

さらに凶報は続く。

「朝霧爆沈！魚雷発射管に直撃した模様！」

「初風落伍します！後続の雪風以下は回避して突撃を継続！」

「やはり損害無しとはいかんか…！」

悔しそうな表情をにじませる伊崎。出来れば全ての艦に雷撃の機会を与えてやりたかった。

だが、敵駆逐艦にも損害が生じる

「敵駆逐艦一隻爆沈！」

「同じく一隻、完全に行き足止まりました！」

「いいぞ、その調子だ！」

すでに距離は八千メートル。日本側の酸素魚雷ならこの距離でも余裕で最大速度で到達できるが、魚雷は戦艦のために取っておく。ブリキ缶ごときに貴重な魚雷を消費してなるものか！

後は敵駆逐艦の雷撃をどうやって回避するかだ。

「敵駆逐艦、先頭艦との距離六千！」

砲弾の飛び交う中、伊崎の右足はいつの間にかリズムを刻んでいた。まだだ。まだ違う…。

そして、見張りからの報告がもたらされる。

「先頭艦との距離五千切ります！」

「全艦、百八十度一斉回頭！」

瞬間、伊崎が裂帛の声で命じた。

敵艦隊の目の前での百八十度一斉回頭。はつきり言って艦隊陣形が乱れて話にならない戦法だ。戦術講義でこんな答えを出す生徒がいたら問答無用で鉄拳制裁が加えられるだろう。

だが、伊崎はその戦法にかけた。それ以外に手段が無く、同時にそれを遂行するだけの技量を、艦隊が持っているのと信じたからだ。

命令を受けても、最上の一万トン近い巨体はすぐには舵を切ろうとしない。

後続する僚艦や駆逐艦も、タイミングを合わせるべくまだ艦首を振らない。

まだか…まだか…まだか…

三十秒以上の待ち時間の後、ついに最上の艦首が右に振られ始めた。

そして、奇跡の光景が起こった。

それとほぼ同時に距離四千に達し、一斉に雷撃を行ったアメリカ駆逐艦。

その目の前で、一糸乱れぬ動作で全ての艦が右に艦首を振り始めた。

はじめは艦首を魚雷に正対させて、被雷面積を減らそうとしているのだと思った。

無駄な努力だと笑うアメリカ駆逐艦の乗組員達。すでに放たれた魚雷は百本を優に超えている。一発でも当たれば、巡洋艦以下の艦艇など一撃で大破できる必殺の一撃。その程度の動作で回避できるものではない。

だが、艦首は魚雷と正対するところまで来てもまだ振られ続ける。そして、その運動が終わった時、全てのアメリカ駆逐艦の乗組員が息をのんだ。

そこには、見事に隊列を反転させ、それでも一糸乱れぬ行動を続けている日本艦隊の姿があったからだ。

いつの間にか、損傷して脱落した駆逐艦の穴までふさがれている。アメリカ艦隊の雷撃は、日本艦隊が三十五ノットの速度で直進するとの前提で放たれている。

それが正反対の方向に動き出したのでは、結果は目に見えていた。

「…魚雷、到達予想時間です…」

見張りが震える声で告げる。

だが、日本艦隊に被雷の水柱は一つも上がらない。

「馬鹿な……！」

その信じがたい機動に、絶句するアメリカ艦隊。

「いいぞ！再反転！一気に突破するぞ！」

それを見て、再度の反転を命じる伊崎。

それに対して、泡を食らったようにアメリカ艦隊は必死の砲撃を加える。

しかし、すでに雷撃を終え離脱する態勢にあったアメリカ艦隊は日本側水雷戦隊から離れる軌道にあった。いまさら方向修正は僚艦との衝突の危険がある。

「クソッ！なんてやつらだ！」

歯ぎしりするアメリカ艦隊。

このまま一気に突撃を成功させようとする第七戦隊と第二水雷戦隊。

だが、

ズドーンッ！

「なんだ！この砲撃は！」

突然巨弾が艦隊を襲った。先ほどまでの駆逐艦や巡洋艦とはわけが違う。明らかに戦艦の砲撃だった。

見張りから悲鳴のような報告が入る。

「右舷前方に敵戦艦が見えます！数八、距離間もなく二万を切ります！」

「くっ、報告にあつた旧式戦艦群か！」

悔しげな表情を浮かべながら、伊崎は命じた。

「全艦撤退！もう一度タイミングを計る！」

せっかく距離を詰めたのに、ここにきての後退。
歯ざしりする伊崎。

煙幕を展開しながら、艦隊は降り注ぐ巨弾の中を退避していった。

1941 トラック攻防 4

アメリカ艦隊 戦艦部隊第一群『サウスダコタ』

「敵艦発砲！弾着まで後三十秒！」

生き残った見張りの絶叫が司令塔に木霊する。

そして、きっかり三十秒後。

「グッ……！」

司令塔に詰めているキンメル達を襲う轟音、そして激震。司令塔内部を照らす蛍光灯は弱弱しく明滅している。

「馬鹿な……！奴は本当に長門クラスなのか……！」

キンメルが驚愕の呻きを漏らす。

戦艦同士の戦いは、アメリカ側が劣勢に陥っていた。

キンメルとオルデンドルフは、サウスダコタとインディアナが敵の長門クラスを迅速に撃破。返す刀で後方の伊勢タイプ・山城タイプを始末しようと考えていた。条約明け後とその前の戦艦とは歴然たる戦力差があると考えていたからだ。

その考えはあっさりと覆されようとしていた。

「本艦の砲撃、弾着、今！」

見張りの声を受け、キンメルが船窓から敵の長門タイプを見る。

そこでは、長門タイプの一隻が多数の水柱に囲まれ、さらにその陰で二つの直撃弾の閃光が走るのが見えた。

「やったか…！」

だが、その期待はまたも裏切られる。

至る所から火災の炎と煙をを噴き出しながらも、長門は速度を落とす事もなく悠然と水柱の影から姿を現す。そして、発砲。

その砲撃も四基ある主砲塔全てから放たれ弱まる様子はない。

「まさか、我らが負けるというのか…！」

すでにサウスダコタは第二砲塔を爆砕され、敵艦に向けられている左舷の対空砲は全滅している。

水中弾による浸水被害も拡大し、このままでは早晚射撃精度を確保できなくなる。

その後方では、インディアナがもう一隻の長門クラスと死闘を続けており、他艦を支援する余裕は全くない。ソースカロライナ級二隻は敵戦艦四隻にタコ殴りにされ、最早隊列から落伍しつつある。

「馬鹿な…！」

再度、キンメルは信じられないというように呟いた。

その言葉に、現実を変える力はひとかけらもなかった。

アメリカ軽巡洋艦『ブルックリン』

「全艦、最大戦速！敵戦艦を仕留めるのは我々だ！」

その艦橋で氣勢を上げたのはブルックリン以下四隻の軽巡をその

指揮下に置くアーレイ・バーク中佐。本来なら別の人間が指揮を執るはずだったが、書類上のばかりかしいミスで工廠勤務のはず唐突に最前線に叩き込まれたのである。

しかし、どれほど人事に文句があろうとも、戦闘となればそんな事は言ってられない。

気合いを入れて指揮にあたっていた。

「味方戦艦、敵戦艦と同航戦に入りました！」

「敵戦艦までの距離、一万八千メートル！」

「駆逐隊、突撃開始します！」

そこに、見張りから次々と報告が入る。

「前面に新たに敵艦捕捉！軽巡クラスが二隻に、一個駆逐隊ほどがこちらに突撃しています！」

「敵巡洋艦に集中打を浴びせろ！一番二番艦は敵一番艦、三番四番艦は敵二番艦！」

「撃ち方始め！」

バークの命令を受け、ブルックリンの艦長が砲撃を命じる。

瞬間、艦首方向に配置された三基の十五・二センチ砲が火を吹く。放たれた砲弾は、しかし目標から離れた位置に弾着を果たす。

「修正急げ！」

艦長の怒号と同時に第二射。しかしこれも先ほどに比べればまだがまだ遠い。有効打には程遠い。

その間も、距離は急速に縮まっている。

「味方駆逐艦、砲撃開始！」

「敵巡洋艦、駆逐艦、共に砲撃開始しました！目標は駆逐艦に絞っている模様！」

「…まあ、正解の反応だな」

敵にとって一番の脅威は駆逐艦の雷撃だ。それを真つ先に潰そうとするのは理にかなっている。

バークは首から下げていた双眼鏡を構える。

そして、ふと首をかしげる。

（あのような形式の巡洋艦は日本海軍に存在したかな…？）

双眼鏡の視界に映る敵巡洋艦は、艦首方向に向けられる三基の単装砲から、六秒から七秒に一度の割合で砲撃を繰り返しながら突撃を継続している。

バークの気に障ったのは、その艦橋の左右の上甲板の様子だ。

最初は日本海軍の五千五百トン級の一隻だと思った。だが、正面からでは分かりにくいのが、そこには砲以外の何かが装備されているのが見えた。

（…？）

しかし、そのバークの考えを遮るように、新たな報告が舞い込む。

「敵駆逐艦先頭艦、本艦との距離一万を切ります！」

「味方駆逐艦、針路変わりません！まっすぐ突っ切るつもりです！」

「味方戦艦部隊、後方の二隻が炎上中！おそらく『ノースカロライナ』と『ワシントン』です！すでに砲撃停止しています！」

「まずいな…」

報告が確かなら、味方戦艦部隊は明らかに劣勢だ。日本の戦艦は

基本的に高速だ。今から逃げようにも間に合わないだろう。味方の後衛戦艦部隊の到着を待つしかない。

（オルデンドルフ中將は失敗したな…）

日本軍の旧式戦艦は我々のコロラド級などとはわけが違う。どう考えても新造した方が安くつくだろうレベルの大改装を戦前に繰り返し受けている。それこそ、新鋭戦艦と正面から殴りあえるほどに

（急がなくてはな…）

こうなつては、我々側面から突撃を続けている突撃部隊だけが頼みの綱だ。

「敵駆逐艦と巡洋艦は我々で相手取る！なんとしても駆逐艦の切り込みを成功させる！」

「了解！」

バークの命令を受け、砲撃が心なしか勢いを増す。それに応えるように、戦果の報告が上がる。

「敵駆逐艦一隻炎上中！速度を落として隊列から落伍します！」

「よし！その調子だ！」

すでに距離は八千を切っている。

敵艦隊の砲撃は、手数少なさゆえか有効打を与えられていない。

（いけるか…）

バークの脳裏に希望が生じる。このままいけば雷撃を成功させ、

バーク達の突撃が海戦の趨勢を決した大金星を取る事も夢ではない。
そして、先頭艦との距離が六千を切った所で。

「敵艦隊転舵！」

「いまさら回避運動か？」

ふいの転舵で艦隊の砲撃は狙いを外され海面を撃つばかりとなっている。

「修正急げ！」

再び艦長の怒号が艦橋に響いている。

敵艦隊の奇妙な動きはまだ続いた。敵駆逐艦はそのままこちらから離れる方向に舵を切り、彼我の距離は急速に離れつつある。それに対し、敵巡洋艦は再度転舵し駆逐艦と別行動を取る。

「何を考えている…？」

その答えは、次の瞬間判明した。

「…！」

突如、敵巡洋艦の一隻がはじけ飛んだ。

爆発を起こした敵巡洋艦は、まるで爆竹が弾けるように誘爆で上部構造物を粉碎され瞬時に洋上から姿を消した。

その姿はまるで…。

「…まさか！」

搭載魚雷に直撃弾を浴びた駆逐艦のようだった。

「全艦転舵！敵艦隊は雷撃を行った！それも大量だ！」

だが、命令は一步遅かった。

次の瞬間、駆逐艦の先頭艦が巨大な水柱を上げた。

艦の前部に炸裂した魚雷の一撃で、その駆逐艦はつんのめるように停止する。

艦首付近の海面は激しく泡立ち、激しい浸水を物語っている。おそらく生還は不可能だろう。

被害は連続する。

敵艦隊に向かって一直線に突撃していた駆逐隊は雷撃の猛威をもろに食らっていた。

「『メイヨー』被雷！行き足止まります！」

「『バートン』『ミード』『ベイリー』もです！」

「駆逐隊、隊列大幅に乱れます！」

そして、悲劇はバークの足元にも迫っていた。

「雷跡確認！距離千五百！」

「回避！」

見張りの報告を受け、艦長が即座に回避を命じる。

魚雷の被雷面積を減らすべく、魚雷に正対するように艦を動かす。

「雷跡近いです！」

その瞬間を、バークは息をつめて待つ。巡洋艦クラスでは、魚雷を一発食らえば、それだけで撃沈の可能性もある。高速航行中に艦首に直撃すれば、そのまま大量の海水を呑みこみ、前後のバランス

が狂いそのまま海中に消える事すらあり得る。
だが、

「魚雷、全て本艦後方に抜けました！」

一息つくバーク。

だが、背後で生じた轟音に、とつさに背後を振り返る。
そこでは、僚艦の一隻が水葬に付されようとしていた。

「『フィラデルフィア』被雷！」

遅ればせながら見張りの絶叫が艦橋に木霊する。

『フィラデルフィア』にはさらなる悲劇が襲う。

半ば停止した『フィラデルフィア』の左舷中央付近に、さらなる
被雷の水柱が上がる。

すでに艦首に直撃を受け青色吐息だった『フィラデルフィア』は
その一撃で致命傷を負い、艦上から乗組員を撒き散らしながら轟音
とともに転覆した。

「『フィラデルフィア』転覆！」

まるで悲鳴のような報告が艦橋に木霊した。

「馬鹿な……！ たった五隻でこれほどの魚雷を放ったというのか……！」

艦隊の前面に現れた敵艦は軽巡二隻と駆逐艦四隻。しかも駆逐艦
の一隻はすでに砲撃で撃破されている。それでこの打撃は確率論的
にあり得なかった。

その時、バークの脳裏に爆竹のようにはじけ飛んだ敵巡洋艦の姿
が思い起こされた。

それはまるで魚雷を積んだ駆逐艦が誘爆するような…！

「まさか、舷側一杯に魚雷を積んでいたというのか…！」

バークの推測は正しかった。

日本海軍巡洋艦『北上』『大井』

この二隻は、酸素魚雷と言う強力無比な決戦兵器を得た海軍が、その能力を最大限に生かそうと従来の軽巡を改造して作った重雷装艦である。

その装備は十四センチ単装砲を四基以外は一切の砲壇兵器を搭載せず、かわりに合計十基四十門もの魚雷発射管を設けるといって、極端から極端に走りたがる日本海軍の特性をこれでもかと発揮した艦だ。

改装で排水量が増加し、最大速度は三十ノット強に落ちたが、代わりに従来の艦艇とは懸絶した雷撃能力を得る事になった。

だが、一度戦場で使えばタネはわれてしまう。一度限りの秘密兵器だった。

そして、大井を失いながらも、彼らは十分にその存在意義を果たした。

日本海軍第一艦隊旗艦『長門』

「敵水雷戦隊、壊乱しました！『北上』『大井』の雷撃が成功した

模様！」

「ふむ、これで最大の脅威は排除できたな」

南雲は重々しくうなずいた。

これで情勢はこちらの優位にほぼ固定された。

戦艦同士の決戦は、日本側の圧勝に終わろうとしていた。

すでに敵艦隊の後方に位置していた二隻のノースカロライナ級は大火災を起こして猛烈な火災の煙の中にその姿を隠し、様子をうかがう事も出来ないほど痛めつけられている。

長門と陸奥が相手をしていたサウスダコタ級はさすがに頑丈で、今も火災煙の中から砲撃を繰り返している。長門もすでに二十発近い直撃弾を受け大破に近い中破の状態だ。

だが、こちらは全ての主砲塔や測距儀が無事なのに対し、相手はそれぞれ砲塔の一基を粉碎され、射撃精度も浸水被害のため低下している。

『伊勢』『日向』『山城』『扶桑』の四隻のうち、伊勢と山城はノースカロライナ級の反撃を受け、それぞれ二十発近い直撃弾を受け大破漂流状態に陥っていたが、残った日向と扶桑は文字通りノースカロライナ級を滅多打ちにして四十発近い直撃弾を与え、両艦はすでに沈黙を通り越して水葬に付されようとしていた。

だが、そこに横槍がつきつけられた。

「敵巡洋艦部隊接近！数八！」

「なに！？」

それは妙高以下四隻の重巡が相手取っていた敵巡洋艦部隊だった。決死の戦鬪を挑んだ妙高以下の艦だったが、数の差はいかんともしがたく、なんとか二隻を脱落に追い込んだ時点で敵艦隊の猛射を浴び『妙高』『羽黒』が沈没。『那智』『足柄』が全主砲塔を粉碎され戦力を喪失した。

そのまま敵巡洋艦部隊はこちらの戦艦部隊に肉薄砲戦を挑んできたのだ。

「敵巡洋艦発砲！」

「敵巡洋艦は副砲と高角砲で対処しろ。主砲目標は戦艦のままだ」

「了解。副砲目標敵巡洋艦部隊。撃ち方始め！」

号令と共に、艦の舷側砲郭廊に上下二段に分かれて両舷合計二十門が装備された十四センチ砲が、三十八キロの砲弾を秒速八百五十メートルの初速で一斉に放つ。

しかし、すでに右舷の副砲は相当数が敵戦艦の砲撃で破壊され、放てるのは僅か四門しかなかった。高角砲はすでに全滅して、甲板の粗大ごみとなり下がっている。

そこに、敵巡洋艦の第一射が降り注ぐ。まだ直撃はないが、かなりの至近距離に落下し水しぶきが長門に降り注いだ。

同時に敵戦艦の砲撃も降り注ぎ、一発が長門を直撃して金属的な叫喚を奏でる。

「くっ……！被害報告！」

艦長が叫ぶ。

その報告が入る前に、これまで鳴り響いていた主砲発射をつけるサイレンが途切れ、そして轟音。長門の第二十一斉射が放たれ、そして着弾。

「命中弾二！」

「これでとどめか……？」

だが、次の瞬間、猛火の中から敵戦艦の新たな砲撃が飛び出す。その時、ようやく被害報告が入る。

「敵弾は右舷中央を直撃！貫通は阻止しましたが、右舷側の機関への浸水が激しくなっています！応急班を追加で向かわせました！」
「さすがに厳しいか…」

ここまで優勢に砲戦を戦っているとはいえ、長門はすでに二十歳を超えるロートル。艦のあちこちに疲労が蓄積されて、防御性能はカタログスペックを維持できていない部分も多い。被弾の衝撃でリベットも次々とはじけ飛んでいる。

凶報は続く。

「『扶桑』より通信『後方より敵戦艦接近中。数六』！」
「くっ…。手間取りすぎたか…」

後方の敵戦艦も、機関の全力を振り絞って戦場を目指し、激しい砲戦で機関に損傷を受けた『扶桑』『日向』に追いつこうとしていた。

「『扶桑』『日向』は後続の敵戦艦を阻止。指揮権は『日向』艦長に一任！」

南雲の指揮を受け、先立ってのノースカロライナ級との砲戦で傷ついた体を引きづりながら、二隻の超弩級戦艦は隊列を離れていく。立ち上る火災煙が『長門』と『陸奥』に別れを告げているようだった。

敵戦艦は無傷の条約型戦艦が六隻。対するこちらは傷ついて火力の三分の一を失った条約型戦艦。

勝敗は、目に見えていた。

アメリカ艦隊後続戦艦群旗艦『コロラド』

「ようやく追いついたか……！」

艦橋で小さく歓声を上げたのは、指揮を執るトーマス・キンケード少将。

ここまで鈍速の戦艦部隊を巧みに操り高速艦ばかりの艦隊から落伍するのを防いできたキンケードだったが、さすがに戦闘速度で突っ走る新鋭戦艦群には追いつけず後塵を拝していた。

それがここにきて、ようやく戦場となっている海域に到達したのだ。

先だつては敵水雷戦隊を追い払い、今日の前には新たな獲物として日本海軍の超弩級戦艦二隻が現れた。

「敵戦艦は『イセ・タイプ』ならびに『ヤマシロ・タイプ』と認む！」

「敵艦速度十八ノット、距離二万メートル。丁字を描きつつあります！」

「……機関を損傷したのかな……？」

キンケードの見たところ、敵戦艦二隻はいずれも大きく損傷しているように見えた。ヤマシロ・タイプなど艦後部の主砲塔二基が文字通り粉碎され、スクラップ置き場と化している。

「全艦、針路そのまま。一気に殲滅しろ」

艦隊は、針路、速度共に変える事なく進軍を続ける。損傷した二隻に丁字を描かれたところで対応する必要をキンケードは認めなか

つた。

『日向』と『扶桑』二隻の絶望的な戦いが、幕を開けようとしていた。

1941トック攻防5（前書き）

とうとうトック編終了です！

この後はまたタイムスリップにいくです！

1941 トラック攻防 5

トラック南方海上『伊ー19』潜水艦

「浮上！」

艦長の檣原の指示により、これまで十二時間近く海中にとどまっていた艦は、ようやく浮上する事に成功した。

艦橋のハッチを開けて顔を出した檣原の視界に写る艦体には、至近距離で炸裂した爆雷によって刻まれた傷が至る所に残っている。

『伊ー19』潜水艦は、味方秘密兵器による攻撃の成果を確認し報告した後、即座に海域からの離脱を図った。だが、雷撃を受け混乱しているイギリス艦隊の一角がこちらの推進音を探知。そのまま熾烈な潜水艦狩りが始まったのだ。

必死に逃げまどった『伊ー19』だったが、応援に駆け付けた対潜哨戒機まで加わった爆雷の飽和攻撃を前にその全てを回避する事は叶わず、甚大な損害を被る事になった。その攻撃から逃れるために、ある重要な情報をトラックの司令部に伝達する事に失敗していた。

その時、艦橋周辺のアンテナ設備の補修に当たっていた兵員から報告が行われる。

「艦長、やはりここでの応急修理では通信は不可能です。どこかの泊地で本格的な修理を受けなくては」

「そうか」

そう返す檣原。その視線は目の前の海域に向けられている。

深夜にそこで攻撃を受けたイギリス艦隊の姿はすでにそこになく、わずかに重油の薄膜がその痕跡をとどめるに過ぎない。

イギリス艦隊、トラックへの進撃を再開。

この伝達の失敗は、致命的打撃として日本軍に返ってきた。

トラック環礁南方 高度六千メートル

激戦は、空でも続いていた。

「『サシバ』『ツバメ』補給のため竹島に後退！」

「第一次攻撃隊、間もなく帰還します。損傷機多数！不時着準備！」

「第二次攻撃隊、ラバウルへの投弾開始！迎撃による被害甚大！」

統合航空軍空中管制機『天空』

そこは無数の情報が交差する、情報の集積拠点と化していた。

レーダーの画面はラバウル―トラック間に存在する敵味方の無数の航空戦力を映し出し、戦況表示板には使用不能になったトラックとラバウルの滑走路が次々と赤の水性ペンでバツ印がつけられている。

トラックのすぐ南には艦隊決戦の現場もある。

すでに処理能力は『天空』の限界を超えようとしていた。

「これよりトラック方面の航空迎撃の全権を、夏島航空管制に移管。こちらは早期警戒とラバウルへの航空攻撃の指揮に専念する！」

指揮官席に座った統合航空軍の航空管制官が苦渋の決断を下す。これ以上は無線すら混線で使用不能になる恐れがあった。

そこにさらなる報告が舞い込む。

「敵戦闘機の一群が本機を目指して接近中です！」

「回避！護衛の戦闘機隊を差し向ける！」

指示を受け『天空』はその巨体を傾け、ゆっくりと旋回する。機内の人間はそれぞれ何かにつかまってその傾斜をやり過ごしている。

「ん？」

その時、機体が旋回したせいで一時的にレーダー波の照射角度が変わった。

その水上レーダーの探知範囲ギリギリに、何かが移ったように担当の兵士は見えた。

だが、それを確認する余裕はない。
激しい衝撃が機体を襲う！

「右翼被弾！」

同時に機内に煙が生じ始める。

「お前！今すぐ消火に当たれ！他は航空管制に専念！」
「了解！」

水上レーダーを担当していた兵士が指名され、急いで消火器を抱えて火災が発生していると思しき場所に急行する。

その間に、傾斜を回復した機体のレーダーから先ほどの反応は消えていた。

アメリカ艦隊戦艦部隊二群『コロラド』

「勝負あったな」

指揮官であるキンケードの口元には笑みが浮かんでいる。

海戦は、その勝敗を決しようとしていた。

キンケードの視線の先には、全ての砲塔を破壊され大破した二隻のナガト・タイプの姿がある。決死の抵抗と時間稼ぎを試みたイセ・タイプとヤマシロ・タイプはすでにその姿を海面に留めていない。

「しかし、ここまで粘るとは…」

最初に艦隊の前に立ちふさがったイセ・タイプとヤマシロ・タイプは鎧袖一触で粉碎したが、その後のナガト・タイプとの戦闘ではこちらにも損害を被った。

ナガト・タイプは巡洋艦部隊の猛射を浴びながらも必死の反撃を行い、おそらく艦橋を直撃した巡洋艦のハインチ砲弾で射撃に必要な電路が断たれるまで射撃を継続していた。

当初ナガト・タイプが相手取っていたサウスダコタとインディアナはすでに大破し、機関停止状態で漂流している。傾斜しているところから考えて、水中弾による浸水被害を相当程度被っているようだ。生還は難しいだろう。

「艦隊に集結を命じる。このままでは水雷突撃に不安がある」

キンケードの指揮を受け、通信士が艦隊に『集マレ』を打電する。その時、彼らに油断が無かったと言えば、それは嘘になる。

脅威は、頭上から迫っていた。

「敵航空機捕捉！本艦直上！」

「なに！？」

次の瞬間、

ドオオオ…………ン！

後方から轟音が轟いた。

「何があつた！」

「こ、後方の味方戦艦が爆撃を受けた模様！メリーランド大破の模様！火災の煙で後方の様子が伺えません！」

見張りの絶叫が、艦橋に木霊した。

「馬鹿な……！」

キンケードは、一瞬にして勝者から敗者に転落した。

その視界の端には、再度の突撃態勢にある敵水雷戦隊が、味方駆逐艦の防御線を粉碎する姿が写っていた。

「突撃、突撃、突撃だ！」

『最上』艦橋。

そこでは、司令の伊崎が鬼神のごとき表情で、艦隊に突撃を命じていた。

「敵駆逐艦接近中！」

「全艦撃ち方始め！魚雷は使つな！」

号令を受け、艦隊の駆逐艦が一斉に砲撃を開始する。だが、最上は砲撃しない。

なぜ、最上以下四隻が水雷戦隊に配備されたか？

それは連日の対空戦で弾薬が枯渇したからだ。

徹甲弾以外を含めても二十斉射分に満たない弾薬では、まともな戦闘は難しかった。ゆえに、その雷装を生かして水雷戦隊の先頭を『弾よけ』として突っ込ませたのだ。

統制の取れている日本側水雷戦隊に対し、アメリカ側はこれまでの海戦で隊列が乱れ組織だった抵抗が十分に出来ていない。

薄い弾幕の中を、『最上』以下の艦艇は一気に突っ込んでいく。

「敵戦艦まで距離一万メートル！」

「敵戦艦、高角砲、副砲の射撃始めました！」

「撃ち返せ！」

即座に艦隊の砲撃目標は敵戦艦に変更される。

放たれる十二・七センチ砲弾は戦艦の主要防御区画は貫けないが、副砲や高角砲、測距儀などの脆弱な上部構造物を破壊するには十分な威力だ。

両軍の間で、激しい砲火が交わされる。

だが、いまだ唐突な爆撃の混乱から回復できていない敵艦隊の砲撃は精彩を欠いている。日本艦隊の砲撃も、高速航行の動揺からまともな照準とは言い難いが、それでも数発が命中する。

そのまま一気に日本水雷戦隊は、敵戦艦との距離を詰めていく。

そしてとうとう、待ちに待った瞬間が訪れる。

「距離四千メートル！」

「雷撃開始！」

裂帛の号令を受け、これまで直進を続けて来た『最上』は急速に

舵を切る。

同時に魚雷発射管から、多数の魚雷が一斉に放たれる。
そのまま艦隊は、敵戦艦に背を向けて、一目散に撤退していく。

「魚のえさになれ、アメ公」

伊崎が小さくつぶやいた。

直後、彼らの背後、アメリカ戦艦群の横腹に無数の水柱が生じた。

トラック環礁 夏島司令所

「第一艦隊より入電『我、敵艦隊ヲ撃滅セリ』！」

「やったか!？」

その報告を聞いて、司令部に歓声が生じる。

「これで、トラックに迫る敵艦隊の脅威は排除できたという事か」

安堵のため息とともに、司令が呟く。周囲の面々も緊張が解けた
という表情をしている。

それを見て、司令が気を取り直すように言う。

「諸君、今も航空隊はこのトラックを守るために決死の戦いを続けているのだ。この後は敵艦隊残余に対する追撃戦やラバウルとの航空戦が続く事になる。気を緩めないように」

そう言われ、引き締まった表情を取り戻す司令所の面々。

しかし、それでも彼らには油断があったのだ。

「伝令！」

突然、息を切らした伝令が司令所に駆けこんできた。

そのまま、司令の許しも得ずに叫ぶ。

「監視所より報告！敵戦艦が接近しています！すでに目と鼻の先です！」

「なんだと！？」

即座に詳細を問いただそうとする司令。

その返答は、頭上から届く激震によってなされた。

トラック壊滅。

海戦の勝利を打ち消して余りあるその事は、この時点で確定した。

20XX〜突然の帰還〜（前書き）

今回は久しぶりにラノベ的な展開なのです！

20XX〜突然の帰還〜

いきなり体が浮遊感に包まれた。
慌てた俺は腕の中の本城を強く抱きしめた。本城も抱き返してくる。

そして、唐突に浮遊感は消えた。
それまでつむっていた目を開く。

そこは見慣れた、俺の親父のやっていた廃工場。周りには場違いなプラレールが幾重にも取り囲んでいる。走っているのがなぜか三百系新幹線ばかりだ。

周りには、これを組み立てたと思しき筋骨隆々の男達。そして…

「山田！」

そう、ここは元の時代だった！

俺の胸に喜びが溢れかえり…

その時、俺は周囲の空気に気がついた。

周囲の男ども（よく見ればうちの学校のラグビー部の奴ら）は丸くしていた目を憎しみに染め、山田の奴は裏切られたと目で語っている。

その隣にいる風間さんはなぜかデジカメを取り出して、俺と本城をパシャリパシャリとやっている。

そういえば、俺は本城と抱き合ったままだった！

慌てて離そうとするが、本城は必死にしがみついて離れない。

「…夏樹、服…！」

その時、本城が小さく恥ずかしそうに（！）押し殺した声で言った。

ふと、肌の感触がおかしい事に気がつく。まるで生肌に触れているような…。

…あれ？どうして俺と本城は、服を着てないんですか？

気づけば俺と本城は、生まれたままの姿で、衆目の面前で抱き合っていた。

……………（思考停止中）。

完全に固まってしまった俺達を見て、山田がラグビー部の連中の肩を叩いて外を示す。とりあえず外に出ようというサインだ。

風間さんは自分の羽織っていたカーディガンを脱いで、俺達の近くに置いてくれた。…いや、その後にデジカメを動画撮影モードにして置いておくのはおかしいだろ！

俺達の現代帰還は、史上最大の混乱の中で始まった。

とりあえず、服を着た。

俺は工場の中のロッカーを探して、なんとかカビ臭い作業着を二着準備した。

今の俺と本城は、素肌の上に作業着を着ただけの状態である。特に本城は、サイズが合わずぶかぶかで、その作業着の中身を知っている俺としては鼻血が出そうだった。

本城の方は完全に真っ赤になってぶつぶつ言っている。まあ、なんだ。俺も抱きしめているうちに息子が勝手に元気になって、それが思いっきりこすりつけられてしまったわけだ。はつきり言っただけでもおかしくない行為だと自覚している。

今俺は、本城に背中を向けて正座している状況だ。本城は体育座りでまだぶつぶつ言っただけデジカメのデータを消去している。気まずい。

とにかく何か話さなければと一番気になっていた事を尋ねる。

「あつ、その、なんだ。俺達は帰れないんじゃないのか？」

そう、俺達はあの過去の世界で巨大核爆弾を起爆させない事には帰れないと本城は言っていたのだ。それなのに、今俺達はこちらにいる。

その理由を聞きたかった。

「……ここにあるプラレールの裏を見てみる……」

まだ顔を合わせようとしないうちに本城に促され、レールを一枚取ってみる。

すると、その裏にはうつすらと複雑な文様が刻まれているのが見えた。

「それが魔力回路になっていて、上を車両が走ると起動するようにしてある……」

「こんなものがあるのなら、最初からこれを使えばいいじゃないか！」

さっきまでの苦悩は何だったんだ！

「私だつて忘れてたんだ！それに、風間がちゃんと組み立ててくれるかわからなかったし……」

真っ赤になって叫ぶ本城。止める！顔を上げるとささやかな胸元が……！

俺の視線に気がついた本城が、虫けらを見る目つきで俺を睨んでくる。だんだん調子に戻ってきたようです。

「ああ、それより、なんで俺達は裸になったんだ？」

「…元々私だけ帰ってくるように設定してある。重量が増えたと負荷が大きくなつて失敗する可能性があったから、魔方陣が自動で服だけ排除したんだ…」

なるほど、そういう理由だったんですか。俺が原因ですね。全然俺達の空気改善に役立ちません、はい。

その時、ようやく調子を取り戻した本城が、それはもう悪い事を考えている時の表情を浮かべて立ち上がる。

「夏樹、とりあえず外のラグビー部の連中を呼んでくれ」

「…何をするつもりですか本城さん？」

「連中の記憶を消し去ってやる」

本城の命を受けた俺が工場から出ると、そこにはラグビー部の連中と山田があーでもないこうでもないと話合っている。

「やっぱり火あぶりか？」

「いや、それだとすぐに死んじゃう。水責めを提案する」

「どうせなら全部少しずつやっては？」

即座に回れ右しようとする俺の肩を、山田の手ががちりと掴む。

「お、おい、山田？俺としてはやましい事は何も無いんだが…」

「もう種は残したんだろ。安心して逝け」

嫌だ！俺は本当に何もしてないんだ！

「まあ待て。一応工藤の言い分も聞いてやろうじゃないか」

そう言つて止めるのはラグビー部の部長。言つてゐる事は俺をかばつてゐるように聞こえるけど、その眼には誰よりも濃厚に凝縮された憎しみが宿つてゐるように見えるのですがはい。

一瞬の猶予が出来た俺は、本城の言葉を全員に告げる。

「ほ、本城が中に来てくれと呼んで。なんか話があるとか何とか」「チツ……。しょうがねー。お前の処刑は後にしてやる」

本城が呼んでると聞いて渋谷工場に入っていくラグビー部員達と山田。今だけは、彼らの無事を祈る。

「あ？お前何一人で残つてゐるんだ？一緒に来い。逃亡防止だ」

「えっ？い、嫌だ！俺は呼ばれてない！無実だ！」

素早く素巻き状態にされた俺は、端の紐で引きずられて（担ぐなんて上品な事はしてもらえない）再び本城が待つ工場まぐつに入る事になった。

工場に入ると、本城が外向きのいじらしい恥ずかしそうな表情を浮かべていた。この変わり身の早さにはいつも驚かされる。

「あ、あのね？さっきの事に関してなんだけど、みんな見なかった

事にしてくれる?」

お願いする本城に、腰ぬけにされている山田とラグビー部員達。いい加減中身に気がつけ。

「後ね、やっぱり私、夏樹君の事が好きなの!」

突然のカミングアウトの犠牲になったのは俺だった。即座に殺意に溢れた視線が実力行使を伴って俺を押し潰そうとする! いや、踏むな! 踏まないで! アアーーーー!

「み、みんな、いじめないで上げて!」

本城が慌てたふりをして駆け寄ってくる。お前が元凶だろうと罵りたくなるが、下手な事を言って事故に見せかけて殺されてはたまらない。沈黙は金である。

「そ、それじゃ。さっきの事は忘れてね。お願い!」

「本城さんがそこまで言うなら…」

猛烈に渋々といった感じでうなずくラグビー部員達。だが、山田だけは何か不安そうな表情を浮かべている。その直感を俺は称賛する。もつと昔に俺にも欲しかった!

「言っ たな?」

次の瞬間、本城がニヤリと笑うと隠し持っていたボタンを押す!

同時に俺の口を唇で塞…はあ!?

ボタンを押すと同時に、工場の至る所から白いガスが噴き出し、ラグビー部の部員達と突然のキスで硬直する俺を襲う!

呼吸も忘れる俺の口の中を本城の小さな舌が舐めまわし、息継ぎも出来ない俺は酸欠と恥ずかしさで真っ赤になる。その目の前で、ラグビー部の連中がバタバタと倒れて行く。山田が「そうだ！以前も…」と気になる事を口走りながらこちらも倒れた。

三十秒もしないで、ガスは消えた。

後には、死屍累々の状態のラグビー部員達と、キスを終え、至近距離で顔を見合わせる俺達二人、そして工場の扉から中を覗き込んでいた風間さんが残った。

「ほほほほ本城！？」

「…（恥ずかしそうな笑顔）」

「うわゝ。本城さんすごい！」

風間さんに見られた。死ぬしかないと思う。というか本城が急にかわいく見えてきた自分を殺したい。

結局、全ての問題が未解決のまま、俺達の混乱は続く事になる。

1941〜チキンレース〜1（前書き）

すみません、やっぱり満州戦が書きたくて、投稿なのです…

1941〜チキンレース〜1

十二月二十日。シベリア鉄道沿線。

「アゴン
発射！」

鉄路から少し離れた小高い丘に、彼らは展開していた。

本来であれば牡丹江付近で敵軍主力との決戦に突入する東部方面軍への増援だった彼らは、情勢の急変を受け、急遽輸送用の鉄道を降りて、この地に陣地を構築していた。

全員で寝る間も惜しんで掘り続けた陣地には、半ば雪に埋もれるようにして十門以上の百二十二ミリ砲が展開していた。

護衛の歩兵部隊が一個中隊も存在しないという過酷な状況だが、彼らはここで敵を足止めするように司令部に命じられていた。

「装填急げ！第二射、発射！」

指揮官の号令と同時に、先ほどの射撃の結果から仰角を調整した第二射が放たれる。

だが、その砲撃がまともな損害を与える事はない。

砲兵指揮官が観測所を置いている丘の頂上。

そこからは、雪原を鷲進する無数の戦車と装甲車、その轍をたどるトラックの隊列が映し出されていた。

事前に散開して対砲撃陣形を整えた敵に、砲撃はまともな打撃を与える事も出来ない。

逆に、彼らの命が風前の灯だった。

「……！隊長、敵隊列の後方に自走砲と思しき隊列を発見！停車して照準中です！」

「……！陣地転換作業急げ！」

報告を受け、即座に事前に準備していた第二陣地への移動を決定する指揮官。

だが、その判断は遅すぎた。

「敵自走砲発砲！」

「総員、着弾に備えろ！」

それが指揮官の最期の言葉になった。

事前の航空偵察で敵砲兵の展開場所に当たりをつけていた自走砲部隊は、砲兵の本隊が展開している丘の中腹だけではなく、頂上の砲兵観測所までまんべんなく対人榴弾の雨を叩きこんでいた。

敵砲兵の沈黙を確認した自走砲部隊は、砲撃のために五分ほど遅れてしまった進撃スケジュールを取り戻すため、護衛の歩兵部隊と共に急ぎ進撃を再開した。

わざわざ掃討部隊など送り込まない。

補給の途絶えた敵部隊は、十二月のシベリアの冷気が自然に抹殺してくれるからだ。

また、彼らにもその余裕はなかった。

ごく短時間での反攻部隊の編成。

それは彼らに、極めて厳しい作戦期間の制約を与えていた。

事態は、日ソ両軍の司令官の予想外の状況になりつつあった。

十二月二十日 牡丹江正面戦線

「退避——！」

軍曹の号令を受け、兵達は即座に塹壕に逃げ込む。

直後、着弾。

ソ連軍が釣瓶打ちしてくる百二十二ミリ砲弾は、塹壕から突出する位置に展開していた側防射撃用の機銃座を木端微塵に打ち砕き、塹壕の到る所を衝撃で崩し、ごく稀に、不運な兵士が塹壕の中に飛び込んできた砲弾の直撃を受けミンチ以下の存在になり果てていた。ソ連軍砲兵は、補給線が途切れているとは到底思えない凄まじい攻勢準備砲撃を繰り広げていた。

その時、背後からも砲声が轟く。

日本軍の十センチカノンを中心とした軍団直轄砲兵が、敵砲兵への砲迫射撃を開始する。

だが、反撃を確認したソ連軍砲兵は即座に陣地転換を開始。同時にこれまで隠蔽されていた砲兵が所在を暴露した間抜けな日本軍砲兵に逆撃を仕掛ける。西部と違い、東部ソ連軍の砲撃は完全な縦深しゅうしん一斉射撃（前線だけでなく、その後方の二線、三線陣地まで同時に砲撃を加える事）であり、E E Uとの激戦からの戦訓を十分に生かしている。

「！隊長、敵戦車接近中！」

「くそ！戦車部隊はまだか！？」

そして、準備砲撃から立ち直る間を与えない機甲突撃。鋼鉄のように堅い凍土を必死になつて掘つて埋めた対戦車地雷は、準備砲撃でその大半を破壊され、ただの歩兵部隊に戦車の突撃を阻止する力はない。

さらに、その後ろから一気に突撃を開始する敵歩兵部隊。味方砲兵の突撃破砕射撃が降り注ぐが、その弾幕はあまりにも薄い。

すでにその後方では、第二、第三梯団が、梯団攻撃の準備を整え進撃を始めている。ていだんこうげき

日満両軍は、ソ連軍に多大な出血を強いながらも、その強大な圧

力に徐々に押し込まれつつあった。

原因は、日本側の意志統一の不徹底だった。

石原は『最終目標をハバロフスクに置く』という言葉で、軍そのものの最終目的として提示しており、この第一段階ではヴォロシロフの制圧さえできれば十分だと考えていた。

しかし、石原の考えを『現状の戦力で一気にハバロフスクを襲え』という意味に前線司令部は誤解した。不幸にも、彼らにそれを実行可能な戦力があつた事がその考えを支えてしまった。

ソ連軍側も、ヴォロシロフの陥落でウラジオストクが孤立した事に衝撃を受けていたが、それでも日本軍の進軍はそこでストップだと考えた。

石原とジューコフのこの後の予測はほぼ同じであり、ヴォロシロフから東部方面軍の側面を日本側が伺い、それと牡丹江の日本軍の両方に注意を払いながら、ソ連側が後退して春までは戦線の整理を優先すると考えたのだ。

だが、出来レースとなるはずのその動きは、日本軍の無謀な突撃でチキンレースに変わった。

日本側の集成装甲軍は、ハバロフスクという夢を見てひたすらに凍土をかけ続け、ソ連軍東部方面軍は、この苦境を正面突破からの逆包囲で一気に巻き返そうとした。

どちらもすでに補給線が存在せず、手持ちの物資でどこまで突っ込めるかの勝負であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7283t/>

僕と幼なじみと連合艦隊

2011年11月17日20時16分発行